

ふきおくるけしきの杜の朝かせも青葉か上はおどなかりけり 景
 ぼらくど古葉こはれて白かしのみつえさしそふ時はきにけり 廣
 月かけもそきとほるまで若楓すしき夏になりけるかな 直
 夏木立みのえ若葉のくはりてうひくしくもにはふ露かき 廣
 青葉のみふくとおもひし朝風にまひの花ちるかた岡の杜 松
 根 海 兄 俊 樹

卯花

うのはな

花の色白かれり、月にたどへ、雪にまかふまど、よめり。又卯を愛にかけて、よむ
 もあり。

うのはな さけるあたり 卯花くたし おどなきあみ
 雪どのみ 身をうの花の ひとさかり 垣ねつゝき
 時あらぬ 月かど見えて うつき原 賤か袖かき
 月と見て あなうの花の 庭の面に この下月夜
 神かきの をちのかきねの くれぬめり 月なきほどの
 夕つく夜 井手こす波と 月かけと さける卯の花

白 妙 にくるれり月と 卯花 山 卯花つく夜
 うつ木垣 露のひかりも ゆふしてと 枝白たへ
 月なれや さかりもまると あどたぬて 垣ねのしも
 夕まくれ 花の中かき みちたえて 道見えぬまで
 雪なれや 小野の細道

名所

賀茂川 山城 音羽山 桂の里同 宇治の里同 小野の里同 岩陰山同
 吉野山 大和 初瀬川同 玉川の里 陸奥 白川同 住吉の岸 攝津

後 時わかすふれる雪かど見るまでに垣根もたわにさけるうの花 讀人不知
 同 白妙にははふ垣根のうの花のうくもきてとふ人のなきかな 同
 拾 うの花のさけるあたり宿りせしねぬにわけぬとおどろかれけり 重
 同 わかやどの垣ねや春をへたつらむ夏きにけりと見ゆる卯の花 順
 後拾 雪どのみあやまたれつゝ卯の花に冬こもれりと見ゆる山里 道
 金 いつれをかわきてをらまし山里のかきねつゝきに咲けるうの花 匡 房 濟

千 夕月夜波のめく影も卯の花の咲けるかきねのさやけかりけり
 同 月の花のよそめかりけり山里の垣ねはかりにふれる白雪
 月 眞柴かる賤さいそきそ卯花よ夕やみもあし小野の細道
 續 久かたの月のかけとも見ゆるかなかつらのさどにさける卯の花
 同 年をへてかよひなれたる山里の門とふはかりさける卯の花
 夕月夜かきまもどめてはのめくやはつうの花のさけるなるらむ
 夕月夜さすやかきねの卯の花のいりての後空にまらぬ
 月をさへ花かどろ見るうつ木垣まかへし夜半のころならひに
 卯花をさなからかこふまかきに月ひかりもへたてさりけり
 うの花のさけるあたり心せよ月夜よしとて人もとひけり
 我門のわさ田うへき日を近みかきねのうつき花さきにけり
 ひまもなくさとの卯の花さきにけりとはん垣根も道見ぬまで
 有明の月はた落ちてうの花のはふかきねとなりけるかき
 郭公またるころ卯の花のとなり咲くもたよりかりけり
 卯月きて花にありけり山里の垣の小柴とあもひしものを

久 景 廣 宣 嵩 蘆 春 千 契 長 相 讀 人 不 知
 胤 樹 海 長 巖 庵 海 蔭 冲 流 方 家 平 房

あかさりし春をへたつるかき根にもさくうの花のあはれなりけり 春 門

新竹

わがたけ

新に生ひ出たる竹をいふ。ことしおひの竹とも、わか竹ともいひて、のび易きこと。
 又風になひき、露おくななどをよむあり。

今年生ひの 宿のわか竹 月もらぬ 千代まであひく
 ことしより すなほにのひよ かけさす かけをひろむる
 うちあひく まかきの竹 みどりそふ 竹のまき葉
 かけそふ 枝さしかはす 竹の子 庭のくれ竹
 このきみ 庭もをくらく うらわかき 千ひろのかけ

新 年ことよあひそふ竹のよをへてかはらぬ色を誰どかは見む 貫 之
 堀 すしさにいく夜かねぬるくれ竹のはやしは夏のふしとなりけり 匡 房
 さのふより今日はよなかきわか竹にかねて千尋のかけも見えけり 千 蔭
 夏の夜の月のかけにもたわむらむまたうらわかきまどのなよ竹 同

ことしおひの竹の若葉も露けきは世のうきふしをまたきえるらむ 弘 訓
 ぞめおきし籬の外におひ出て、かけをひろむる宿のわか竹 茂 岳
 今年生ひの園の若竹風ふけはそよくはかりになりけるかな 景 樹
 竹の子はまた世もりておや竹のさわく風にもなひかさりけり 足 穂

郭公

ほこりきす

待郭公

ほこりきすなまつ

ひどこゑは まちつるものを こゑぬれて 杉のむらたち
 なかぬ夜も はのめくこゑを どはさかる 卯の花かけ
 さくらたひに かたらふこゑを 人つての ねぬ人さへそ
 夕つくよ 聲のにはひ 鳴きすて、 うつとともなく
 さよふけて 花たちとぎに うたてなく さけともわかす
 人 傳 に などか來鳴かぬ あくかれて 一聲もらす
 夜をかさね 雲になくなり うらみても いねさきげとや
 雨はるゝ さても初音や ひらくも いくたひとひつ
 をらかへり ねよわらはれて 横 雲 に 人しれすこそ

玄のひ音の かたみに名のる 五月雨に われもうき世に
 宿こゑに 雲のあなたに 五月やみ ねたくも外に
 そことなく うはのそらなる おのか五月 いくそのまつを
 さやかまも 涙の見えぬ 里 わく 目をさましつゝ
 今のなけ いつち行くらん 枕 と ふ ことのはうれし
 ねもやらて 夢にもさゝつ さ夜ふけて 月のみのこる

●名所

桂の里 山城 常石山 同 片岡の杜 同 深草の里 同 伏見の里 同 淀の渡 同
 初瀬山 大和 三輪の里 同 那良志の里 同 隅田川 武藏 二見浦 伊勢 近坂山 近江
 繪 島 淡路 生田杜 攝津

万 家にゆきておにをかたらむ足引の山ほどゝきす一こゑもかな 廣 繩
 同 さ夜ふけてあかつき月にかけ見えておくほとゝきすさけのちつかし 池 主
 同 神さひの岩せの森のほとゝきすならしの岡にいつかさなかも 志貴皇子
 同 旅にして妻こひすらし郭公神南備山にさ夜ふけてなく 讀人不知

同	古	同	同	同	同	同	拾	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同																					
万	同	同	同	同	同	同	後	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同																					
藤赤みのちらまくをしみほと	夏山になくはと	音羽山今朝こえくれ	さみたれにもおもひをれ	はと	いつの間にさつき	二聲どきく	たか袖におもひよそ	春かけてきかむ	初聲のきかまほし	夏くれの深草山のほ	行きやうらて山路くらし	このさどにかなる人か	後拾	同	同	同	同	同	同	同	同																				
野に郭公なく聲さけの時きけり	さす心わらぬものおもふわれに聲をかせう	の郭公梢はるかに今そなくなる	郭公夜ふかくなきていつちゆくらむ	さすまたしきほどの聲をかかはや	ぬらむ足曳の山ほと	す今そなくなる	へてはと	もこそ思ひしか山ほと	に郭公夜ふかく目をさましつるかあ	とさなく聲さけくなりまさるかな	つはと	す今一聲のきかまほしさに	郭公まつはと	同	同	同	同	同	同	同	同																				
命	讀人不知	讀人不知	讀人不知	讀人不知	同	同	同	同	同	同	同	同	の後もねられさりけり	道	明	能	雅	成	成	成	成																				
													きのふまてをしみし花のわすられて今日のまたる	郭公かな	夜たにわけいたつねてきかむ郭公まのたの森のかたに鳴くなり	郭公なきつとかなる人つての言の葉さへぞうれしかりける	はと	まつの人の宿をいらして郭公をちの山へをなきすくくなり	郭公聲のたえまにいてる月のかけほのかにもあさわたるかな	あさつとも誰にかいはんほと	はと	さみたれの雲のたえまに月として山郭公そらに鳴くあり	すさぬるか夜半のねさめの郭公聲はまくらにある心ちして	風越を夕こえくれはほと	夕月夜いるさの山の木かくれはほのかに名はるほと	有明の月はまたぬよ出てぬれどなほ山ふかさはと	雨うよく花橋に風すきて山ほと	俊	親	宗	清	俊	成	忠	俊	式	筑	成	雅	能	明
													命	衡	因	光	元	前	部	兼	保	成	輔	家	宗	成															
																											五	月													

同	新	同	同	同	千	同	詞	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	新	同	同	同	千	同	詞	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
雨うよく花橋に風すきて山ほと	有明の月はまたぬよ出てぬれど	夕月夜いるさの山の木かくれ	風越を夕こえくれはほと	すさぬるか夜半のねさめの郭公聲	さみたれの雲のたえまに月として	はと	あさつとも誰にかいはんほと	郭公聲のたえまにいてる月のかけ	はと	まつの人の宿をいらして郭公をち	郭公なきつとかなる人つての言	夜たにわけいたつねてきかむ郭公	きのふまてをしみし花のわすら	郭公ま	のたの森	のかたに鳴	なり			
俊	親	宗	清	俊	成	忠	俊	式	筑	成	成	雅	能	明	道	命				
成	宗	家	輔	成	保	兼	頼	部	前	元	光	因	衡	命						

新 月 同 同 同 同 代 同

五月雨の月はつれなき山よりひとりもいつるほどなきかな
 夜もすからまつをはきらて郭公いかなる山のかけになくらむ
 ほどなき雲井に鳴きてすきぬれを聲はこゝろにどまるなりけり
 ぬさめするたよりにきけは郭公つらき人さへうれしかりけり
 一聲とまちつることはほどなきまたさかぬ間の心かりけり
 さらぬたに都戀しきまのゝめにきみたもよほす郭公かき
 あやにくにきかまほしきは郭公まのふるほどの初音かりけり
 月をたにあかすとおもひてぬぬものを子規さへなきわたるかき
 足曳の山路をゆけはほどなき雲よりおくの梢にそあく
 立花のかをれるやどの夕くれに二こゑなきてゆくほどなき
 ほどなきすたゝ一聲にみし春の花の名こりもわすられにけり
 月おろき夕の月のたえまよりまつ聲もらすほどなきすかな
 玉くしけ箱根の山の明はのにふた聲名のるほどなきすかき
 ことさらけうつ木垣してたれをしもまつとかおもふ山ほどなき
 横雲のにはひてあくるうきたより聲はきやかになくほどなき

定 成 成 通 行 勝 小 貫 契 眞 春 同 同 千 同
 家 範 仲 親 盛 命 辨 之 沖 淵 海 隆

雨すきてあやめ露ちる軒はよりなくぬもかをる郭公かき
 ほどなきすなく一聲にたひちゆくいくその人の袖ぬらすらむ
 すみた川堤にたちて舟まては水上とほくなくほどなき
 たつねてもまたさかさりしほどなきすねさめをりよき夜半の一聲
 五月山すその草をわけゆけは空にもまけくなくほどなき
 ほどなきすまのふ心やゆるふらむ人しつまれる夜はになくなり
 舟とめていつことさけは磯山の松の梢になくほどなき
 やどりせし花橋も實になれば夜かれかちなる山郭公
 ちをまつとねさりしよはの數ほどはこゝにのみなけ山ほどなき
 夏の夜のふかくさ山はほどなきすふしみの夢のあとにきくあり
 よひの雨につれなかりしは有明の月やまちけむやまほどなき
 栗田山松の葉うつむえら雲のはれぬ朝けになく郭公
 かた岡の杜の梢になきすて、神山遠くゆくほどなき
 あやめかる淀の澤邊をほどなきすすしき音にもなきわたるかな

同 同 同 宣 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 長 庵 直 流 巖 樹 鷹 功

○六月

菖蒲

あやめくさ

古の支那の故事によりて、五月五日にこれを取りて、軒にふき籠にかけなごして、邪氣を拂ふなどいひ傳へたり、今もこれらを思ひ合せてよむもよく、又た、にその花を愛する心にもよむへし。

あやめくさ	ぬれてもひかん	なかきねそ	枕にむすふ
池みつに	末葉の露も	ひきかけて	あやめひくらし
引きむすふ	あやめもわかぬ	たれもけふ	袖にかをれる
あやめふく	かりふく軒の	澤みつに	水かくれてしも
まけりあふ	雫もかをる	花あやめ	かりねのどこ
あやめかる	あやめかたしく	おひしける	まくらにゆふ
つまにふく	あかさためし	花あやめ	かをらざりせば

●名所

堀切 武蔵 淀野 山城 益田の池 大和 住の江 攝津 玉江 同 浅香沼 陸奥

拾 今日見れり玉の臺もなかりけり菖蒲の草の庵のみして	讀人不知
同 萬代にかはらぬもの五月雨のまづくにかをるあやめなりけり	能宣
新 うちまめりあやめそかをるほどさすなくや五月の雨のゆふくれ	攝政
勅 ふかき江に今日あらはるゝ菖蒲草年のを長きためしにそひく	前關白
六 水かくれておふるさ月のあやめ草かをたつねてや人のひくらむ	讀人不知
續 玉もよる池の汀のあやめ草ひくへきほどになりけるかき	堀川
代 年をへてつきせぬものあやめ草深きよどのにひけりなりけり	同
若こもをかりちの池の名のみして今日さど人のあやめひくきり	契沖
子日せしおなし野澤に今日もまた千代のためしのあやめをそひく	同
さらに今日ふくとはそれと昔深きのはあやめもわかれさりけり	蘆庵
あやめふく今日のためしを過さしと賤はよどのにおりたちけり	春海
松かえの千とせをうつす池水におなしためしのあやめをそひく	枝直
山しろの淀の澤邊のあやめ草朝風なからふきてけるかき	有功

香をめて、花をもめて、又實をもめつるよしをよみ、又垂仁天皇の朝、田道間守を
して、この實を外國にもどめしめたまひし故事など、よむもあり。

いにしへを 昔の人の 袖ふれし 夕くれの庭
 にはひくる 昔のふならひの さらたき にはふ橘
 たか袖の なのかしかな 昔かたり うつりにけりか
 軒ちかき 袖の香ふかき ひたてりよ にはひさやけき
 たちよれば 匂ひゆくらん その葉さへ 夢のむかしの
 下かけに 夕風に契る うたゝね 村雨のつゆ
 ふるさど 妹か手まくら 赤き人の 枕にかをる
 袖ふれし わたるみはしに 風のつて ほどよきすの宿
 をすの外 物ぬすれせぬ かつかしく 實さへ花さへ
 雲の庭 夜半の手枕 橘のかけふじ道 香にははふきり
 香をかくはしみ

●名所

志賀 近江 飛鳥の里 大和 橘 寺河内 五月山 攝津

古 さ月まつ花立花の香をかけの昔のひとの袖のかそする 讀人不知
 後拾 五月雨の空なつかしくにははふかな花たち花に風やふくらむ 相 摸
 詞 宿ちかく花橘のほりうゑし昔を去のふ妻となりけり 花山院
 同 五月やみ花橘にふく風いたか里までかにはひゆくらむ 良 暹
 千 我やどの花橘にふく風をたか里よりとたかなかむらむ 親 宗
 同 うき雲のいさよふ宵の村雨に追風まるくにはふ立花 家 基
 同 をりしもあれ花橘のかをるかなむかしを見つる夢のまくらに 公 衛
 新 ことしより花ささそむる橘のいかて昔の香にははふらむ 家 隆
 同 橘のにははふあたりのうたゝねの夢も昔のそての香をする 俊 成
 月 たか里の花橘をさうひきてわかものかほに風かをるらむ 廣 言
 代 橘の袖の香はかりむかしにて移りにけりなふるきみやこの 定 家
 同 わすらるゝ昔をいまになすもの花橘のにははひなりけり 六 條
 いにしへを去のふ軒はの風過ぎてひもとくふみにかをる立花 枝 直

香をどめてどはれやまると窓ちかくうゑし立花花さきにけり
 おもほえすすたれうこから夕風に袖のかたどる軒のたち花
 橋の花ちるころの木のもとの苔路の露も香にはほひけり
 たち花の花ちるころのわかやどの苔路に人のあども見えけり
 たち花に見し夢さめて見ぬ世をいさのふもはかなやみのうつしに
 夕風にわれなからわか袖の香もあつかしきまてにはふ立花
 いにしへをさるやと問へいたち花のふかきにはひうこたへかほなる
 うゑし世も今のむかしといふはかり庭の橋かけふりにけり
 にはほひをいかにせよとて立花の花ちる袖も風のふくらむ
 橋の苔ちの露にかをれどもかけふむ人のなきすまひかな

枝 春 同 千 春 宣 蒿 依 景 濱
 直 海 蔭 瀨 平 樹 臣

早苗

さなへ

蒔きたる種の、三四寸ばかりのび出づるをとりて、更に田に植ゑ直すといふ。御代の
 の惠の事、豊年のことなど思ひ合せて、さま／＼によむべし。

はれまなき

小田のまめなは

さなへとる

袖やくちぬる

時	さぬと	みどりになひく	玉	な	へ	わせのさあへ	
田	子のとる	山田の田子の	さ	な	へ草	かくてのさあへ	
山	かけの	賤のをどめか	夕	さ	なへ	神田の早苗	
ま	めはへて	日もくれぬめり	い	そ	く	かり	千町の早苗
ひ	きつれて	いそく早苗に	夕	さ	あ	へ	御代のめくみ
ふ	したつ	いたく老いぬる	わ	か	あ	へ	葉の上の露
う	らわかみ	たぬぬ日もあし	初	な	へ	田子のますらを	
わ	さ	山田のみしめ	か	き	つ	田	水せき入る
山		山田のかけひ	き	し	田	みどりにつく	
か	と	田草ひくどて	み	な	ど	田	むろのとやわせ
う	き	田子のもろこゑ	澤		田	田子の小かさ	
あ	け	田子のかけ繩	く	は	田	多かる田子	
み	たやもり	田子のいな舟	植		女	菅の小かさ	
手	もたゆく	聲そ賑はふ	八	を	ど	め	井せきもる水
朝	まめり	世にうるふてふ	夕	ま	めり	わかきみのため	

六月 かりたちて もすそぬらす

新 早苗とる山田の篋もりにけりひくまめ繩に露そこはる、
 續後 峯の松入日すしき山かけのすそ野の小田に早苗とるなり 順徳院
 玉 小山田に見ゆるみどりの一村やまたどりわけぬ早苗あるらん 宗 教
 月 さみたれの晴ま待ちえて賤の女か門田の早苗今やとるらむ 資 盛
 同 さみたれの名残におけるしら露の玉ぬきさからとる早苗かさ 範 綱
 代 今はまたさつききぬらし石上ふるのあら田にさなへとるなり 基 氏
 同 足曳の山した水をひきかけしすそわの田井に早苗とるなり 野宮左大臣
 同 みわ川の水せきかけてやまとあるふるのわさ田は早苗とるあり 行 家
 賤の女かさは田にうゑしむら苗のさへてみどりになりけるかな 契 冲
 いそきてそ早苗はうゑむあし引の山はとくさすなきにしものを 眞 淵
 雨晴れて雲たちのほる山もとのささわの小田に早苗とる見ゆ 蘆 庵
 さなへとるつるの郡のさと人は千代のはつ穂の秋やまつらむ 春 海
 はとくさすとはたの早苗いそくらむかすこりまされ賤かすか笠 千 庵

まめはへしみとしろ小田に雨過ぎてきよけに見ゆる露の玉苗 同
 いつくにもまぢけるほどか雨はれて今日は田毎の早苗とるあり 宣 長

梅雨

つれくど降りくらしして、物思ふことさどをよむなり。

日	を	ふる	水	かさ	と	まさ	る	ま	こ	も	く	さ	お	ろ	す	い	か	た	の	
さ	み	た	れ	に	水	ま	さ	る	ら	し	見	わ	た	せ	い	久	し	く	さ	り
か	さ	く	ら	す	は	れ	ま	も	見	え	す	水	こ	え	て	水	も	あ	せ	
ふ	り	ろ	め	て	空	か	き	く	れ	て	雲	と	ち	て	八	十	瀬	も	ま	
下	く	さ	い	日	を	ふる	ま	く	に	ひ	ま	も	な	し	を	や	み	も	見	
は	れ	ま	な	き	河	音	た	か	し	水	そ	ひ	て	ま	さ	る	み	さ	は	
け	ふ	い	く	か	か	さ	な	る	雲	の	日	を	あ	ま	た	は	れ	ぬ	雲	
は	れ	や	ら	て	河	波	た	か	し	谷	水	の	明	く	れ	わ	か	ぬ		
水	ま	さ	る	雲	ま	も	見	え	す	か	さ	く	れ	て	空	そ	い	ふ	せ	
雨	ま	め	り	さ	み	た	れ	ろ	ふ	る	雲	く	ら	さ	軒	の	玉	水		

空もどいろ 浅き瀬もなし あま雲 ふるやの軒
 雲のみを 音とよむあり くちとて、 さみたれの雲
 さみたるゝ 月影をいつ待出でん 雫そたえぬ かけひなかるゝ
 板ひさし 軒のまのふ いふせき はすまもあらぬ
 軒よりおつる瀧 水増りつゝ 今日いくか 淵瀬のいつら
 道たえて 袖つくはかり 梅もあからむ 卯花くたし
 心もはれぬ 音とかりして

金 さみたれに玉江の水やまさるらむあしの下葉のかくれゆくかな 通 時
 同 さみたれに水まさるらしさはた川まきの繼橋うきぬはかりに 顯 仲
 同 さみたれは沼の岩かき水こえてまこもかるへさかたもまられす 師 頼
 同 さみたれの日をふるまゝに鈴鹿川やそ瀬の波そおどまさりける 治部 卿
 同 さみたれは難波堀江のみをつくしみえぬや水のまさるなるらむ 忠 季
 同 いどしく賤の庵のいふせきに卯花くたしさみたれそふる 基 俊
 同 さみたれに浅さは沼の花かつみかつみるまゝにかくれゆくかな 顯 仲

新 玉はこの道ゆく人のことつてもたえてはとふるさみたれの空 定 家
 同 さみたれの雲の晴間をなかめつゝ雲より西に月をまつか奇 氏 良
 同 あふちさく外面の木かけ露落ちてさみたれはるゝ風わたるあり 忠 良
 勅 さみたれの日をふるまゝにひまそなきあしのまの軒の玉水 資 盛
 同 うちはへて幾日かへぬる夏引の手ひさの糸のさみたれの空 家 長
 同 三嶋江の玉江のまこもかりよたにとはてほどふるさみたれの空 行 能
 同 ふりそめていくかになりぬ鈴鹿川やそせもまらぬさみたれのころ 俊 成
 同 さみたれにみかさまされは衣川たゝてそ旅の日數へにける 朝 海
 月 さみたれは入江のみかさ増りつゝ刈らぬにみえぬまこも草かな 良 一
 同 苗代にたえゝひさしわすれ水あせこえにけり梅雨のころ 季 經
 代 さためなきためしときしあすか川淵瀬のいつらさみたれのころ 後徳大寺
 同 つれくゞとふるさみたれに日にくれぬ軒のまつくの音はかりして 通 俊
 同 舟よはふ聲もおよはすなりにけり大江のさしのさみたれのころ 長 頼
 同 石上ふるの高橋たかしとも見ぬすありゆくさみたれのころ 讚 岐
 同 みよし野のみくまか菅をかりろめのはれまたになきさみたれの頃 宣 長

玉さゝのよのまにはれてめつらしく朝日まちどるさみたれの露 宣長
 さみたれにつま木の道もたえにけり谷のいは橋水こえしより 春海
 さみたれの雨に綱手もくちはて、みをひきわふる淀の川舟 同
 みつしほもあらそひかねてなかるなりほり江の水のさみたれの頃 長流
 鏡山にはてるかけも今日いくかくもりはてぬるさみたれの頃 春満
 から崎や松かせたえて志賀の浦の浪にありぬるさみたれの雲 千蔭
 わかやとに雨つゝみせよさみたれのふりにしこともかたりつくさむ 同
 夏の夜をなかりけりとおもふまでかきくらしふるさみたれの空 枝直
 さみたれによどのわたりいたえにけりみつの、里をいかてとはまし 知紀
 つま木こる音もおとせすきりにけりわかやまかけのさみたれの頃 景重
 さみたれの雲間に見ゆる夏山はやかても空のみどりなりけり 景重

水鶏

くひな

多く夜鳴くものあり。その聲戸をたゝくに似たれば、たゝく水鶏などよひなり。
 あくる^{あまて}まて たゝくくひなの くひななく 明けぬとたゝく

明かたの 柴の戸たゝく ねさめどふ 月にうかるゝ
 さよふかき ひまなくたゝく 夜もすから 老のねさめに
 くひなかな たか門たゝく 宿ことに 夢おどろかし
 おとすなり たえすおとふ 人をはかる 田つらの深
 みしかよの 夏のよのそら 心みしかき また夜はふかき
 天のどの 柴のかりや あけなから 人たのめある
 槇の戸 浅澤水に おどろかす まこもかくれ

名所

竹田の里 山城 牛窓 備前 大屋か原 武藏 根岸の里 同

金 門ことになゝく水鶏の音すなりこゝろのどまる宿やあからむ 顯綱
 同 夜もすからはかなく叩くくひなかなさせるともあき柴のかりやを 雅光
 同 詞 よもすからたゝく水鶏は天の戸をわけて後こそ音せさりけれ 頼家
 同 同 われゆゑとたゝくくひなや思ふらむわくれはあくる槇の板戸を 有家
 同 一かたのさりととも人のたゝくらむわくれはこれもくひななりけり 親盛

代

六月

一三六

あはれにもほのかにたゞく水鶏か老のねさめのあけほのゝそら
 中川の水のいつことたどるまにたゞく水鶏もかたたかへせり
 あやめ草おふる野澤のみこもりに聲あらはれてなく水鶏かな
 榎の戸をたゞけいやかてあくる夜のくひなは人をはからさりけり
 柴の戸のあけなからねし夏の夜にたゞく水鶏やいつこあるらむ
 夕月もまはしはかけをどゞめけりくひな聲する門のいさらむ
 榎の戸もさゞて人まつ月の夜になにをくひなのたゞくなるらむ
 さらてしも見はてぬ夢のみしか夜をいかて水鶏のおどろかすらむ
 おもひきや伊勢のはま萩をりしきて夜たゞくひなにどはるへしどは
 月さゆる浅澤みつになくくひな氷をたゞくこゝちこそすれ
 やり水になかるゝ月の影どめて夜聲すゝしくなく水鶏か
 水草のまけきあたりを庵まめて水鶏を宿のものどきくかな
 かり残す眞菅かもとに月すみて水鶏なくあり夜やふけぬらむ
 柴の戸をまはくたゞく水鶏にもはかられぬ身となりよけるか
 夕月夜をくらす森の木かくれにみつかけ見えて水鶏さくなり

後鳥羽院 嘉言 春海 同 千 同 春 同 枝 景 濱 久 廣 信 茂
 蔭 海 満 直 樹 臣 胤 海 友 岳

鵜河

うがは

夏の夜に、川舟にて、鵜をつかひて、鮎どるわさをするをいふ、篝火をたきて、
 けしきよきものなり。

かゝりさす かたふく月に かつ見えて よなくのほる
 夏のよの いく瀬鵜舟の 夕やみに 鵜川のかゝり
 夜川たつ うふねのかゝり ほの見えて いくよ河せに
 夕月夜 のほりもやらて たきすてゝ 明かたちかし
 五月やみ いく瀬かのほる 同しせに 波まにまらむ
 うをつかふ 河瀬にまらむ 鵜舟さす せゝのかゝり火
 うな は いく夜さすらん さしかへる 瀬々のまらみ
 夕やみ 下せのあくる 上つ瀬に 月さきほど
 遠さかる 夜の更けぬらし 下つ瀬に 手なはみたるゝ
 みあれ棹 かゝり火まらむ 鮎のほる 川瀬たつねん
 心あくさに いかに契りて

名所

六月

一三七

大井川 山城 梅津川 同 桂 川 同 戸名瀬 大和 長柄川 美濃 夏箕川 大和 吉野川 同

後 大井川うかへるふねのかゝり火にをくらの山の名のみなりけり 業平
 金 大井川いくせ鶴舟のすきぬらむほのかになりぬかゝり火の影 雅定
 新 大井川かゝりさしゆく鶴かひ舟いくせに夏の夜をあかすらむ 俊成
 新 久方の中なる川の鶴かひ舟いかにちきりてやみをまつらむ 定家
 六 かゝり火の影しうつれはうは玉のよ川の水はそこも見えけり 貫之
 代 さきた川くたす鶴舟にさす棹の音さゆるまで夜更けにけり 讚岐
 夕月のいりかたちかき山かけはやみもまらあへす鶴舟さすなり 蘆庵
 深き夜の川せにのこるかゝり火やおくれてくたす鶴舟なるらむ 同
 有明の月はよかはにやのめきてかすかにちりぬかゝり火の影 千蔭
 さ夜ふけて月のいるさをまつら川七瀬にきそふうかひ舟かな 同
 名にしおふ月のかつらの川せにもやみを時なるうかひ舟かな 同
 こゝを瀬に鶴舟さすらしよしの川岩もとさらぬかゝり火の影 枝直

夏の夜のはやき河瀬のうかひ舟さすかよくたすほどいありけり 宜長
 かつらうかかはたつとや波のうへにみたれて見ゆる瀬々のかゝり火 春海
 夏川の底までてらすかゝり火にのかれぬ鮎のうはとしりする 景樹

螢 ほたる

古く夏蟲とよめるもあれど、よからず、又はたるびなどいふも、わるし。

音もせて 思ひにもゆる よもすから 草の葉ごとに
 ちるはたる あしへの螢 過ぎやらて 露をよそかに
 月うすき もゆる螢の 草かくれ みたる、玉と
 草の上に わたる螢の 影見えて かくれあらはれ
 草ふかき 玉かど見えて どひかふ かすあらはれて
 螢とふ 淺ちにすたく 去るへにて 夕くれふかき
 行く 螢 夏のよすから 水くらき くるれいやかて
 むねの火 身そのみまかそ みたるゝ 見えみ見えすみ
 をその螢 川のへのさど さは水よ もえわかすかけ

みたれどふ	玉そちりかふ	袂にふれて	袖につゝむ
谷水に	木かけすゝしき	すた	星にまかひて
きえやらぬ	池の玉もの	高くどふ	すゝむ袂に
やり水に	浮草にみたれて	秋ちかき	岩まかくれ
すかる螢	くちし草葉		

●名所

清瀧川 山城 おどは川 同 住の江 攝津 猪名野 同 須磨の浦 播磨 江戸川 武蔵

拾 夜もすからもゆる螢を今朝見れり草の葉ごとに露そおきける 健 守
 後拾 おどもせておもひにもゆる螢こそおくむしよりもあはれなりけれ 重 之
 同 澤水に空ある星のうつるかど見ゆるの夜半のやたるなりけり 良 經
 詞 なく聲もきこぬ物のかさしき忍ひにもゆるはたるなりけり 高 遠
 千 むかし我あつめしものをれもひ出て見されかはにもくるはたるかき 季 通
 新 いさり火の昔のひかりはの見えて蘆やの里よどふはたるかな 攝 政
 勅 草ふかきあれたる宿のともし火の風にさえぬの螢ありけり 讀人不知

同 月

今宵こゝろをくらの山もなかりけれこの下闇にはたるみたれて 覺 延
 光そふ夕の露と見えつるの草葉にまかふはたるありけり 美 作
 くるゝより人のおどせぬ道のへをよる行くもののはたるありけり 契 冲
 ふるさとのみかきか原の夏草によるのもえつゝどふはたるかき 眞 淵
 夕やみにまのふの露もあはれて軒はすゝしくどふはたるかき 宣 長
 木の川にもゆるはたるやいもせ山へたつる中のおもひあるらむ 同 海
 風さそふしのゝをさゝにちる露のきこりおほえてどふはたるかな 春 海
 おちたきつなかるゝ水のしら玉に光をそへてどふはたるかな 同 蔭
 月のいりてなや草むらの露の上のこるひかりの螢なりけり 千 蔭
 わさきへの葉末の露のくれそめてちると見ゆるの螢なりけり 同 蔭
 東屋の雨のまつくもかす見えて軒のまにどふはたるかな 同 蔭
 吹風のさそふまにゝうき草のはたるかかゝるゝ池のおもかな 同 蔭
 夕立の名残の露のくさむらに涼しくもえてどふはたるかき 春 満
 せきかけし庭のやり水はやけれどうつるはたるの影いなかれす 枝 直
 落ちたきつ瀧のまら玉よることにかすそふものゝ螢なりけり 同 直

たちかへり住みにしさを今とへのはたるとひかふよもさふの露 古
 うき草のまける青淵ふかけれりたりたちかねてとふ螢かな 景
 瀧川のはや瀬たはしる玉水にひかりかはしてちるはたるかき 内
 うちまねく扇の妻もあるものをよそにこかれてゆくはたるかき 諸
 平 遠 樹 道

蚊遣火

かやりび びび

煙の立ちのほるを、厭はしきことにも、をかしきさまにもよむなり。

夕 け ぶ り やどにふすふる 夏 の よ は ゆふへまちえて
 ま つ の め か け ぶ り い ふ せ き た つ け ぶ り く も る も つ ら し
 下 も え の 賤 か ふ せ 屋 の か や り た く ほ の か に 見 え て
 軒 つ い き に き は ふ さ どの 夕 ま く れ 賤 か お も ひ も
 月 く ら き け ぶ り た ち そ ふ た き す て 煙 に く ら き
 夕 さ れ は 下 む せ ひ つ うち な ひ き 雨 ふ り し め る
 ゆ ふ へ く よ は の か や り 火 ま つ か や か や り た く ら し
 た ち の ほ る を ち の 山 さ と ゆ ふ か は の こ る か や り 火

ふ せ い は の 軒 は の 竹 く ゆ ら す 下 や す か ら ぬ
 お く か ひ 夕 く れ の 宿 ど こ ろ せ き け ぶ る 一 む ら
 た そ か れ わ ふ る 蚊 の 聲 月 に さ は れ る

月 もしほやく煙とのみも見ゆるか春あまの苦やにたつるかや火 經 盛
 玉 月 かけのかすむもつらしよそまてはけふりなたてそ夜半のかや火 前 關 白
 白河 かや火のけふりたつなり里遠きゆつはの村に日にくれにけり 賢 阿
 夕 されのかや火たかぬ宿もなしこの里人の月や見さらむ 眞 淵
 かや火のけふりたすは夕まくれありとも見えし山もとの里 元 政
 をりくにかやりのけふりたきけつや賤もこゝろを月によすらむ 春 海
 かや火のけふりにむせふみどり子か聲もいふせきやどの夕暮 蘆 庵
 きえなはどはるゝをまちしかや火のけふりなからに月をわけゆく 宣 長
 たちのゆるゆふへのかひのけふりにそありとまらるゝ木かくれの宿 千 蔭
 行く水にゆふへの月はすみかからかやりにくもる川つらのさと 同 樹
 山里のかやりなるらし夕つく日さらぬかたよりたつけふりかき 景

かやりたく竹の葉山の夕けふりきひくを見れぬ人のすみけり
夏麻引かた山さとの夕月夜なひくけふりはかやりなりけり

元 澄
正 雄

○七月

夏月 なつづき

月の涼しきに、ひるのあつさを忘れ、或は短夜を恨み、秋にもまざるをど、よまざるまによむべし。

手にむすぶ	月のひかりの	すゝしさに	夏のはかある
明けやすき	板井の清水	もる月の	影もにこらぬ
待ちいてゝ	庭白妙に	月かけの	ねやもる月の
中そらに	水音ちかき	すみのやる	涼しくやどる
天の戸の	ふしのまもなく	手すさひに	袂すゝしき
山のはの	月おもしろき	行舟の	すめる月影
夕そゝみ	すゝしき月の	影すみて	秋やどるらん
夏まらぬ	葉山の露の	底きよみ	夏の夜の霜

うたゝね	またよひなから	光すゝし	やどる清水
影もる	やゝかけすゝし	庭の霜	はしるに出てゝ
まさこぢ	あかるゝ月の	夕すゝみ	よどむまもなし
かけやどす	くもりはてなは	雨はれて	ならのわか葉に
秋ちかき	見てをわかさん	なかゝに	岩こす波に
夏まらぬ	影さたまらぬ	さしのほる	かなじ空とも
天の戸	竹の葉わけ	あけやすき	泉にやどる

後拾。夏の夜もすゝしかり月かけは庭しろたへの霜と見えつゝ、長家
 金 夏の夜の月まつほとの手そさひに岩もる清水いく結びしつ 悲 俊
 同 玉くしけふたかみ山の木の間にいつれあくる夏のよの月 親 房
 新 庭の面のまたかわかぬに夕立のそらさりけちくすめる月かな 頼 政
 同 かさねてもすゝしかりけり夏衣うそき袂に宿る月かけ 攝 政
 勅 よもすからやどる清水のそゝしさに月も夏をやよそに見るらむ 心 覺
 同 わすれては秋かどる思ふ片岡のならの葉わけて出る月影 親 康

月 久かたの月も今宵はすゝむらむ岩もる水にかけやどしけり 寛
 夏 夏の夜いやとれる月のけしきまでおなし清水もすゝしかりけり 實
 同 高根より出てぬと見つるほどもなく谷の清水にやどる月かな 頼
 同 夏山のならぬ青葉をふく風にかけ定らぬ夕月夜かな 親
 代 秋よりもあかぬ心をまさりける見るほどもなき夏のよの月 顯
 水枝さそ葉ひろくまかし露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな 千
 玉かしは夕立すくるかゝみ葉をみかきそへたる夏のよの月 同
 また宵どなにおもひけむ夏の夜の廿日の月はとく出にけり 枝
 はしるしてむかへはすゝしみしか夜の月には秋もまたれさりけり 同
 すゝしさのいつこのあれど山さとは清水に月のかけうつるころ 春
 山のはのかすみも霧もへたてぬと若葉にくもる夏のよの月 同
 すゝしさをつゝみてかへるよしもかな袖師の浦のなつのよのつき 宣
 水もあき空に見るたにすゝしきをまして川瀬の夏のよの月 同
 ひどへたにいとほしかりし夏衣かさねまほしき月のすゝしさ 同
 庭しろく月のてる夜も木かくれて下なつかしき夏のきにけり 景
 樹 庵 長 海 直 蔭 輔 佐 圓 家 玄

むすふ手の水にやどりて水よりもすゝしくすめる月の影哉 游 満
 月をうつあら磯さきのしち波はやかても夏をくたくなりけり 知 紀
 なよ竹のれきふす風にみしか夜の月もいくたひはれくもるらむ 夏 蔭
 秋またて初かりかねもなくはかりすゝしくすめる月のかけ哉 長 穂

夏草

なつくさ

夏になりて、まけりあひたるさまを、いとほしくも、ゆかしくもよむべし。

露 しけき しのゝをすゝき 夏のくさ 岩もど小すけ
 我 やどの まけるにつけて すゝき原 みまぐさにせん
 あさなく ゆきゝもみえす す が原 まけきあしま
 まけりゆく まける千草の まこもくさ よもさか柚
 野はなべて 小野の草葉の むらあし 花をのよきて
 道たえて 夏野の野守 八 重 菘 雨に色そふ
 草ふかみ ふみわけかたき 道とづる 道たどくし
 草しけみ まよふ夏野の 夕しめり 涙こそす風

さゆりはの まけくちり行く 分わひて あはれやことに
 跡たえて 庭の夏くさ 朝まめり いとまをれて
 立のびて しけき夏野 芝 草 ひら雨の露
 浅茅原 夏と共ふ深く

後拾 夏草はむすふはかりにかりにけり野かひし駒やわくかれぬらむ 重之
 千 やきすてしふる野の小野の眞葛原玉まきはかりなりにける哉 定通
 同 夏ふかみ玉江にまける蘆の葉のそよくや風のかよふなるらむ 法性寺入道
 玉 梓弓矢田の廣野の草まけみわけける人やみちまどふらむ 教良
 月 たつねくる人なき宿の八重葎秋よりさきもさひしかりけり 家長
 同 東路はわけゆく草の日をへつゝ夏とともも深くなる哉 重家
 六 つれどなかめせしまに夏草のあはれやことにまけりあひにけり 忠岑
 夏草もふみわけかたくなりけり雪まよびし小野のやそ道 契冲
 うちなひき裁もすゝきもまける野に草かるをのこ心してかれ 同 淵
 あし引の岩根すかはらいくの度まけりゆくらむ岩根すか原 眞淵

わけてよも人のとはしな夏草に我さへたどる庭のかよひち 春満
 さすかちや道のみえけりまけりてもゆきゝもまけき野への夏草 宣長
 こゝかしこきのふかりつるあどはかり葉末みしかき野への夏くさ 同 枝直
 たをやめの若菜すみれにふみなれし道ものこさすまける夏くさ 枝直
 ことゝはんなつ野の野守今いくかありてさくへき萩のはつ花 同 同
 夏草に野中の道はうつもれぬもとのこゝろをたどるはかりよ 春海
 秋ちかき野ちの草むら露さへも結ふはかりにはやなりにけり 同 同
 朝なく露おもしろき夏草のいふせしどもなにかはらはむ 千 蔭
 蟬のなく葛のまけみの高ければ下まで夏いとほらさりけり 景 樹
 庭草をこゝろのまゝにまけらせて秋まつむしのよすかにそする 久 胤
 里人のゆきゝたえぬる夕くれは露こそむすへ野路のなつくさ 春 庭
 かの岡に草かるをのこ心せよ今かさくらむさゆりなてして 濱 臣

瞿麥

なでしこまなつ

瞿麥よ、からきてしこと、大和なでしこと、二くさあり。名によりて、子を愛す

るてゝるなごによむあり。

しらつゆの	まかきに咲る	とこなつの	やまごなてしこ
色もかも	めかれぬいろに	あかす見ん	さけるきてしこ
咲しより	からなてしこの	露ふかく	庭もせに咲く
咲まさる	花のどこなつ	ちりゆく	川原きてしこ
うらわかみ	母のきてしこ	種まさし	床夏の花
か	錦	をどめのえまひ	錦もまかし
手にとりて	光さへそふ	うつくしど	大和にいあらぬ
見るに猶	ちりだにすゑぬ	手もたゆく	たれにみせまし
こ	ま	錦	我まゆひし
ませのうちに	夕くれのまのき	妹の家路に	おふしたてつる

●名所

狛野山城 大原同 内野同 春日野大和 朝の原同
 園原信濃 野島か崎淡路

萬	見わたせの向ひの岡のなてしこのちらまくをしも雨なふりそね	讀人不知
古	ちりをたにすゑしとそ思ふさきしより妹どわかぬる床夏の花	躬恒
後拾	きて見よと妹か家ちにつけやらん我ひとりぬる床夏の花	好忠
詞	種まさしわか撫子の花さかりいく朝露のかきて見つらむ	顯季
新	白露の玉もてゆへるませのうちに光さへそよとこなつの花	高倉院
代	なてしこの花さきにけり賤のをか垣根の露もこゝろしてかけ	中院入道
	常夏にははふなてしこ幾たひかはく、む露のかきかはるらむ	土満
	賤のをか草にやつる、まかきにもあはれぬそへつきてしこの花	春海
	宵の雨のなこりいかにと露にさへこゝろおかる、とこなつの花	同
	なてしこの露こそことにあはれなれ心わりけるよひの雨かき	千蔭
	去年の夏妹かすさひに種まさし垣のなてしこ花咲にけり	尊孫
	根をたえてさゝれの上になてしこにけり雨になかれし河原きてしこ	景樹
	たれしかもおふしたてけむ人すまてあれしかさねのなてしこの花	敬儀
	人どはのまたきには津もどはかりにこたへまほしきなてしこの花	廣海
	人しれぬおもひの露やかゝるらむ妹かかきねのなてしこの花	直好

夕顔

夕顔

夕ぐれに、賤か垣ねきとに、あどれにさけるをよむきり。

山 賤 か やどりゆかしき たそかれ 花のちきり

こゝろあれや 月まぢいつる 葉かくれ よそめゆかし

咲かゝる 光そへたる いろはえて まゆひらけたる

花の名に 垣ねつゝきに あばらや はひまつはるゝ

薄きりの 軒の夕かほ 草の戸 むつかしげある

袖かきに 花の白妙 露きよく ひどふさ折りて

暮そめて はのく見ゆる 賤かかさし かきねすゝしく

つ ま と ゆかしくさける

源 心あてにそれかどそ見る白露の光そへたる夕かほの花 紫式部

同 ひかりありと見し夕顔の白露いたそかれ時のそらめ也けり 同

新 玄ら露のきさけおさけることこの葉やはのく見えし夕顔の花 太政大臣

新後 いとゝまた光やそはむしら露の月まぢいつる夕かほの花 國助

六百 くれそめて草の葉なひく風の間垣ねすゝしき夕かほの花 定家

とはてしもそれといえるし遠かたのかやか軒はの夕かほの花 契沖

三日月のあるかきさかの光さへやどるか軒の夕かほの花 千蔭

みか月の影もる軒のいたまよりましろに見ゆる夕かほの花 同

たちよりて今ひとふさやをりてましみてかてなる花の夕かほ 同

たそかれのまかきにさきて有明の月にさほへる夕かほの花 枝直

あはらやの軒はつたひにさきにけりむくらにましろ夕顔の花 尊孫

まら人にあらぬものから夕かほのえめる垣根のなつかしきかな 光輔

あはらをもつくるひたてゝ露きよくにはふ軒はの花の夕顔 春庭

芦垣にあまりて軒のつま戸までかゝるもすゝし露の夕顔 利章

夕かほの門すきやらぬ小車の人めく花の名をやたつぬる 弘訓

さゝら涙やのくれわたる川つらの里わに白き夕かほの花 廣足

吹そくる葉分の風に花見えてたそかれ白し垣の夕顔 光秋

百合

○

ひめゆり 句ひえからぬ さゆりの花 しけみにさける
 一本ゆり 色もなまめく まばゆく 夏草にまじる
 夏の野 妹かかさしに 葉かくれ 露もてかさる
 日さるりに 水にかけ見る 道のへの うしろめたくも
 夕露に 人しのばしき さく花の ちかやかもどに
 たかゑまひ 草ふかゆり

○

續後 夏草にまじるさゆりのおのつから秋にしらぬ露やおくらむ 道照親王
 代 夏野あるまけみの中さゆりはの花をいよきてみまぐさにかれ 師光
 たゝひとり秋の干草にあらそはぬさゆりの花そあはれなりける 千蔭
 夏の野にたれをやさしとまのふらむ葉かくれにさく姫ゆりの花 春海
 夏の野をてる日のさかりわけゆけいさゆり花さくかけありけり 久胤
 夏草のまけき思ひのありかははにうちかたふける姫ゆりの花 英好

蓮

ほろすはす ○

池水 の にこれるみつに 葉かくれに 入江のはちす
 風ふけい 池のころの 法の蓮 濁にままぬ
 心すむ 蓮の浮葉に まき葉 風のすしさを
 風わたる にほふ蓮葉 清らなる やどれる月の
 玉かど見る 花のかゝみに 衣の玉 こはれておつる
 さゝれ波 波こそ池 よる波 すかくしくも
 すしさい 夕風かよふ けかれさる 露の命を
 水清み 玉ゆりかくる 池のへの こほるゝ露の
 花はちす 風にみたるゝ かざるなり たまれる水
 露つゝむ 色もすしく

●名所

不忍池 武蔵 大津の池 山城 菅田の池 大和 劔の池 同 日下江 河内
 住吉 攝津

玉	堀	同	同	代								
こほれ落る池の蓮のしら露 <small>のら</small> さ葉の玉とまたなりにけり	夏の池のはちすの露を見るからにこゝろそことよすしかりける	いかぢれ <small>に</small> にこれる水におひなから蓮の花のけかれさるらん	水清き池の蓮の花さかりこの世のものと見えすもあるかな	露つゝむ池のはちそのまくり葉に衣の玉をおもひしる哉	玉かどてつゝめはさえぬ蓮葉におくしらつゆの手もふれて見む	うちよする浪かあらぬか夕風の吹うらかへすいどのほちす葉	池水のいひしらぬまでかをる也はすのうき葉に風わたるころ	かけうつす池の鏡のさよければ葉かくれにさく花も見えけり	ちるもをしふくもすしき夕風におもひみたるはちす葉の露	朝露のどくおき出てねやの戸をひらけひらく花はちそかな	朝またき露ちるはかりねもほえて一ひらひらく花はちすかぢ	玉と見るはちすの露もこほれて <small>に</small> にこれる池の水となりけり
院御製	仲實	永緑	紀伊	西行	蘆庵	千蔭	たみ子	春海	宣長	良臣	鶴夫	政儀

夏氷

氷室

ひむろ

夏	山	ひ	袖	氷
まらぬ	ふかみ	むろ	さむき	室
夏の外なる	氷をかみて	ひむろのわたり	日かけにうき	山
すしさを	松かけに	とけぬまに	氷室のためし	うき世の夏
守る袖こはる	夢もすしき	あつさもわする	せき入れし水	氷
			冬とときとの	る

後拾	新後	玉	堀	同						
夏の日になるまできえぬ冬氷春たつ風やよきてふくらむ	すしさを外にもとはし山城のうたの氷室のまきのしたかけ	水むすふ夕より猶すしきはひむろにむかふ杉のした風	すへらきのかしこき御代の老るしには氷も夏のものどこそなれ	夏の日もすしかりけり松かさきこれや氷室のわたりなるらむ	かけ高き梢の蟬の聲はかり夏をつけ野の氷室なりけり	守る人は冬をとききは氷室山いてうき世のあつをしるらむ	あけゆかはたてまつらんと氷室守おのかまろねもとけぬ夜半かな	景	春	千
頼實	太政大臣	經久	顯仲	顯季	千蔭	春満	景樹			

大君のみことかしこみ氷室もる山には夏もいたらざるらむ 尊孫
大君の御代をか坂のひむろもりいくとせ夏をよそよすむらむ 春海

○ 蟬 せみ

せみの羽	あこりの露	雨はるゝ	風にみたるゝ
秋ちかき	暮行庭に	鳴すさぶ	杜の梢の
せみの鳴	梢も高く	あらしふく	そゝしくのこる
うつせみ	なくねも涼し	むら雨の	すゝしく落る
きはふ	外山の木々の	木かくれに	聲しきるなり
一まきり	あつさをそへて	もろこゑに	蟬のはつ聲
夕風に	風にみたるゝ	夏山の	蟬そなくある
鳴せみの	木葉にすがる	朝雨に	夕立のはれま
風たえて	聲のまくれ	あきかけて	羽におくつゆ
聲たかく	瀧もどゝろに	夏ふかき	聲そまくるゝ
川音に	なみたの露	打はへて	夕日かたふく

ゆする 羽におく露 聲まきる 松の下かけ
 夕日かけ 木葉ますかる

● 名所

片岡の杜 山城 衣手の森 同 高雄山 同 玄のたの杜 和泉
 かつみ川 大和

詞 下もみち一葉つゝちる木のもとに秋もおほゆるせみの聲かな 相 摸
 新 秋ちかきけしきの杜になくせみのなみたの露や下葉るむらむ 太政大臣
 六百 あらしふく梢はるかまなく蟬の聲より落る木々のした露 俊成女
 代 山さどの外面の竹をふく風に夕日すゝしき日くらしの聲 建保御製
 松かねのいはまにむせふまし水に梢の蟬のこゑそあらしふ 千 蔭
 夏もはやこそすゑの蟬の聲にちる夕露すゝし杉のした道 同
 ふきかろす松のあらしにたくひきて秋おもゆる蟬のもろ聲 春 海
 夕立のは山過にしこつたひにまたまくれゆくむら蟬のこゑ 長 流
 たかし山松かせたえてなく蟬そてる日の空に聲とよむある 古 道
 おちたきつ岩瀬の水にあらしひて山下とよみせみそなくある 蘆 庵

夕日かけのこるどもあき岡のへにせみの鳴音のすさまじきかき 政 通
夏山の瀧のひゞきをどめくれの蟬の鳴ねもすしかりけり 定 良

夕立 由ふたち

空俄にかきくもりて、雷鳴のおそろしきとより、遠夕立のけしき、あつさわする、
事など、さまざまによむべし。

かきくもり 夕立すし 吹かくる よそになりゆく
夕立の はれ行くあとの 谷川の 日かけへたつる
鳴神の やかてすきゆく 風すきて 檜はらの山の
吹かせに たゝ時のまに きこゆあり 夕立すくる
風はやみ かつくはるゝ なごりまで かたへすしき
ひと村の 草木もなひく 入日さす かゝるむらくも
雲さわく 雲の一むら 時の間 過るゆふたち
いなつま にこる川水 ふりいてゝ けしきをかへて
雲まよふ うきたつ雲 一しきり はれまの木かけ
雲かゝる こあたの晴て 空もどいろ 末野のはれて

雲きほふ わしどく過ぐる 山の端に 一村すきぬ
峯つゝき 山めぐりする 水上の 外山にかゝる
このさど 波よりのほる 雫ちる 市人さわく
かさやどり 玄はしの涼し 庭たつみ てる日なからに
露すかる やあせのさ波 庭の面 庭のたまさゝ
名残のかせ 日かけ見えゆく 降りいてゝ 苦もふきあへす
ゆふたつ風 船人さわく 虹のたつ 晴間の木かけ
雲のみを 入日をうつす

万 夕立の雨ふることに春日野の尾花か上の白露おもはゆ 讀人不知
詞 川上に夕立そらしみくつせくやなせのさみたちさわくなり 好 忠
新 露そかる庭の玉さゝうちなひきひと村すきぬ夕立の雲 公 經
六百 夕立の雲のみをよりつたひきて軒はに落つる瀧のしら玉 有 家
代 かきくらしおもひもあへぬ夕立に市人さわく三輪の山もと 宗 圓
同 水上に夕立そらし山川の岩ねにかゝる瀧の志ら涙 後久 我

さらにもたねくらの鳥もさわくまでゆふたつ雨のもりのまた風
 やたのゝ夕たちすらし吹風のあらちの峰に雲さわくあり
 にひた山うき雲さわく夕たちにどねの川水うはにこりせり
 大ひえやをひえの雲のめぐりきて夕立すなり粟津の原
 鳴神の音羽の山の雲はれて關のこなたをそくる夕立
 入問路の夕立すらし名にも似そすみた川原の水のにこれる
 二並の筑波の山に雲見えてかすみか浦をそくるゆふ立
 見るからちも雨きはひきて夕立の雲にかくる、嶺の松原
 ふたこ山みねに北ゆく雲見えて夕立すらしわしの海つら
 筑波ねに雲見えそめて時のまにすみた川原をそくる夕立
 さかみ路の夕立すらし久方のあふりの嶺に雲そおほへる
 吹風もにはかにす、し夕立の雲にまよひて秋やきぬらむ
 旅人のみのふく風もそ、しけにふりゆく野路の夕立のあめ
 蟲の音ももよほすはかり夕立の名残す、しき庭のくさむら
 まはしどて笠やとりそるかけもなし夕立さわくるさの笹原
 契 沖 眞 淵 枝 直 同 同 同 同 同 同 同 同
 長 元 宣 千 春 蘆 同 同 同 同 同 同 同 同
 流 政 長 蔭 海 庵

袂までどほりてぬれぬ夕立の雨に、笠もかひなかりけり
 夕たちの今やふりこん有馬山なるのさ、原風さわくあり
 みさむらひみ笠とまをすほどもあく夕立はれぬ宮城野の原
 はた、神なるどのおきをこく舟のおどかきくらし雨さわくあり
 景 樹 長 英 演 諸 平

夏風

夏のかぜ

そ、しさに、あつさを忘るゝことより、秋のちかつくなど、いろくによむべし。

わすれての 秋かどそおもふ 風をまつ またきあきかせ
 吹くかせの ふくどしもなき す、吹く風 みどりの梢
 松風も 木の下かけの 夕されの 袂ならして
 夏ころも 涼しくもあるか 窓 ふく 夕立のなこり
 す、しさに またきに秋の 野 かせ 竹の葉わけて
 夕ぐれに 袖ふきかへす 山 かせ かどりのきぬ
 梢にも 身にしむばかり 朝 かせ 茂き木かけ
 わた殿に おもひもあへず かけふかさ たもどにまらし

沖の風 河原風 夕たつ風

六 夏の風わかたもどにしつゝまれば戀しき人のつどにしてまし 讀人不知
 同 かけふかき木の下風のふさくれは夏のうち赤から秋にそわりける 貫之
 金 夏衣すそ野の草をふく風におもひもあへす鹿やなくらむ 顯季
 勅 夏衣ゆくてもすゝしあつさ弓いそへの山のまつのまのまの風 家隆
 續吉 夕されはまのゝ小笹をふく風のまたきに秋のけしきあるかな 左大臣
 玉 夏山のみどりの木々をふさかへし夕たつ風の袖にすゝしき 兼季
 吹風のこゝろのつねにあらめども夏こそ人にまたしまれけれ 眞淵
 夏の日のあつささかりは吹風もらすき袂をさへたてけり 蘆庵
 夏山のさらの葉わたる夕風の袂までこそすゝしかりけれ 景樹
 山まどのねふの下風かをりきて今日も盡いの夢さそふあり 有功
 まらかしの古葉に見ゆる山風はたえゝなからすゝしかりけり 伴雄

扇 あふき

夏の日の、一向にこれをたのみとするよしより、月雪にまかへる色など、さまざまよむへし。

風 かよふ ならそあふきの はしゐして 月にたどへて
 手 さらしゝ あふきのつまに ならすあふき 秋をどなりの
 月 雪 に 手ならず風の 手よどりて 閨の月かけ
 かははりの 秋のやどりと 末 廣 かねてすゝしき
 手もたゆく 白きあふきの さしあふき かよふ秋かせ
 うちおかぬ たのむ扇の なつかしき つきせぬかせ
 あつき日を 來ぬ秋風も はりこむる 妹にあふきの
 手にまかす 夏かあらぬか たゝむ 月まつほどの
 枝あふき 内も外も見えぬ あふけども かさしのあふき
 袖のうへ わすられさくに 檜あふき おかれさりけり
 扇のかせ たが手ならせる

後拾 はかなくもわすられにける扇かなおちたりけりと人もころ見れ 和泉式部

六百 みな月の照日もいかに過ぎましたのむ扇の風なかりせば 兼宗
 同 夕まくれさらそ扇の風よこそかつ／＼秋のたちはしめけれ 信定
 同 夕されは扇の風を手ならして月まつはともすしかりけり 顯昭
 玄なかどの神の御室にあらねども風はあふきにこもるなりけり 契沖
 風を手にならす扇の三重なからひとへに夏はわすられにけり 春海
 なつかしき香にこそ風もにはふなれ誰にこかれしねやの扇を 同
 今はどてうちおくねやの扇かなぬるまや秋のころなるらむ 景樹
 手にとりてならせば風をまねきけり扇や秋のつかひあるらむ 伴雄
 村雨に竹の葉そよくゆふへこそ扇の風のたえまなりけれ 伴孫

泉

いづみ

清水のことなり。手に結びあけて、夏を忘るゝことより、底清き心などよむなり。

松 かけの おほろの清水 そゝしさに もりくるまみつ
 結 ふ手の 板井の清水 月 かけを 夏あきとしど
 わきかへり あたりすしき せきいれて ひすふたもとに

夏 なから 袂すゝしく 音きけり また夏なから
 岩 かねに 山井の清水 いつくの末 結はぬそてに
 すむ宿の 松の玄たかけ ましみつ 秋そかよへる
 岩 まより 風そふきける さゝれみつ 結ひつるまに
 結 ひつゝ 岩かねつたふ 柳 かけ 夏の目くらし
 みかくれて 山松かけの つめたさ 秋風そふく
 石 井つゝ たもとに秋や 氷るはかり いくひすひしつ
 せき入るゝ 玄けみか本 清きこゝろ むかふすゝしさ
 わきかへる 岩もる玄つく 水のあや 夏をよそなる
 立ちよりて 外より夏を 芝居して くみてまらるゝ
 音きゝてた たちさりかたき

名所

石清水 山城

臈の清水 同

走井 近江・龜井 攝津

拾 松かけの岩井の水を結びあけて夏なき年とおもひけるかな 惠 慶

後拾 さ夜ふかき岩井の水の音きけの結はぬ袖もすしかりけり
 新 みちのへの清水なかる、柳かけまはしどてころたちどまりけれ
 同 むすふ手にかけみたれゆく山の井のあかても月のかたふきにけり
 堀 六月に岩もる清水結はすの扇の風をわすれましやは
 同 夏の日もすしかりけり岩間よりもりくる清水むすふ袂は
 同 結ふ手に扇の風もわすられておほろの清水涼しかりけり
 同 結ふ手のたもと涼しくなりゆく泉に秋のすむにやあるらむ
 代 日くらしの聲もる山の松かけに岩まをくゝる水のすししさ
 さど中の板井の清水たちどまりくめはゆきかふ袖とすししさ
 松まけみてる日をさふる蔭もよしおすもむすはんわすか井の水
 すしみすと山井の水をいくむすひむそへともおほわかぬ今日かな
 夏草の下ゆく水をせきとめて秋にちきりやまつむすふらむ
 わたどのゝともしの火かけまたきて夕かせなからうつすやり水
 とめくれは心さへこそすしけれ水くさきよき谷のはそ道
 六月の夏のうき世をのかれてやいはほの中に水のすむらむ

師 西 慈 公 顯 顯 永 契 同 春 枝 蘆 千 養
 賢 行 圓 實 仲 季 綵 後徳 大寺 沖 海 直 庵 蔭 滿

岩かねの苦をつたひて行水に夕は風もおもはさりけり 東喜子

納涼 避暑

夏の日、水邊、及び樹陰により、又の月にむかひて、暑さを忘るゝころを、よむべし。

夏 ふかき 落ちくるたきの 夕 されの 秋 おほえたる
 涼 しさの 秋 やかよへる 更 けゆけの 浦 かせすし
 まつかなる 外面のならの 立 ちならす 夕 風すし
 波 風の 水のひききも 山 かけや 水 のなかれの
 夕 すしみ 夏をわする、 岩 まくら あたりすしき
 音 つれて あたり秋の 苦 むしろ 名 残すしき
 水 まさる 夕波よする 松 かねに 色 をすしき
 夏をよそなる 朝 すしき 下 葉すしき
 柳 かけ 瀧のまら糸 木 ふかき 岩 もるまつく
 若 鮎 つる せき入るゝ水 夕 くれの い さゝむら竹

水むせふ 庭のやり水 はしる 秋の聲あゝる
 日をさふる 旗の下かせ 音さえて 夏のまじき
 れはしま 村雨のきこり 清水せく 岩さるあみ
 うたゝね 蟬のはころも

○

拾 夏山の蔭をえけみや玉はこの道ゆく人もたちどまるらむ 貫
 同行末はまた遠けれど夏山の木の下かけのたちうちかりけり 躬
 後拾 夏山のならの葉そよく夕くれはことしも秋のこころすれ 頼
 同 はともなく夏のそしくなりぬるは人にまられて秋やきぬらむ 堀
 同 夏衣たつた川原の柳かけすゝみにきつゝならすころかな 好
 千 岩たゝく谷の水のみおどつれて夏にまられぬみ山邊のさと 教
 同 岩まより落ちくる瀧の白糸のむすはてみるもすゝしかりけり 成
 新 楸おふるかた山かけにまのひつゝふさけるものを秋のゆふ風 俊
 同 わか宿の外にたてるさらの葉のまけみにそゝむ夏のきにけり 惠
 代 風そよくならの木蔭の夕すゝみまたるゝ秋もわすられにけり 忠
 良慶惠方長忠川綱恒之

川風の柳をわたるそゝしさに人のやすらふはしのうへかな 契
 立ちよれば山かけすゝしなつみ川夏てふことやなみのぬれきぬ 眞
 いさや子等ゆきてすゝまん大伴のみつの濱風まつにふくあり 長
 涼しさのいつこのあれど夏はたゝ夕かせそよくならのしたかけ 春
 すゝしさをまちどる袖に露ちりて苔のむしろをはらふ松風 同
 柳かけ糸よりかけし春よりもくる人まけき夕すゝみかな 宣
 秋さへもまのひてよるは通ふらむ吹風すゝし松のしたかけ 同
 わたつみの浪ふく風をおはしまにまちどる宿の夏なかりけり 千
 かゝり火のはかけまたゝく風ふけて枕にすゝしやり水の音 同
 家ことにおなしなかれをせきいれて夏をよそなる川つらの里 枝
 大井川たえそふきおろす山松のあらしのかげは夏なかりけり 景
 夕川の岩はかうへの苔むしろまくのなしとすゝむころかき 知
 日かけ見ぬ青葉かくれの山本は夏にまられぬどころなりけり 謙
 鮎はしる玉島川の柳かけつりする袖もすゝしかりけり 鶴
 夕日かけ松の上葉にさしきからすゝしくきりぬみつの濱かせ 直
 好夫 紀樹直 蔭 長 海 嘯 淵 冲

眞清水にぬれたる苔のいろ見ればふく風よりもすしかりけり
夏まらぬさらの木かけをどめくれはわれよりささに風そやどれる
さむしろに月をかたしくをすの外のうたゝねはかり涼しさのなし
くれかゝる池のくれはしゆきかへり風まぢをれば月もいでにけり

秀穂 茂雄 斐満 文雄

晩夏

ふつのくれ

秋を催すころをよみて、よむなり。

夏ふかく 一夜をこむる 夏はつる 袖におはゆる
夕されぬ 秋をかねても 秋ちかき 日くらしの聲
はどもなき 夏のゆくて 夏のをはり 松の下かせ
あすよりの 夏のいぬめり 月かけも 西ふくかせ
からころも 衣手すし

古 夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへすしき風やふくらむ 躬恒
千 夏衣とその原をわけゆけはをりたかへたる萩か花すり 顯昭

同 秋風の浪とともによ越えぬらむまたきまゝしき末の松山 親盛
玉 くれかゝる夏野のすゝきはつ尾花秋風またて露そこほるゝ 爲道
六天 今宵しも稻葉の露のねきしく秋のとなりになれるのきりけり 讀人不知
空たかくはたるをさそよ夕風の身にしむまてになれる夏かき 眞淵
ねふの花ちりてなかるゝ河水のはやくも夏はくれんどそらむ 千蔭
きのふしもかきねにねひしくれ竹のひと夜を秋のへたてきりけり 同
つたかつらかゝれる松にはふせみの近づく秋をねにやなくらむ 景樹
秋ちかき梢の蟬の聲きけはすしきものゝかなしかりけり 長廣
ほどゝきすおもへいかなしあすちらむ桐の葉山の夕くれの聲 芳樹

夏祓

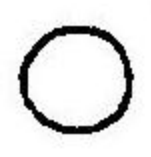
みそきはらひ ぶつのはらひ

古の、六月の末と、十二月の末とに、朝廷にて、百官を集め、大祓とて、全國民の罪穢を、神に祈りて祓はせられしきり。今も宮中にて、猶行のせたまひ、又神社にて、いつくにもあり。

波 かくる 小夜ふけかたに 行く水も みそきすしき

里	人	の	なかる、麻の	こゆる輪に	清きなかれに
世をい	ゆる	る	かへらぬ水に	波の上	に
清き瀬	に		袂もそ、し	いくしたて	秋風ちかき
大ぬさ	の		流れてとやく	さま、くの	白ゆふかくる
とらひ	する		杜の志めな	瀬をとやみ	麻の葉末に
早き瀬	の		す、しきせ、の	夕まくれ	幾瀬にあかす
みたら	しや		波のまらゆふ	夕かけて	みそきしつらむ
みそき	して		河の瀬こと	うきことを	高きいやしき
夏くる	、		おもひのふちの	秋またき	神やうくらむ
もろ人	の		あかれて早き	つみどかも	心もまよき
夏もは	や		川瀬す、しき	夕なみに	夕なみかけて
夏はつ	る		夕風す、し	川風	の
天つ	のり		夜はの川風	水	そ
あか	あふ		せ、のしらなみ	水	上
人	か		千くらたき	青に	きて
					風もなこじの

ふどの	り	ど	汐の八百會	早	瀬	かへさ夜ふかき
罪	も	皆	水よまかせて	川	やし	ろ
底	の	も	中臣の祓	白	に	ぎ
さく	な	たり	一夜をこめて	上	つ	瀬
中	つ	瀬	瀬織つ姫	下	つ	せ
ね	き	こと	千代いのるきり			八針にさきて



拾 六月のあこしのとらへする人の千とせのいのちのふといふなり 読人不知
 後拾 思ふことみなつぎねとて麻の葉をきりにきりてもはらへつるかき 和泉式部
 千 みそきする川せに秋やふけぬらむかへる袂に秋風そふく 読人不知
 代 みそき川せの玉ものあらはれてまられぬ秋や今宵たつらむ 読人不知
 夕はらへかへさ夜ふけてとあせ川秋のとなりいまちか、りけり 契 沖
 天つ罪はらふ夕の雲井ふくかせもす、しくありにけるかな 眞 淵
 うきこと嬉しき瀬にやかはるらむあすかの川にみそきしつれの 千 彦
 さきはらふあまつそかそに露ちりて心もまよきもりの下風 同

みそき川瀬々になかるゝすかの葉のあなすかくし水の白波 春海
 衣手にすゝしくかはる川風のさらふみそきのさるしなるらむ 大平
 みそきする瀧つ早川はやけれいつもりし罪もとまらざりけり 東喜子
 みそきする天つものりどのなかはよりはやふきかはる秋のはつ風 彦麻呂

○八月

立秋 初秋 早秋 新秋

秋立つころより、昨日のあつさを忘るゝと、風の音のかはるとなど、さまざまに
 よむへし、初秋、早秋、新秋の區別の、立春、早春等の別あるかことし。

秋立つと	露けくもあるか	ひとりのゐて	秋を去らす
くある秋	ひとよへたて	おどたて	萩の下葉に
秋の來ぬ	袂すゝしき	吹かせの	あへすいろつく
風わたる	きのふのまゝの	わか宿の	朝けのつゆの
秋といへり	先そ身にしむ	露そおく	秋を去らす
秋をしる	末こそ風の	はしめとて	立ちそふもの
けさのまに	いつしか秋の	吹きかへて	袖にれどろく

朝またき	萩の葉風の	袖ぬれて	秋つけそむる
八重葎	秋立風の	咲かへに	かねてれもひし
松かせも	吹かはるらん	ふくかせ	秋や來ぬらん
打つけに	おどろかれぬる	いつしかも	うらめつらしき
袖かろけ	桐のひと葉	朝戸出の	扇わたるゝ
西ふく風	空のけしきも	秋されは	風のおとにぞ
秋そとや	もろきなみた	秋のいろ	秋の西より
水の秋	きのふの夏	たつた姫	あわれしらるゝ
風かゝる	はつ秋風の	秋のしるし	秋また淺き
秋めく	露にささらて	葛の葉	松ふくかせも
さひしさも	露しりそむる	夕月夜	波にも秋の
三か月	夜はに咲しく	初きり	音ふきかへて
秋のまだ	ことしもなかは	ちりそむる	初秋しるき
わさ田	あわれを知らぬ	なかさ夜	けさのあさけ
露しけく	はのかにけさそ	いとはやも	けさたにかなし

露おきて 秋たちにけり

万 秋たちていくかもあらねはこのねぬる朝けの風いたもとさむしも 安貴王
 同 今朝のあさけ秋風さむし遠つ人雁かきなかむ時ちかみかも 家持
 古 秋さぬと目にはさやかに見えねども風の音にうおとろかれぬる 敏行
 同 川風のすゝしくもあるかうちよする波とともはや秋の立ちむ 貫之
 同 わかせ子か衣のすそをふきかへしうらめつらしきあきのほつ風 讀人不知
 同 大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひしりぬれ 同
 後 露かけしたもとはすまもなきものをかき秋風のみたさふくらむ 千里
 同 うちつけにものそかきしき木の葉ちる秋のはしめを今日そと思へい 讀人不知
 同 秋風のうちふきそむる夕くれの空にこゝろをわひしかりける 同
 同 松虫の初聲さそふ秋風のおと羽山よりふきそめにけり 同
 拾 八重むくらしければやどのさひしきに人こゝ見えぬ秋のきにけり 惠慶
 同 夏衣またひとへなるうたゝねに心してふけ秋のほつ風 安法法師
 後拾 うちつけに袂すゝしくおほゆるの衣に秋のきたるなりけり 讀人不知

同 わさち原玉まき葛のうら風とうらかなしかる秋のきにけり 惠慶
 六 初秋のそらにきりたつから衣袖のつゆけき朝はらけかな 讀人不知
 金 どことばにふく夕くれの風なれど秋たつ日こそ涼しかりけれ 公質
 千 秋のくるけしきの杜の下風にたちそふものいあれなりけり 堀川
 同 八重葎さしこもりにしよもさふにいかてか秋のわけてきつらむ 俊成
 同 どきはなる青葉の山も秋くれは色こそかへねさひしかりけり 覺忠
 同 水くきの岡の葛葉もいろつきて今朝うらかなし秋のほつ風 顯昭
 新 秋さぬと松ふく風もしらせけりかちらす萩の上葉ちらねど 權大夫
 勅 くれゆかの空のけしきのいかならん今朝たにかきし秋のほつ風 家隆
 ひと葉ちる秋やきぬらん春風のおと川柳またうこくちり 長流
 うき草のすゑよりたてる秋風にひと葉かどろく川柳かな 契冲
 濱松にしほ風として難波かたらさひしきに秋はきよけり 同
 東路の衣手さむし白雲のあはとのたけのあきのほつ風 眞淵
 萩さかん野へをとなりすみなれていつかどまちし秋のきにけり 枝直
 にや鳥のいつしかわさ田露ちりてはのへに秋のほつ風よそく 春郷

くる秋のためとて宿りあらさねとどころえかほの今朝の露かな 千
 わかいほのまかきの萩をみかり人衣にするへき秋のきにけり 同
 朝またき庭のあさちにかく露の目にさへ見えて秋のきにけり た
 はしむする袖のにかにすしきはよの夕風に秋やたつらむ 董
 信樂の外山のあさけすしきはよのまの雨や秋をさそへる 春
 秋といへんまけくもあつる涙かな桐はひと葉の今日のはつ風 宣
 朝つく日いまたにはぬぬ山のはの松の葉わたる秋のつ風 景
 かはほりのとひかふ空の夕つく日かけるふ見れば秋たちにつり 御
 秋きぬとまつしるもの涙にてふさかくれたる萩のうら風 直
 たちそめてまたみか月の光にも空にしくる秋のいろかな 弘
 秋といへぬ袖にもかるくちりそめて露は草葉にかさらさりけり 依
 草の葉よ露の玉をし夕よりひとつふたつとそふあわれかな 夏
 夏 依 弘 直 御 景 宣 春 董 同 千
 蔭 平 訓 好 杖 樹 長 海 庵 子 彦

残暑

のころあつさ

秋立てと、いまた、夏のあつさののこりて、堪へかたきさまなどよむあり、

風 たえて かせをまつ心 のこれとも すべてあふきの
 秋 あさき ほどこそなけれ おつき日の 日かけに夏の
 秋 きても 幾日もあらねは 猶のこる また袖かろさ
 けふもまた 猶ゆふかせを 柳 かけ 清水かもとに
 夏はて、 猶たちよりて 眞 葛 原 すしきもなし
 いつしかど くれゆくそらの 風をまつ 風いふけども

玉 秋ふかき日かけに夏はのこれともくるまかきは萩の上風 慈
 六 秋風のふきもつよらぬまくす原夏のけしきに猶かへるかな 有
 同 秋きてもまたひとへなる衣手にいとほぬ程の風そふきぬる 家
 同 秋きても猶夕風をまつかねに夏をわすれしかけそ立ちき 定
 宮城野や秋なほあつさ木のもとの露さ草に風をまつかき 眞
 今日もまたあつさまられてうすさりの梢にかわく朝はらけかき 久
 ともし火のかけはあひけと秋風のすしきはともふかぬ夜半かな 長
 秋はまたてる日もつよくふく風の身にしむへくもあらぬ空かな 正

正 長 久 眞 定 家 有 慈
 徹 穂 胤 淵 家 隆 家 圓

萩の葉にさけは秋なる聲きからあつさは風にまかせさりけり 曙 月

萩 なぎ

音のさひしきさま、又その音のために、夢などの破られたをよむあり。

萩の葉の	風まつほどの	さひしさり	あかむるやどの
音立る	や、肌さむき	夕ぐれの	吹こすかせの
聞わひぬ	露ふき過る	秋風の	ねやのまぐらの
下萩の	身にしむものと	わきてなど	松の下をき
吹きへに	夢もみたれて	吹たてゝ	風わたるなり
我やどの	誰かはきかん	かよひきて	萩のはつかせ
人とはぬ	音よりほかに	萩の葉に	とふ人もなし
さけのまつ	萩の上風	小夜まくら	涙もよほす
うゑしより	上葉なりけり	ひとりねの	ねさめにうきく
萩のこゑ	ねさめさひしき	打そよく	おどろかれつゝ
さやく	風におきふす	濱萩	物おもふ宿

萩はら	枕になるゝ	さ夜ふけて	あはれをそふる
風のつま	夜はのあらし	むびしき	萩のともずり
雨の音に	夢も見はてぬ		

●名所

難波江 攝津 伊勢の濱 伊勢 若の浦 紀伊

万	神風のいせの濱萩をりふせて旅ねやすらんあらし濱へに	讀人不知
同	あしへある萩の葉さやき秋風のふきくるなへにかりあきわたる	同
後	いと、しくものおもふやどの萩の葉に秋とつけつる風のわひしさ	同
拾	をきの葉のそよく音こそ秋風の人にしらるゝはしめかりけれ	貫之
後拾	さりともと思ひし人の音もせて萩の上葉に風そふくなる	小右近
同	萩の葉に人たのめなる風の音をわか身にしめてわかしつるかな	實誓
詞	萩の葉にそゝや秋風ふきぬありこはれやしぬる露のしら玉	嘉言
千	常よりも身にそしみぬる秋の野に月すむ夜半の萩の上風	頼實
六	秋風の萩の葉をふく音さけはいよくわれも物をこそおもへ	讀人不知

勅 なほさりの音たにつらき萩の葉に夕をわきて秋風そよく 信
 夕露をぬのかうへにはほしきから萩ふく風を袖ぬらしける 契
 手まぐらに涙もゆめももろさかきねやのした萩風そよく夜の 春
 風の音にくたけてものをおもへどや露ふきむとふ庭の萩原 春
 山里はいこそねられね松のこゑをやむとすれば萩の上風 同
 さ夜ふけてさけは夕のさひしさはなほかまきあらぬ萩の上風 宣
 よもすがら軒はの萩の風の音よおもひくたくる袖の露かな 千
 萩のはにやどらひやどれ秋の風音さきかせと老のまぐらに 枝
 世の中の音つれよりもうかりけり山の軒はのをさの上風 景
 いかなればあはれ夜ふかくさこゆらむ萩にふかすはた秋の風 長
 長 景 枝 千 宣 同 春 春 契 信

萩

花をめて、露をめて、又その葉をもめてよむなり。

立よりて 立玉まら玉 露なから ねきそふ露の
 露わくる 秋萩のはか 朝 け に 花にありゆく

分ゆけは	萩の下つゆ	つゆしけみ	露のたてぬき
さきかゝる	見せはや人に	ふるさとの	野への小萩の
庭もせに	萩のはつ花	からにしき	すそ野の小萩
をどめこが	枝もたわゝに	玉ぬける	野守かいはの
萩かえ	萩か花妻	眞はき	萩か花すり
いとはき	ひもどくはぎ	から萩	にはふ萩原
玉萩	秋か雨に	小萩さく	ちりのつるまで
こむらさき	打ゑむはき	こき紫	下葉染つく
問へかしな	折てをゆかむ	折て見の	風のふきしく
枝よわみ	枝たわにさく	まめし野	露のしら玉
秋雨	鹿のまからみ	咲つゝく	萩のあうひ
かさしの花	花すりころも	わか紫	露ながら見ん
萩のにしき	萩のはつえ	萩のまつえ	

名所

春日野 大和高圓の野 同 宮城野 陸奥紫野 山城 遠里小野 攝津玉川 近江
 八月 一八五

万 秋風はすゝしくなりぬ馬並ていさ見にゆかむ萩の花見に 讀人不知
 同 眞葛原なひく秋風ふくことにあたの大野の萩の花ちる 同
 古 秋萩の花さきにけり高砂のそのへの鹿の今やあくらむ 敏行
 同 秋萩の古枝にさける花見れいもこのころわすれさりけり 躬恒
 萩の露玉にぬかんとどれけぬよし見ん人は枝なからみよ 讀人不知
 後 秋萩の枝もどをゝになりゆく白露おもくおけはかりけり 同
 拾 露けくてわか衣手はぬれぬどもをりてをゆかん秋萩の花 躬恒
 同 うつろはんことたにをしき秋萩にをれぬはかりもおける露かな 伊勢
 新 ふるさどのもどあらの小萩ささしより夜なく月のかけそうつろふ 伊勢
 をしかふす野へのあき風ふきそめてはころひにけり萩か花妻 眞淵
 おほしたてし庭のはき原さきにけり鹿の音さそふ秋風もかち 千蔭
 さをしかの妻とふ野への夕風に今やちるらむあき萩の花 春郷
 宮人の袖の名残やとゝむらむ今もにはへりまのゝ萩原 春海

ふきわたす萩より萩にみたれつゝ風もいろある宮城野の露 宣長
 秋風にしかの音さこゆ高まどの野へのま萩の花やちるらむ 蘆庵
 一もどのゆかりしもさへあるものをあまた萩さくむさし野の原 枝直
 花のみはもどのころにさきにけり野となるさどの庭の萩原 信恭
 わかやどの垣ねわれぬとおもひしに萩の花こそささしめけれ 直好
 一むらの萩のさかりにうつもれて垣根の井戸のくまれさりけり 景樹
 見わたせば萩のまなひそまるなる今朝白露やおきおるらむ 御杖
 風をまつ花の心はまなりなからちまををしき萩の上の露 光輔
 稻つまのひかりにひとめ見つるかな妹かかさねの秋萩の花 茂岳

薄尾花

すゝきとは、葉によりていひ、をばあどき、穂をいふ、はたすゝき、花すゝき、な
 ともよむあり。

花すゝき ひとむらすゝき うらなくも たれまねくらむ
 まのすゝき すゝきみたるゝ とたすゝき 人まねくなり

糸すゝき	むすひおくとも	まめ	野	よするうらかせ
徳に出る	道もなきまで	朝露	に	こひしきひとに
尾花	ほに出てまねく	人まねく		袖のかすそふ
露赤から	袖より赤ひく	穂なみ		眞袖おほゆる
まらつゆ	ますほのすゝき	むかうゑし		まらゆふをはな
未野	草のたもと	末なひく		かたよりなびく
ふるさと	ほのかに靡く	風たちて		穂にいつる秋は
川さし	下をれ赤から	入野		露もたまらぬ
あれにける	たか袖見せて	まねかれて		原野のすゝき
ふる里よ	袖のあきかせ	岡のへ		すゝきおしなみ
露を重み	ひとむらすゝき	心ありて		初はなすゝき
露にふす	ひともとすゝき	初尾花		うゑてだに見じ

●名所

眞野の入江 近江

小倉山 山城

片岡 大和

古	今よりいうゑてたに見し花すゝきやに出る秋のわひしかりけり	貞文
同	君かうゑし一村まゝさ虫のねのまけき野へともなりにけるかき	有助
同	秋の野の草のたもとか花すゝきはに出てまねく袖と見ゆらむ	宗梁
拾	こてふにも似たるものかな花すゝきこひしき人に見すへかりけり	貫之
後拾	さらてたに心のとまる秋の野にいとまねく花とさかき	師賢
金	うつらなく眞野の入江の濱風よを花波よる秋の夕暮	俊頼
新	小くら山ふもとの野への花すゝきはのかに赤ひく秋の夕ぐれ	讀人不知
	われのみやはさぬ袂とわひぬればを尾か袖も露の夕暮	長流
	なほさりにうゑしまかきのいとすゝき秋をさくさむふしもありけり	枝直
	夕月のほのめく野へを見わたせばを花赤ひきて秋風そふく	蘆庵
	人とはぬ庭のを花のはに出てたれをかまねく秋の夕ぐれ	同
	尾花さへこゝろありけに見ゆるかき秋としいへの袖のつゆけさ	春海
	かくきから月をもやとせ庭の而のを花か袖に露かもあるなり	同
	人とはぬすゑの原のしのすゝきまのにみたれてたれまねくらむ	千蔭
	あはれとも野守の見すやはつ尾花袖ふる秋のあした夕を	同

ふき拂ふ風にたもとをまかせてもなほ露しけき花すゝきかな
旅人のゆきゝの岡のゆふまくれひまなくまねく秋の夕風
ひとかたになひきそるひて花薄風ふく時そみたれさりける
花すゝきなひく交野をわけくて天の河原に秋はきにけり

春庭
茂穂
景樹
有功

女郎花

をみなへし

その名のをかしけれぬ、女に取りあして、あそれるさまによむなり。

いろめく	こゝろおくらん	夕つゆの	えあらぬ花
しをるゝ	よのまのかせの	あたし野の	花のしたひも
たはるゝ	行手にあひく	しらつゆに	花にも葉にも
なひく	誰にちきりて	うつし植し	名をむつましみ
くねる	うしろめたくも	をみなへし	打たれかみ
かりにのみ	ひとりつゆけき	ふるさどに	一かたに靡く
こゝろおく	あまめきたてる	打とけて	雨にしをるゝ
ひとりのみ	あなたのみがた	露しけみ	秋にのみあふ

たをやめ	野へに咲らん	やどりぬる	人しれすこそ
あたなれい	秋かせそよく	むすぶあり	しめゆふ宿
水かゝみ	風になひける	名にめてゝ	ものおもふ袖
咲いてゝ	袖も露けき	野つかさに	そよになひくあ
名にしおとゝ	ゆきゝもまけき		

名所

男山山城

嵯峨野同

伏見の野べ同

朝の原 大和

古	ひとりのみなかむるよりの女郎花わかすむやどに植て見ましを	忠	岑
同	をみなへしうしろめたくも見はるかあれたる宿にひとりたてれば	兼	賢王
同	をみあへしうしと見つゝそゆきすくる男山にしたてりどかもへは	實	道
後	女郎花にはへる秋のむさしのは常よりも猶むつましきかな	貫	之
拾	こゝにしもなにははふらむ女郎花人のものいひさかにくき世に	遍	
金	あたし野の露ふきみたる秋風になひきもあへぬ女郎花かき	公	實
千	女郎花なひくを見れり秋風のふきくる末もなつかしきかな	雅	兼

新 夕されの玉しく野へのをみなへし梳さためぬ秋かせそふく
 月 なにとなくふきすきてゆく秋風にいつしかなるをみなへしかな
 天の川かはへにさきてあふこと秋もかたのをみなへしか
 風のくどわけゆく野へのをみかへしたか名残にか露けかるらむ
 風にのみなひくとまれと女郎花なまめく色の露に見えけり
 をみなへし妹かどかめん花の名をしらてそ家のつとにをりつる
 春日野にいともあまめく女郎花つまこふしかや心まどはむ
 をみなへし色のさかりをねたしとや立かくすらむ野への秋さきり
 うすきりにすきかけにはふをみなへし心ひかる秋の野へかな
 女郎花わかぬあまりにかく露の深草野へも分なれよけり
 秋風のつらき心のまりあから猶うちなひくをみなへしかな
 ○秋風にひとりふかれて女郎花やせたる花のわかれなるかな
 女郎花さきりもはれゆく名張野にいと朝のおもなかるらむ

良 經 契 土 春 長 春 蘆 千 譽 廣 直 大
 平 盛 沖 滿 滿 流 海 庵 蔭 祐 足 兄 平

蘭

ふちはかま

その名の、袴よ、ちなみあれ、それによそへて、よむこともあり。

香に匂ふ 色むつましさ 露ふかみ 露のむすへど
 紫の 秋の野ことに 染かけて ぬしきつかしき
 やどりして さゝかにの糸 ぬきかけて きる人あしに
 きて見れぬ ゆかりの色 いさきよき 露のかたみと
 うつり香 露のこぼれて 誰か移りか から人のかたみ

名所

御垣原 大和

佐保川 同

春日野 同

古 やどりせし人のかたみか藤袴わすられかたき香にははひつゝ 貫 之
 金 さゝかにの糸のどちめやわたならんはころひわたる藤袴かな 顯 仲
 詞 ぬしやたれきる人あしに藤袴みれぬ野毎にはころひにけり 隆 源
 六 秋風にはころひぬらし藤袴つゝりさせてふきりくす鳴 宗 梁
 勅 わきも子が裾野にははふ藤袴露のむすへどはころひにけり 顯 輔

つくま野のわか紫のふち袴たちて見ゐてみあかぬ色か赤
花のいろの露のまかきの藤袴にはひのみこそやつれさうけれ
ぬきかけしぬしいたれそも藤袴なつかしきまて風そかをれる
くれ赤ぬのいろにしさかひ藤袴女郎花にもさせましものを

契 松 枝 根
冲 庵 直 根

朝顔

あさかほ

朝どく咲出て、見る目もすしきよし又その花のさきとよめり。

し	ほ	む	日	かけ	をし	らぬ	し	の	ゝ	め	花	の	ひ	も	ど	く					
蘆	か	き	は	かな	き	軒	の	身	露	の	柴	の	袖	か	き						
露	お	ひ	て	し	を	か	ゝ	る	と	ら	な	し	や	朝	つ	ゆ	お	き	て		
あ	た	あ	る	花	の	す	か	た	起	き	い	て	ゝ	露	に	打	ゑ	む			
お	き	て	見	る	賤	か	あ	み	と	あ	た	な	り	と	ゑ	ま	ひ	の	す	か	た
あ	い	れ	な	り	し	つ	く	を	花	よ	中	垣	に	う	つ	る	あ	さ	か	は	
白	つ	ゆ	を	誰	か	と	い	ま	し	夜	を	こ	め	て	日	か	け	う	つ	ろ	ふ
見	る	め	も	消	る	に	や	す	き	は	ひ	か	ゝ	る	妹	か	か	き	ね	に	

露さへも さかりみしかき

後拾

ありとてもたのむへきかゝ世中をしらすもの朝かほの花 和泉式部

六

おはつかきたれどかしらむ秋きりの絶まに見ゆる朝かほの花 讀人不知

新

たきて見んとおもひしほどにかれにけり露よりけある朝かほの花 好忠

堀

しのゝめにあきつゝを見ん朝かほの日かけまつまのほとしなけれ 紀伊

同

いつまでかをりて見るへき日かけまつ露にあらそふ朝かほの花 肥後

あ	た	ら	し	き	色	も	あ	り	け	り	あ	し	か	き	の	ふ	り	に	し	さ	と	の	朝	か	ほ	の	花	契	冲	
葉	を	し	け	み	日	か	け	へ	た	つ	る	朝	か	ほ	の	露	の	ひ	る	ま	も	猶	の	こ	り	け	り	葉	蔭	蹊
さ	き	ぬ	や	と	宿	の	中	垣	か	い	ま	め	の	う	ち	そ	む	さ	た	る	朝	か	ほ	の	花	景	庵	蔭	蹊	
葉	か	く	れ	を	ま	た	明	ぬ	夜	と	お	も	ふ	ら	む	さ	か	ん	と	も	せ	ぬ	朝	か	ほ	の	花	景	樹	樹
竹	か	き	の	露	に	日	か	け	の	か	よ	ふ	ま	を	し	の	し	わ	か	世	の	朝	か	ほ	の	花	芳	樹	樹	
あ	ま	り	に	も	う	つ	ろ	ふ	色	よ	若	草	の	妻	に	い	み	せ	し	朝	か	ほ	の	花	有	功	樹	樹		

葛

八月

風に葉の吹かへされて、裏の見ゆるより、恨みにいひかけて、よむことあり。

くすかつら 岡のくす葉 眞くす原 所せくはふ
くすいなな うらのつらしき いろつく ひかはよりこん
くすの葉 山下まけく うつろふ 葛のうら風
咲にはほふ 神のいかき うらかるゝ うらめしきかな
露にさく うら吹かへす 葉かくれよ くすの葉風
うらふれて 玉まゝく葛 風ふけは 露の玉まゝく

●名所

深草の室 山城

片岡山 大和

布留野 同

信太杜 和泉

まのゝ濱 近江

万 かりかねの寒く鳴く見ゆ水くきの岡の葛葉の色つきにけり 讀人不知
古 秋かせのふきうらかへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかき 貞 文
新 神なひのみ室の山の葛かつらうらふきかへす秋の來にけり 家 持
同 ひどりねやいとゝさひしき掉鹿の朝ふす小野の葛のうら風 顯 綱
いその上ふる野のまぐす風ふけと世むかしにもかへらざりけり 契 沖

葉かくれにはほふまぐすの花も見むうらふきかへせ月のした風 春 海
むさし野のつゝきの岡のまぐす原秋よく風のはては見えけり 千 蔭
おれわたるまかきのま葛風ふけのうらふれてのみ音のさこゆる 古 道

●菝 荳

かるみや

俗にちかやといふものなり、万葉集に、我かかるかやとよみしより、歌に、大か
たかくよめれど、たゝかやとのみよみてもよきなり。

をれふして たかゝるかやの ふみしたく 秋風に下折
うらかるゝ 露たにとめす つかぬる 音かるかや
吹かせに 末葉みたるゝ 吹すさぶ 野へのかるかや
つまなれや 風のかるかや つかねを まけるまかき
かりよたよ おもひみたるゝ 下 葉 まどろもどろに
つかのまも ませゆふ庭

●名所

秋津野 大和

往來の岡 同

布留野 同

あさは野 同

千 かなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらむ野へのかるかや
 同 秋くれはおもひみたる、刈萱の下葉や人のこゝろなるらむ
 同 ふみまたき朝ゆく鹿やすきぬらんまどろに見ゆる野路のかるかや
 同 さらぬたにみたれやすなる刈かやのつかのまもなく結ふ露かな
 堀 うつらふす野へにみたる、刈かやのかりにたになど人のこゝらむ
 同 いつかたになひくとなしにおのつから風にみたる、野へのかるかや
 同 かるかやはみたれもあへす下をれぬあま野分の風につよさに
 秋風 ふかぬほどたにあるものを今朝かるかやのまどろなるかな
 同 かるかやの野へふくたひにみたるれい露も心や風におくらむ
 春 景 春 自 永 師 道 師 道
 満 樹 夫 寛 縁 時 經 頼 經

草花 秋草の花

秋咲く草花はとくくよむ也、萩、尾花、葛、女郎花、撫子、藤袴、朝かほの七つ
 を、むかしより、七草といふ、この外、桔梗、紫苑、龍膽、なごいつれもよむべき也。
 咲 そむる 小くさのはな もくさ 八千草の花
 駒 なへて ひもどく花の 色ふかさ 匂ひもふかし

まら露に 千草の花の 花の上に 花うちまめる
 おもふとち おく露も 露も色ある うつる心
 月そうつろふ いと薄 花のいろく から錦
 なひきわひたる 染め出す にはひわたる 千くさ
 花のやどりと うちなひく 露あから折る わけ行く
 野とにちる心 いつれか 野へのにしき 雨そく
 見る人のなくて おきまどふ 露のこゝろ ひどつ錦
 心をうつる

万 秋の野に咲たる花を手を折てかさかそれは七草の花、憶 良
 古 みどりなるひとり草とを春は見し秋のいろくの花にそありける 讀人不知
 後 うゑたてゝ君かしめゆふ花あれば玉と見えてや露もおくらむ 伊 勢
 拾 秋の野の花のいろくひとりそゑてわか衣手にうつしてしかな 讀人不知
 六 秋の野は道もわかれますともすれば花のあたりに目のみどまりて 同
 後拾 朝夕におもふとくろは露なれやかゝらぬ花のうへしなければ 良 遷

同 新 月

わかやどに千草の花をうろつれば鹿の音のみや野へののこらむ
 おく露もしつこゝろなく秋風にみたれてさける奥野の萩原
 秋の野の千草の花のいろくを霧はかきしていかくそむらむ
 野となりてふるき都はうつろへどありしにしきの秋はきの花
 おのつから秋の野守となりけり千くさの花を庭におほして
 おしあへて月のひかりになりけり庭の村萩露ふかくして
 さきとさく花野を見れば世の人のそめさす色のかさりありけり
 朝戸出の衣手さむみ野へ見ればを花くす花さきにけり
 をみなへしあたる露の手枕にこゝろもおかす月そやどれる
 さそへともあどより露のおきそひて尾花か袖によわる秋風
 さきまじる花にみたれてちる露も色のちくさの野への夕風
 うつしうゑて野への千草の花かすをおもひのこさぬやどの秋かな
 わか袖も草のたもとゝありにけり庭の千草の花にまじりて
 よもき生の垣ねつゝきの草の原秋の花野となりけるかな
 いろくの花のかきりをうつし植ておれぬ庭をも野とそなしつる

景直 樹兄 子海 長 宣同 枝土 同圃 千契 通紀 順
 満直 沖景 伊家

まぐもをしまぐもをしきを秋草の花のむしろの野へなから見ん

遊 且

○九月

露 つゆ

古へより、四季にわたりてよめど、もはら秋によむ例あり。

まらたま つゆとかるてふ 露はかり つゆさむき庭
 はかなき ひかり清らに 露けき 草の上にかく
 こぼるゝ みかける玉 露のいろ 露の白たま
 おつる 涙のつゆ つゆのま 夜はの白玉
 つゆしも 萩のした露 吹むすふ 雨にまされる
 あたさる 風にみたるゝ きゆる 衣手にかく
 袖におく あかつきつゆ 朝つゆ 露分衣
 露のぬさ 露の玉ゆら 夕つゆ 枝もとをゝに
 露ちる 浅茅のつゆ もろき さゝわけし袖
 夕々 月にみかける 月かけに 月にさえゆく
 かわかぬ 玉にまかふ 日影まつ 稲葉の露

秋のつゆ 木のした露

結ひもどめぬ

苔の上の露

二〇三

万

秋萩よおける白露朝な〜玉どう見ゆるおけるしら露

読人不知

同

秋田かるかりほをつくりわれをれの衣手寒し露そおさける

同

古

みさふらひみかさどまをせ宮城野の木のした露雨よまされり

同

同

山田もる秋のかりほにおく露のいなおほせ鳥の涙なりけり

忠岑

後

わかこどく物思ひけらし白露のよをいたつらにおき明しつゝ

読人不知

六

わかせ子の來ませりけらし我やどの草もさひけり露もおちけり

同

千

大かたの露に何のなるならんたもとにわくの涙をりけり

圓信

新

玉と見て手にもとられぬ白露や月のかつらの雫なるらむ

契冲

秋風にまくすのかへるいなわれの花野の露に月まちて見む

同

いとすゝきなひくと見しはさゝかにのぞかきに露のおもるなりけり

同

あはれさの心にふかくしむものあきのあしたの露にさりける

春海

おほかたの露をおはれと見し人に見せはや秋のあさちふの庭

同

よるさどいらつらの床のおきふしに人のはらはぬ露をみたるゝ

枝直

萩もちり人まつむしも聲かれて露のみまけきあさちふの宿

たみ子

霜とかり氷とならんはしめそとおもへのかなし野への白露

安伎良

秋いたゝ露より外の色そあさまかきも野らとなりはてしより

保敬

花そゝき袖うちしめる夕くれの露もおもひのありけさるかな

春夫

月清みなにそとどひし昔さへなかめてけり草の上の露

源子

草も木もぬるゝ夕の露見れ人の物をおもはさりけり

景樹

○

虫

松虫、鈴虫、さりくす、はたかり、くつわ虫、など、惣て秋なく虫のかきりぞいふ、その聲のおもしろき、めてたき、かきしき、うれしきなど、さまざまによむべし。

虫の音 うき世をあき 草かくれ こゑうらかきし

むし籠 むしの音かきし 音になく 草むらこどに

こゝら鳴 むしのわふる あさちふ 枕の下に

露にさく なくねわひしき 野へとよ 色かはる野へ

おのかさまく ふりいてゝ鳴 たか秋 松の名におふ

月にすむ	むすはれたる	月になく	聲もすみゆく
草のほら	あやかさためす	おのか時	たれをまつ虫
夜寒	風にみたる	よわる聲	こゝろなかくも
ふるさと	花のねくら	籠のうち	われまつむしの
野原	露をいのちに	なきあかす	まつてふむしの
月にまつ	子日せし野への	こゑするかた	かりそめの宿
夕されい	名にはたがひて	こひまさり	ふりすてかたき
とほるへき	いはねに根さす	こゑ	鷹のすゝむし
ふりたつる	ふり行くまゝに	はなやかに	さやかなる月
いかならん	聲ふりたて	たまさかに	つゞれさせてふ
さりとくす	聲なつかしく	みたれゆく	小萩かもとに
なく聲に	野へにならひて	ねさめどふ	かへの中なる虫
夜をさむみ	つゝりもさらぬ	はたかりの	くだまくこゑ
たてぬきに	夜寒をしる	か	遠くなるこゑ
霜さえて	さやかなる聲	の	月にあるよの

あはれなる
あきつるあへよ

こゑのいとさく
露のそこある
露ふかみ
草葉をよきて

万	夕月夜心もまぬに白露のおくこの庭にこほろきなくも	湯原王
同	庭草よ村雨ふりてこほろきの鳴聲さけの秋つきにけり	讀人不知
古	我ためにくる秋もしもあらくに虫のねさけのまつそかなしき	同
同	秋の夜の露こそことに寒からし草村ことに虫のわふれば	同
同	秋の夜のあくるもしらて鳴虫のわかこど物やかなしかるらむ	敏行
同	秋の野に人まつ虫の聲すなりわれかどゆきていさどふらはむ	讀人不知
同	秋の野も道もまどひぬ松虫の聲するかたに宿やからまし	同
同	もみち葉のちりてつもれる我やど誰をまつ虫こゝらなくらむ	同
同	秋風にはころひぬらし藤袴つゝりさせてふさりとくす鳴	棟梁
同	さりとくすいたくななきそ秋夜のなかさかもひのわれをまされる	忠房
後	秋風の吹くる宵はさりとくす草のね毎に聲みたれけり	讀人不知
同	わかこどく物やかなしきさりとくす草のやどりに聲たえす鳴	同

拾	同	同	後拾	同	同	六	金	詞	同	千	新	月	代	類
おほつかないつこなるらむ虫のねをたつねの草の露やみたれん	ちきりけんほどやすきぬる秋の野に人まつ虫の聲の絶えせぬ	秋くれのはたおる虫のあるきへにからにしきにもみゆる野へかな	ふるさとはあさちか原とわれはて、夜すから虫の音をのみそきく	たつねくる人もあらん年をへてわかふる里のすゝむしの聲	とやかへりわか手ならしゝはし鷹のくるときこゆる鈴虫の聲	秋風のやゝふきしけは山さむみわひしき聲よ虫そなくなる	露しけき宿にならひてきりゝすわか手枕の下になくきり	鳴むしのひとの聲にもきこえぬのこゝろゝに物やかあしき	ふるさどにかはらさりけり鈴虫のなるみの里の夕暮の聲	秋の夜のあはれいたれも知るものをわれのみとあききりゝす哉	きりゝを夜寒に秋のさるまゝによわるか聲の遠さかりゆく	秋風や夜さむなるらむ野へことにはたおる虫の聲いとくなり	鈴虫の聲ふりたつる秋の夜のあはれに物のなりまさるかあ	駒なへてゆく人なしにくつわむし遠かた野への草に鳴くきり
爲	讀人不知	貫	道	四條中宮	公	讀人不知	六	和泉式部	爲	兼	西	有	和泉式部	同
頼	之	命	資	條	資	六	六	宗	仲	宗	行	安	部	部

契	同	春	筑	蘆	同	宣	同	同	春	常	千	同	春	同	春	同	古
沖	滿	波	子	鹿	長	長	同	同	同	樹	蔭	同	同	同	同	同	道

きりゝす秋の夜寒の床ちかみわかまどろまぬ壁にきくきり
 宮人のかよひし道も野となりておちしあゆひのすゝむしの聲
 ねにたてゝなかなはかりそきりゝす秋のうらみわれやおどれる
 秋の夜のねられさりけりあはれともうしともむしの聲をきゝつゝ
 いつまでかかくてもきかむ鳴よわる霜夜のむしのあかつきの聲
 露わけてわれかどとへいねをたえてわけこしあとに松むしの鳴
 はしぬして月まつ庭の夕くれにまつなきいつるむしのこゝろゝ
 名のみして秋の末野のはつ霜にうらかれゆくか松むしの聲
 秋風にを花ちる野のきりゝすいたくななきを物おもふころに
 あさち原こほるゝ露をこのころの涙にかりてむしやなくらむ
 鷹すゑてかへるかた野の夕まくれを花かもとに鈴虫そなく
 秋されのかるかやまする淺ちふにわのれみたれてこほるきのなく
 わはれさのいつれのあれと故郷にひとまつむしの月になくこゝろ
 夕されの露ちる小野の秋風にふりいてゝあきすゝむしの聲
 ひどりぬるわか手枕をなくさめてなくやすゝむし松むしの聲、

あれはてし縣の宿をどひくれの月もるかへよむしの音をする 道 平
 われはかりうき夕かと思ひしをくれてそむしもなきはしめける 景 樹
 ひまもなきまくれの雨にすゝむしのふりならされてよわる聲かき 同
 きりくすむかしちきりしたれなればきての枕のもとに鳴らむ 同
 おもふとちきく夜もあるをきりくすひどりさひしと思ひけるかな 同
 かよひこし手なれの駒の道たえてかたみに名のるくつわむしかき 惟 直
 むくら生の軒もる露やさむからし枕にあるこほろさの聲 廣 足
 秋萩の花のにしきをおる野へに手玉もゆらくすゝむしの聲 大 平
 ところせき庭の垣内にうつしても野へのまゝなるむしの聲かき 有 園

稻妻

いまつま

稻妻の電なり、稻の實る頃に、光を放つものあれは、名つけたるあり。その影のは
 かなざまなどよむへし。

稻妻の みるいなつま とはかりの 稻葉をてらす
 夕やみ 人たのめなる はのめく 見るはともなく

あらはるゝ はのめくひかり ちら露に ともぬひかり
 はともなき 雲のいつこに はかなしや 手枕にかよふ
 山めくる やどりもはてぬ たゝまばし 村雲つたひ
 夕月夜 はのかにてらす はの見えし 雲のあなた
 秋の田の 穂の上をてらす かけやとす 浅茅か末に
 雲まより 千くさのつゆ かりそめに やどりもとてぬ
 袖の上に 山きは見えて

古 秋の田の穂の上をてらす稻妻の光のまにもわれやわするゝ 讀人不知

後拾 世の中をなにゝたどへん秋の田をはのかにてらすよひの稻妻 順

新 風わたる浅茅か末の露にたにやどりもはてぬよひの稻妻 有家

同 ありあけの月まつ宿の袖の上に人たのめまるよひのいな妻 家隆

くるゝ夜にわたしたの穂なみきは見えて葉のほる露にうつる稻妻 蒿 蹊

風にちる草葉の露をたつねきてあたくらへする稻妻のかけ 宣 長

夕やみのあやなき小田をもる賤か心なくさやかよふ稻妻 藍 庵

秋の田のたりはの露の玉ゆらもやどりさためぬ稲妻のかけ 枝直
 はの見えし高根の松のかけはかり心よのころよひのいなつま 秀雄
 秋風の音するかたやいなつまの光に見えしまつのむら立 尊朝
 ふしみ山松の木の間稲つまに鳥羽田のおもの露を見るかな 景樹
 稲妻の光に見れば大ひえの山さへきゆるこゝちこそすれ 松根

秋田

あきのた

○ 稲のみのりそむる頃より、取上るまでの事をよむあり、けしき、又ハ豊年をいはふ
 など、さまざまあるべし。

わ	せ	稲葉のくもの	を	し	ね	かつしかわせの		
賤	かゝる	秋のたりやに	は	つ	ほ	色つきにけり		
か	く	て	山田のをしね	い	か	しほ	をしねいろつく	
八	束	穂	白露のおくて	か	り	しほ	いは守る袖	
波	よ	る	穂むけの風	ど	り	はす	いはしる小田	
田	の	實	そどもの小田	小	田	も	る	稲しきのとで

小	鳥	た	つ	神のみとしろ	は	波	た	つ	わ	さ	田	刈	しく						
小	山	田	秋のむら田	引	板	いなはにつゝく													
穂	に	出	る	あ	せ	の	ほ	そ	道	鹿	の	ね	鳴	子	ひ	く	ら	し	
年	あ	る	ひ	た	の	な	る	こ	ひ	た	ふ	る	に	小	鳥	む	ら	た	つ
露	な	ひ	く	ひ	た	の	か	け	縄	か	り	は	そ	小	田	の	秋	風	

古 昨日こそ早苗とりしかいつの間にいさ葉うよきて秋風のふく 讀人不知
 六 秋の田の穂に出てぬれうちむれて里とほみより雁そきにける 貫之
 後拾 秋の田になみよる稲は山川の水ひきかけし早苗なりけり 相摸
 代 秋をたにいつかと思ひし小山田はかりはすほどになりもしにけり 建保御製
 はとゝさすどはたのおもに昨日こそさなへどりしかはつ雁の聲 長流
 夕日さすはしのもみちの枝たわに山田のをしねかけやしてけり 千蔭
 朝なく小鳥さわたる秋風に門田を見れば色つきに鳥 古道
 うゑしよ秋田かるまでいくたひか稲葉の露に袖ぬらすらん 土満

秋風

あきのかせ

野分

のわき

秋すしく吹そめし頃より、や、身にしみて、かなしき心、又、野分の風のあらく、
しみたるをよむべし。

萩の葉に	葉末おしなみ	たえすふく	露ふきこはす
吹しきる	軒のまのふに	夕されは	袖そしはるゝ
秋どふく	夢さそふらん	淋しさに	尾花みたるゝ
かくばかり	ふきつたへきて	誰か袖を	萩のうは風
月さゆる	桐の葉さそふ	柳ちる	わしのまろや
をすのひま	村雲はらふ	野分たつ	野分にあるゝ
野分せし	尾花の袖に	身にしみて	こゝろかあしく
入重葎	あまたしくも	鶉あく	ものわひしらに
吹いつる	露もたまらぬ	いとひても	錦おしなみ
あれわたる	秋の夕風	はけしく	野分にはるゝ
いとしく	浮くもまよふ	風さわき	うきならはしの

万	秋風のさむき朝けをさぬの岡ゆこえなん君に衣かさましを	赤人
古	わかせ子か衣のすそをふさかへしうらめつらしき秋のはつ風	讀人不知
同	住の江の松を秋風ふくからに聲うちそふるおきつしら波	躬恒
同	紅葉せぬときはの山はふく風の音にや秋をきゝわたるらむ	淑望
六	ふさくれは身にもまみける秋風を色なきものと思ひけるかき	讀人不知
詞	秋ふくはいかなる風の色かれは身にしむはかりあはれなるらむ	和泉式部
千	夕されは小野の浅茅生玉しきて心くたくる風の音かき	攝政
新	野原より露のゆかりをたつねきてわか衣手に秋風そふく	太上天皇
代	思ひこし生田の杜の秋風に川音すみぬ夜やふけぬらむ	通具
六百	ふきみたる野分の風のあらければやすき空なき花のいろく	宗房
同	萩の葉にかはりし風の秋の聲やかて野分の露くたくなり	定家
	よもすから野分ふさしくまのゝめにまをれてさける朝かほの花	契沖
	大伴のみつのうら波ふきよせて松原こゆる秋のゆふ風	眞淵
	ふしのねの雪をあふきて行人も秋かせさむしむさし野の原	蘆庵
	野分せしみすゝ高かや影ふして下葉にましる秋萩の花	春海

うつらなくふりにしさをどの飛鳥風を花か袖をふきかへすらむ
松の音ばなれしいはりの軒はにも萩の葉かれし秋の夕風
秋の風このころ耳になれぬるを今しもたつ野分香りけり
野分せしわしたの原を見渡せば鹿のふしどもあらはれにけり
軒ちかき松の青葉もちるはかり野分はけしき秋篠のさど
たつ波のそゝきもそひて夕盪のみつの濱松秋風そふく

千 宣 景 永 正 知
蔭 長 樹 章 主 紀

秋夕

あきのゆふへ あきのゆふくれ

秋の悲秋ともいひて、物かなしきよしに多くよむなり、どに夕くれのあはれのまざるものなれば、その心によむべき也。

さらぬだに なかめすてゝも 秋といへは ちゝのおもひに
世をうしど ゆふへ身にしむ のこる日の そのとどなく
おもひわび ちくさめかねつ うしどても ことわりの外
宿ことどの わきて身にしむ たゝならぬ 鳴たつ澤の
かなしきい この里のみの 袖ぬらす さりたちのほる

ならはしの 露のゆふくれ 松かせに かなしきの衣
うき秋を 夕ゐる雲の むら雨 人やいつらき
あはれのみ こゝろにあまる 身にしみて 涙あらしふ
あはれさの いとゝ露けき かにどなく 秋の夕暮

後拾 さひしさに宿をたち出てあかむれいつこもあかし秋の夕くれ 良 逸
同 思ひやる心さへこそさひしけれ大原山の秋のゆふくれ 周 房
千 わにどなくものそさひしきすか原やふし見の里の秋の夕暮 俊 頼
新 いとひてもあはいとほしき世なりけりよし野のかくの秋の夕暮 家 衡
同 さひしさいその色どしもあかりけり極たつ山の秋のゆふくれ 寂 運
同 心なき身にもあはれはしらけり鳴たつ澤の秋の夕暮 西 行
尾花さへ秋の夕のやおもふわか袖ならぬ袖をつゆけき 契 冲
を花のみほのかに見えてきりわたるやま田のくろの秋の夕くれ 菫 庵
山風の軒の松ふくさひしさいりか身ひとつの秋のゆふ暮 宜 長
夕風にさよるさきさのさゝら波水にも秋の聲のありけり 千 蔭

おく露も萩ふく風もわかためにあらぬをかなし秋の夕暮
 道平
 どり出て、なにおもふとはなれども袖うちまめる秋の夕ぐれ
 景重
 さもこそは物のかなしき秋ならめ夕日にさへもぬる、袖かな
 景樹

秋夜

あきのよ

長きよしを、専とよめり、又夜寒のまさる趣より、あはれさの深きことなどともよめり。

つれく	かりの羽風に	いつのまに	月さき夜
ひどりね	寒き夜さく	物おもふ	枕露けき
ねさめかち	おきぬなから	さゝあかす	床の露けさ
ねもやらて	をしとおもふ夜	いねかてに	露おきそふる
われのみか	虫の音よわる	どもし火	まどうつ雨に
枕にちかき	涙もそひて	ものかなし	身にしむばかり
おきいさゝ	ひまもる月に	ねさめても	猶あけやらぬ

古 ひどりぬる床の草葉にあらねども秋くる宵は露けかりけり 讀人不知

同 かくはかりをしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらむ人さへそらき 躬恒

後拾 すかの根のなかくしてふ秋の夜の月見ぬ人のいふにそありける 長能

新 きりくすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき夜かもねん 攝政

同 秋の夜のはや長月となりけりことわりなりやねさめせらるゝ 花山院

夕ぐれに秋の心につくしにさねさめいなにものおもふらむ 契沖

こほろきのまらよるこへる長月の清き月夜に更すもあらあん 眞淵

月清く秋風さむし今よりはいかてか老のいをやすくねん 蘆庵

時もりかかおもひたゆみてぬるばかり秋の夜さかくやゝなりにけり 千蔭

ともし火のかくけつくせと残る夜にはてきき秋のおもひをそしる 春海

このころのよるはさぬたの音すき雁のこゑはたうちそはりつゝ、 筑波子

なかき夜のやみをのこして入月のあどすさまじき萩の上風 景之

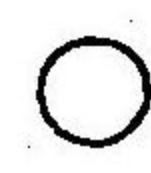
よもき生の垣ねあたりに出なきて秋の夜さむくやゝ成にけり 廣海

秋興

あきのあそび

秋の景物をとり出して、山野の遊のおもしろき意をよむべし。

尾花 さく　こゝろぞとまる　あかなくに　きりたちわたる
 百草 は　おもしろき野　あはれとや　むしのこゑく
 もみちがり　くれおは月に　あかなくに　もみち見がてら
 小萩 はら　山路のさく　かへるさは　わけゆく野への
 目もあやに　虫の聲する　家つと　にしきをかさす
 まねかれて　尾花の袖に



拾　むしならぬ人も昔せぬわか宿に野への秋とし君のきませり　好
 千　さまざまに心そとまる宮城野の花のいろくむしの聲々　俊
 川上の岩かさもみちちらぬまにまたもきて見むいはかきもみち　契
 おもふとち秋の花にたちましりくれおはむしの音をもたつねん　春
 きぬにすりつとにをりつ、秋の野の人のこゝろもちくさなりけり　千
 蔭海沖頼忠

秋望

あきのなかめ



海川山野をいはず、孰れにても立出て、見わたす秋のけしきをよむなり。

遠　か　た　月にはれゆく　見わたせり　秋のみわたし
 川　く　ま　秋の海はら　野も山も　そどもの小田
 川　さ　り　遠かたの一村　朝ぼらけ　松のむらたち
 お　つ　る　雁　松のかけより　錦　か　る　千草の花の
 夕　日　か　け　水　上　遠　く　山　風　の　こ　た　る　見　ゆ
 か　さ　り　に　て　重　る　峰　の　さ　て　も　な　き　み　ね　の　も　み　ち　や
 鹿　の　音　を　紅　葉　吹　か　る　す



拾　川きりのふもとをこめて立ぬれに空にそ秋の山の見えける　深　養　父
 千　朝はらけ宇治の川きりたえくにあらはれわたるせいのあしろ木　定　頼
 新古　伏見山松の陰より見わたせはあくる田面に秋風そまゝ　俊　成
 代　いなみのや山もと遠く見わたせは尾花にまじる松のむら立　同
 夕つく日を花かす糸にはのめきて薄きりかすむ秋の山さと　契　沖
 都人見ぬ海山のおもかけも月にうかへる廣さはの池　真　淵

高まどの野へのうきさりとたえしてを花につくまつの村立
かりかねのつはさの風にさりはれてたえく見ゆるみねのもみち葉
遠かたや千町のわさ田色つきてきりまにうすさかりのいつら
こどもなき野へを出ても見つるかおもすの鳴音のあわたしさに

春 海
千 蔭
同 樹
景

秋雨

秋のしくれ 秋さめ 秋のあめ 秋のむらさめ

冬の雨よまされぬやうに、必ず秋のものをとり入れて、よむへし。

かきくらし	正木いろつく	染つくす	鹿の音寒く
雲まよふ	草葉色つく	なかめわび	萩のまをるゝ
ふりすぐる	虫の音まめる	風さわく	風のゆくてに
風きやふ	色かはる草	風の心	まど打すさぶ
風はやみ	露をのこして	きゝあかす	はれみくもりみ
ふりそゝく	もみちをそむる	あはれなる	空かきくらし
秋の聲	立ゐる雲	たゝからぬ	桐のくち葉に
村雨の	露もかすそふ		

万 拾 玉

秋田かるかりの庵に時雨ふりわか袖ぬれねはす人なしに 説人不知
 名をきけいむかしあからの山なれどまくるゝ秋の色まさりけり 順
 秋の雨の物さむくなる夕くれの空にまをれてわたるかりかね 永福門院
 袖ぬらすこの夕くれのこゝろをは空にもしるや秋のむら雨 宣長
 桐の葉のつもるか上にそゝくなるあしたの雨は秋の聲なる 千蔭
 ちりの世の人はまらしなはせを葉に雨の音さく秋のあはれを 春海
 萩の葉のあらし雨にありぬれどさひしき音のかはらざりけり 景樹
 こはろきの鳴音まめりてふくる夜の軒はさひしき雨そゝきかな 濱臣
 鷺の居るさし根の柳かつちりて村雨そゝく秋の川水 勝繼

秋野

あきの

秋の野の千草のさける、露のおけるなど、さまゝくによむなり。

いろくくの 千くさ花さく むしのね かたみにすれる
 萩のさく 秋はいろくの ふすむの床 小さゝか原

野 守 野に出て、 かもひやる 虫の音まけき
 真 菘 ゆきすきかたき 心 ゆ く かるかやのつゆ
 一 夜ねて 尾花か末に 夕 露 に 露にひかれて
 夕 きりに 紅葉も見ゆる 鶉 ち 露をはわけて
 秋 の野は 心みたれて

古 同 後 六 同

秋の野にみたれて咲る花のいろのちくさに物をおもふころかき 貫 之
 秋の夜の露をは露とふきあから雁のきみたや野へをそむらむ 忠 岑
 いつれをかわきてしのはむ秋の野のうつろはんとて色かはる草 讀人不知
 ゆくくと見れどもあかぬ秋の野はゆきもやられすともなし 伊 勢
 秋の野は道もゆかれすともすれば花のあたりに目のみどまりて 讀人不知
 八千草の花の盛りにきて見れば野守の花のあるしかりけり 依 平
 かの見ゆるを花かるとにゆくほどまたはるかなるむさし野の原 忠 之
 にはひさきあら野の小かやふのれさへ秋のはに出て、人まねく也 尊 孫
 むさし野の尾花か末に去ら雲のかゝるやふしの高ねなるらむ 千 枝 子

目に見えて身にしむ風そのこりける尾花か末もくる、野原に 景 樹

月 秋のつき

月といへい、天象の部に入るへきなれども、中古より秋のものとしてよみあせり。

待月 つきなまつ

山の端にさし出る月あとの、待遠あるよしをよむあり。月まらて、夜のいたくふけたるきともよめり。

惜月 つきなむしむ

さやけき月の、西山にかたふくあどを、をしみてよむなり。

月 きよみ みねよりいつる よひく に 八十島かけて
 月 やどる 雲ふきはらふ 月 みれは くまきくすめる
 月 のふね くもりなき世 さし出る かたふく月の
 て る 月 月すむよはの かけ清き どわたる月の
 かつらを うらより遠に 月 かけよ 月にむかしの
 月 夜よし なれしむかしの 月 ふけて 月によさく

もみちして	鏡なるらん	おもかけに	ちりもくもらぬ
やゝふけて	玄くものそなき	袖の月	峯こしの月
月さゆる	月の行方に	月よみ男	月静かなる
くもりなき	くま見えそめて	月もる	月のみやこに
みそら	獨そらゆく	雲間	鐘の音さゆる
見るまゝに	もりの木のま	いくめぐり	露のよすが
あくかるゝ	千草をてらす	天のはら	月にうかれて
水底	入方のそら	雲のみを	村雲のたえま
まちわふる	晝にもまがふ	ねやの中	板井の清水
心あてに	涙にくもる	庭のおもに	まともさゝれす
ふけにけり	月の桂に	山のはに	夕つゆにはふ
待るゝ空	またるゝ月	うら風に	雲玄つかなる
心つくしの	月まつほどの	かゝみなす	いてかてにする
一年の	まつに久しき	月のおもわ	雲なきみね
浮へる月	光さやかに	いるかた	かたわれつき

夜わたる月	松の梢に	いゝるさ	影かたふきぬ
影ふくる	影はのかなる	くるゝ待	中そらたかき
秋のそら	入かたちかき	月おそき	待にふけゆく
月の氷	あけもあゝるゝ	もちの夜	またれて遅き
いさよひ	名よしおふかけ	月こよひ	もあかの月
待たてる	庭に立出てゝ	たゝすむ	ふしきから待つ
ねさめして	枕さためそ	かたふく	こよひばかり
月更る	ふかきよの月	をしと思ふ	入をゝしみて
有明の	さよふけかたに	かきりなく	入なんどする
弓張の	入かたちかき	いるかた	雲にかけそむ
月さかり	夜の更ぬらし	秋のあかは	こよひの名をや
さしのゝる	まはしまたるゝ	立まさる	ゐながらむかふ
はしむして	また夜をのこす	中そらに	わけられた近き
はともなく	長き夜あかぬ	みねのわたり	西にゐるかけ

万 わかせ子かかさしの萩におく露をさやかに見よと月にてるらし 讀人不知
 同 待かてよわかする月は妹かきるみかさの山にこもりたりけり 八 東
 同 かり高の高圓山を高みかも出くる月のかそくてるらむ 坂上郎女
 同 さ夜中と夜のふけぬらしかりかねのさこゆるそらに月わたる見ゆ 讀人不知
 同 ぬは玉の夜のふけぬらし玉くしけ二上山に月かたふきぬ 道 良
 古 白雲に羽うちかはしとふかりの數さへ見ゆる秋のよの月 讀人不知
 後 月かけのあなし光の秋の夜をききて見ゆるはこゝろなりけり 同
 拾 水のおもにてる月かけをかそふればこよひそ秋のもなかなりける 順
 同 よもすから見てをわかさむ秋の月こよひの空に雲なからなん かねもち
 後拾 いつも見る月そとおもへど秋の夜のいかなるかけをそふるなるらむ 長 能
 同 宿ことにかえらぬ物は山のはの月まつほどのこゝろありけり 加 賀
 同 月かけは山のは出る宵よりも更行そらそてりまさりける 長 房
 金 有明の月まつほどのうたゝねの山のはのみと夢に見えける 土御門左
 同 風ふけは枝安からぬ木の問よりほのめく秋の夕月夜かな 忠 隆
 同 なかむれのふけゆくまゝに雲晴て空ものどかにすめる月かな 同

同 名残をく夜半のあらしに雲はれて心のまゝにすめる月かき 行 意
 詞 いかなれの同じ空ある月かけの秋しもことに照りまさるらむ 右大臣
 同 難波江のあしにやとる月見れの我身ひとつのまつまさりけり 顯 輔
 同 秋の夜の月ましかねておもひやる心いくたひ山をこゆるらむ 嘉 言
 千 すみわひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月かき 俊 成
 同 わたら夜をいせの濱萩をりしきて妹こひしらに見つる月かき 基 俊
 同 秋の夜の心をつくすはしめどてはのかに見ゆる夕月夜かき 實 家
 同 足曳の山のはちかく住とてもまたてやは見る有わけの月 静 運
 同 わかていらん名残をいどいおもへはやかたふくまゝにすめる月かな 長 方
 同 うき雲のかゝるほどたにあるものをかくれなはとそ有明の月 近 衛
 新 こよひたれす吹く風を身にしめてよし野のたけの月を見るらむ 頼 政
 同 雲はみなはちひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな 攝 政
 同 天の戸をおしあけかたの雲間より神代の月のかけそのこれる 同
 同 山のはに雲の横さる宵の間へ出ても月を猶またれける 道 因
 同 山のはをいてかてにする月まつとねぬ夜のいたく更よけるかな 爲 時

同	夜もすからひとりみ山の楨の葉にくもるもすめる有あけの月	長	明
同	ふくるまであかむれいこそかなしけれ思ひもいれし秋の夜の月	式子内親王	
同	いつしかも月にあく夜いなければも秋としなれいねられさりけり	教	長
勅	あけはまた秋の半もすきぬへしかたふく月のをしきのみかは	定	家
同	天つそらこよひの名をやをしむらむ月にたなひく浮雲もなし	寂	逆
同	待えても心やすむるほどそなき山のはふけていつる月かけ	師	季
續拾	いるほどもまたはるかある中空に出てやすらふ夜半の月かけ	爲	業
代	いつくにか思ふことをも忍ふへきくまなく見ゆる秋のよの月	相	摸
同	まこと、はたれか思はむひとり見て後にこよひの月をかたらは	西	行
同	見わたせいわか世もいたくふけにけり西へかたふく山のはの月	赤	染
丹	よひのまにかもひしことをかもふかなはつかの月のすみのほるまで	頼	政
	秋の月かもふ人にもわらなくにわひみそめてはえこそねられね	長	流
	あかしかた夜舟こき出てこゝろさへつなくかたなき月を見るか奇	同	
	ましらなくか奇し尾上の月かけもや、木傳ひてさ夜ふけにけり	契	冲
	みよし野のさき山風に雲はれて川音きよくすめる月影	同	

眞	大舟に小舟ひきそへますか、みすみた川原に月を見るかな	眞	瀟
同	にはどりのかつしかおせのにひしほりくみつゝをれの月かたふきぬ	同	
同	はりま路や夕きりはれて久かたの月おしてれりいなみ野の原	同	
枝	たちならふまつえをくまど見るかうちに松をはなるゝみねの月影	枝	直
同	やどちかき外山の杉を煮るへにてまたれしかたに月の出にけり	同	
同	かたゝ舟いさこきいたせいさなどりあふみの海の名の月見ん	同	
春	さ夜ふけてさやけき月を見つゝをれの軒はの松に秋かせそふく	春	郷
千	朝かはのや、咲出し露のうへに煮はしはやどるあり明の月	千	蔭
同	ふるさとのかやか軒はの苔の露あはれいくよの月やどるらむ	同	
同	行水のいつこのあれどかつら川名をむつましみ月やどるらむ	同	
同	秋の夜のとりあつめたるおはれさをとふにも似たる月のかけか奇	同	
春	おのつからすまも明石もおもかけにうかふの月の夜ころさりけり	春	海
同	山の名のあらしにさるゝ月見れいとなせの波にかけそくたくる	同	
同	月をおもふ友こそまれになりにつれむかしの秋をたれどかたらむ	同	
宣	ひとりゐていりかたらかき月見れい宵のあはれい數ならぬか奇	宣	長

朝きりに 眞砂の上よ ねさめて いまた旅なる
 ねさめとふ 月にうかれて 月にさく 都にむかふ
 どわたる 天傳ふかり 來るかり かのか羽風
 この秋も きゆる面影 玉 つ さ つらもみたれて
 夢さめて 月の下行く

●名所

伏見の田井 山城 鳥羽田 同 廣 澤 同 大井川 同 佐保川 大和 立田川 同
 田養の島 攝津 住の江 同 明石潟 播磨 堅田浦 近江 不忍池 武藏

万 古 同 金 勅 六

あしへなる萩の葉さやき秋風のふきくるなへにかり鳴わたる 讀人不知
 春かすみかすみていにしかりかねの今そさくなる秋きりの上に 同
 まつ人にあらぬものから初かりの今朝なく聲のめつらしきかな 元 方
 玉つさはかけてきつれどかりかねのうはの空にもきこゆるかな 讀人不知
 わたの原八重の沙路にどふかりの翅の波に秋かせそふく 鎌倉右大臣
 ことつけてとふへきものをはつかりのきこゆる聲はるかきりけり 讀人不知

見わたせの穂のへきりあふ櫻田へかりきわたる秋の夕くれ 眞 淵
 ふるさを秋しもかりのわかれけんくるをさくたにかなしきものを 宣 長
 うい玉のよふけてきなくかりかねのものおもひをるわれそきける 美 樹
 有明の月まつをどをさくさめて雲井のかりも鳴てすくらむ 千 蔭
 おほくらの入江とよもしくる鷹の翅の風に月すみわたる 同
 秋の野にを花あしけの駒とめて空ゆくかりの聲をさくかき 同
 秋風のわきて身にしむ夕かなはつかりかねの聲さしより 春 海
 なに江や浦浪かけてすむ月にかりかね遠しあちしま山 技 直
 きり深みくれぬと見れりかりかねのきこゆる空に入日さすきり 久 胤
 月清きつたの細江の秋風にひとりしくれて鷹のきにけり 秀 雄
 物おもふやとにや秋のたけぬらむ雲井のかりも音つれにけり 知 記
 夕つく日さすや岡へのきりはれて松原遠くかりわたる見ゆ 永 章
 わけやの山へはるかにとふかりの聲さへきりにかくれけるかな 景 樹
 なかくにかのらぬもの鷹かねの空にさためしちきりなりけり 同
 はるくどやなきこはれて雨寒き夕の空にかり鳴るたる 玄 脩

鳴しき

水邊に、専ら住むものなり、そのさま、その羽音の、物さひしく、物おこれるものおれり、さる意よてよむなり。

はねおど	鳴のふしど	たつまき	かすかく鳴
いくも、羽	羽音も寒き	のやり羽	鳴たつかた
も、羽かき	月にはねかく	あかつき	物さひしさの
どひわたる	あり明の月	ねさめして	秋の夕暮
月をみて	わひしかりけり	小山田	澤への床に
聞まゝに	かたしく袖の	あきあへぬ	鳴の羽風に
袖ぬれて	しつか門田の	ふす鳴の	あこれ身よしむ
あられなり	おもひぞとる		

●名所

芹川 山城 長岡 同 伏見の澤 同 猪名野 攝津 根岸 武蔵

拾 新 六 同 代

しちかどり猪名のふし原さひわたる鳴の羽音かもしろきかき	讀人不知
こゝろなき身にもあられのしらけり鳴たつ澤の秋の夕くれ	西行
あかつきの鳴の羽かきもはかきあつめてそわひしかりける	讀人不知
あかつきにはねかく鳴のうちしめりいく夜か君にこひわたるらむ	同
あけかたに夜のなりぬらし菅原やふし見の田に鳴をたちぬる	季經
いねかねて長きをかこつ秋の夜におもひ敷そふしきの羽かき	春満
夜もから秋の野風にちる露のかすかさあへぬ鳴のはねかき	宣長
露ふかき猪名のふし原たつ鳴の羽風に月のかけそこほるゝ	千蔭
澤水に羽うちならしちく鳴のあさるあしへに日にくれにけり	廣海
さひしさいいつこもおなし夕ともしらてや鳴のよそに立ちむ	養滿
あけぬとて鳴たてとも大澤のあしまの月のかけもさわかす	景樹
くれ竹のふしみの澤にゐる鳴のはねかきしけし夜やふけぬらむ	三冬

鶉うつら

野よ、居るものよて、あこれなる鳥あり。世をうつらなどいひかけたるもあり。

うつらふす	うつらの床	あされよも	下葉やさむき
うつら鳴	田中のさと	夕まくれ	きりのまかきに
小萩原	床しめつらん	あれさてし	秋をうつらの
ふしわびて	庭のかや原	をかやか下	夕きりなひく
身にしみて	露のまくらや	尾花ちる	おのかふしど
あれはてゝ	露ふく風に	秋ふけて	尾花か本に
うらふれて	秋風さむし	下露に	聲しきるなり
風さむみ	はらふ秋風	たつうつら	うつらとやなく
ふりはてゝ	たかため秋を		

●名所

深山草 山城 大原同 伏見同 眞野の江 近江

後拾 秋風に下葉やさむくなぐぬらむ小萩か原にうつらなくなり
 同 君なくてあれたるやどの浅茅生にうつら鳴なり秋のゆふくれ
 千 夕されの野への秋風身にしみてうつら鳴なりふか草の里
 俊成 時宗 網成

新 あたにちる露の枕にふしわひてうつらなくなり床のやま風 俊成女
 同 秋をへてあれれも露もふか草の里とふもの鶉なりけり 慈圓
 あいれなるうつらの聲もたちとひていとさひしき野への夕暮 宣長
 かりくらし秋の野守の宿かれの庭の小萩ようつら鳴なり 梁長
 川きりに巨勢のしの原見えねども夜のあけたれや鶉きたつ 景樹
 同 ふか草やなれても秋の夕きりに猶ふるさとゝうつら鳴なり 安寺
 同 尾花ちるふもとの野への秋風をたれにかこちてうつら鳴らむ 大秀
 同 すみすていほどもへきくにふる里のうつら鳴野と奇りにけるかな 尊孫
 野分せしあしたの原の風あれてあらぬ方にもうつらなくなり 廣海
 秋をへてあれのみまさるふる里にちかこるすめいうつら鳴あり 久胤
 衣うつ里をはなれてきけりまた尾花かもとにうつら鳴あり 有功
 同 萩原下葉いろつく宮城野の野風をさむみうつら鳴なり 長英
 ○ 小鷹狩 ことかがり ことか
 小鷹を手にすゑて小鳥をとりに行くなり、秋の野のさまなど、とりそへてよむへし。

うつらかる　をぶさもさやに　はしたかの　草葉ふみわけ
 かり人の　野路のかへるさ　むら　鳥　花ふみしだき
 駒あへて　を花みたれて　いやふさ　野へにそやどる
 狩暮し　小たか手にする　どがりする　手とちれにちる
 かへるさは　百草のいさ　きりふかみ　野にも山にも

○名所

深草野 山崎 嵯峨野 同 粟津か原 近江

後 家つとにあまたの花もをるへきにねたくも鷹をすゑてけるか奇 兼
 同 かりにのみ人の見ゆればをみなへし花の袂を露けかりける 貫
 後拾 秋の野にかりそくれぬるをみあへしこよひはかりの宿もかさなん 元
 眞萩ちりを花みたれてかり人の袖ふさかへす秋のゆふくれ 春
 くるす野やあしたの風もはやふさの手はちれにちる秋萩の花 千
 深草やゆくての小萩花見えて鳥かりしつへく野はかりにけり 敏
 かりくらしかへるかた野に月ふけてをぶさもさやに秋風そふく 信
 友 則 蔭 海 輔 之 盛

鷹の名のつみもわすれて村雀さわくかり田にかりくらすか奇

濱 臣

霧 きり

いつこにても、霧の立わたれる、けしきをよむべし。

秋 きり　きりふさかれる　朝ほらけ　入相のかね
 初 秋 の　きりよくもれる　うちしめる　佐保の川きり
 朝 きり　きりのどなり　あけかたき　浦のともふね
 夕 きり　きりの上行く　川 上 の　こむる朝きり
 ひらきり　きりの下こぐ　分わびて　月に及ぬ
 天 つきり　きりのたえま　未見えて　きりよりくる
 きりの海　きりのそなた　一むらきり　朝日はのめく
 うすきり　袖のあきり　たちそむる　ひらくなひく
 きりこむる　きりまよふそら　たえく　雲もましりて
 きり深み　きりの下道　打きらし　里やいつこと
 きりくらし　きりのまかき　夜をのこそ　木末も見えず

立わたる かり立のぼる 舟よばふ ふもどくくらさ
朝くもり ゆくさきたる

万 しなか鳥猪名野をくれの有馬山夕きりたちぬ宿のさくして 讀人不知

同 朝きりにぬれにし衣かわかすてひとりや君か山路こゆらむ 同

同 大野山きりたちわたる我きけくおきその風にきりたちわたる 憶良

後 浦ちかく立あさきりいもしはやく烟とのみそ見えわたりける 讀人不知

同 秋きりの立ぬる時にくらふ山おほつかなくそ見えたりける 貫之

同 花見にどいてにしものを秋の野の霧にまどひて今日もくらしつ 同

拾 むつまじき妹せの山としらぬいや初秋きりのたちへたつらむ 讀人不知

同 川きりのふもとをこめてたちぬれに空にそ秋の山の見えける 深養父

後拾 わけぬるか川せのきりのたえくく遠かた人の袖の見ゆるい 繼信母

金 うち川の川瀬も見えぬ夕きりに楳のした人舟よのふなり 基光

六 おどにきい花見にくれに秋きりの道さまたけにたちわたりつゝ 讀人不知

千 秋山の麓をこむる秋きりの裾野の萩のまかききりけり 伊家

勅 夜そにたゝかひやかけふり立そひて朝きりふかし小山田の原 慈圓

代 朝日さす高根のみ雪そらされてたちもおよそぬふしの川きり 家隆

難波江や入江のあしのはのくくとわけゆく空よきりたちわたる 土満

ふきしをるまきのを山の朝風にたちものほらぬ宇治の川きり 春満

關こえてうちての濱に今朝みれいあふみのきりの海にそありける 長流

へたてゝもあくる光は花すゝきやのくく見ゆる野への朝きり 宣長

衣うつ聲いのこりて夕きりにやゝかくれゆく山もとのさと 萱庵

旅人のどもしすてたる松の火のきりにまめれる朝やらけかき 久胤

あふ坂の關の杉村きりこめてまらみかねたる有明の月 景樹

楸ふくあらしの末に波みえてたえくはる佐保の川きり 千廣

かの山のはなわにかゝる薄きりをかたよく月のかけに見るかな 尊孫

大井川松風たかく月すみてどなせになひく水のうききり 永章

くれふかく山路へたつる夕きりにゆくへあやふむあしからの關 春庭

五百重山きりふかゝらしすか笠のまつくもおつるあり明の月 諸平

みしま江の玉江あたりを霧のうちをしくも舟の過にけるかき 忠秋

鹿 しが

秋ふかく鳴く音をめてよめり、又妻こふ鹿とよむもあり、

月よなく	あらしにたぐふ	ひとりなく	聲のまぢかき
さをしか	秋ときまのぎ	夕くれて	ふしどさためぬ
かのこ	峯たちならし	庵ちかく	夜はのくさふし
さくまゝに	稲葉をわけて	曉かた	朝ふす小野
ふすしか	何をかひよと	草にふそ	萩をまからむ
ねにたてゝ	鹿そなくなる	吹風の	花ふみしたき
寒き夜に	忍ひもあへず	たつしかの	あかしかねてや
夢さめて	身まやしむらん	うらかれて	枕にちかき
聞くとに	山下とよみ	秋風に	月と共にや
妻こふと	聲すみのほる		

名所

嵐山山城 嵯峨野同 小倉山同 伏見山同 春日野 大和 高圓野同

万	秋萩のちりのまかひによひ立てなくさる鹿の聲のはるけさ	湯原王
同	など鹿のわひなきすなるけたしくも秋野の萩やまけくちるらむ	讀人不知
古	秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿のつまやこふらむ	敏行
同	妻こふる鹿そあくある女郎花のかすむ野の花としらすや	躬恒
同	山里は秋こそとにわひしけれ鹿の鳴音に目をさましつゝ	忠岑
後	たれきけと聲たか砂にさをしかのなかくし夜をひとり鳴らむ	讀人不知
拾	紅葉せぬときはの山にすむ鹿のかのれなきてや秋を知るらむ	能宣
金	さもこそは都こひしき旅あらめ鹿の音にさへぬる、袖かか	雅光
千	さひしさをなにととへむをしか鳴み山の里のわけかたのそら	廣言
同	さくまゝにかたしく袖のぬるゝか赤鹿の聲には露やそふらむ	秀能
新	野分せし夜半の草ふしわれはてゝみ山にふかささをしかの聲	寂蓮
同	たくへくる松のあらしやたゆむらむ尾上にかへるさをしかの聲	攝政
六	秋萩にまからみかけて鳴鹿の聲さゝつゝや山田もるらむ	讀人不知
	たつ田山つまとひかぬるさをしかもなきてやひとり夜半にこゆらむ	契冲

さをしかの妻とふ雪の岡のへに眞萩かたしきひとりかもねむ
 袖ぬらすつまとおもへど鹿の聲きかぬ夕のさひしかりけり
 たくひこしあらしの松にやすらひて軒はすきゆくさをしかの聲
 ふかゝらぬ外山のいはのねさめさへさひしき秋のさをしかの聲
 をきの葉の風のためまにきこゆるのみねをへたつるさをしかの聲
 さ夜中とふけゆくみねの月かけにいやすみわたるさを鹿の聲
 柚山にこるやつまでのおとやみてつまこふ鹿の聲きこゆあり
 あさもよし紀の川きりやへたつらむ鹿をさくある妹と背の山
 ま萩原花ちるころのさをしかのさく音さそいぬ夕風もさし
 かく聲そあかつきかたにきこゆある外山の鹿もねさめしつらむ
 鹿の聲きこえぬ里の夕くれいたゝ大かたにかさしかるらむ
 さゝかれてきけりこそあれ白雲のたつ田のおくのさをしかの聲
 さかすしてあらましかりとおもふまで夕かさしき鹿の聲かき
 をしか鳴片山里の秋の聲こやさひしてふかさきりあるらむ
 そみよしの松のあらしにありにけり遠里小野のさをしかの聲

眞淵 順通 宣長 枝直 同 千 同 同 土 春 景 知 同 同 梁 尊
 孫 紀 樹 海 滿 蔭 直 長 通 淵

わけゆけり小野のうすさりたえくに残るもさひしさを鹿の聲
 白雲の夕ある山にさく鹿の聲のすゑふくみねのまつ風

演 重 胤 臣

擣衣

衣うつ、きぬた、

きぬたどの、衣を板にまきて、打ちらすとにて、月夜きにするわざあり。
 か り 衣 月もすみゆく うつおとも 月にうらみて
 からころも 袖つけころも 妹かうつ 夢おどろかす
 賤かうつ ひくきぬたの 月にうつ ねぬよあまた
 巻かへす 花すりころも うちわひて 雲むにひく
 うちつけに 暁かけて 千たひうつ こきたかきた
 うつこゑ うたゝねの床 さゝあるゝ 秋の夜寒に
 さよころも 身にしむ聲の わかせこか 音もたえく
 月 清み 霜夜の月の 里 人の 里もさためす
 夜を寒み 夢もくたくる 露 分 衣 たれこひてうつ
 長 き 夜 秋さりころも

●名所

桂の里 山城 吉野の里 大和 秋篠の里 同 須磨浦 播磨 玉川の里 武蔵

後拾 さ夜ふけて衣してうつ音さけいそかぬ人もねられさりけり 伊勢大輔
 同 うたゝねに夜やふけぬらむから衣うつ聲たかくありまさるあり 兼房
 同 から衣長き夜すからうつ聲にわれさへねてもあかしつるかち 資綱
 六 たかためらうつどかはさく大空よ衣かりかねあきわたるあり 讀人不知
 千 松風のおとたに秋のさひしきに衣うつあり玉川のさと 俊頼
 同 さ夜ふけてさぬたの音そたゆむある月を見つゝや衣うつらむ 覺性法親王
 新 みよし野の山の秋風さ夜ふけて古さとさむく衣うつあり 雅經
 代 あしかきに木の葉ふさしく追風の音もまぢかく打衣かち 典侍
 むしの音にまさるゝはかりさ夜ふけてたゆみにけりあ衣うつ聲 契沖
 夜もすから萩ふく風にねぬ人をいかにさめよと衣うつらむ 同
 淺ちふやたか秋風を身にしめてひとり夜寒の衣うつらむ 宣長
 いこま山あらしふさそふ秋まのゝさとの夜さむよ衣うつあり 同

秋風の寒くふきぬる夕よりひと夜もおちす衣うつあり 蘆庵
 すまの浦やまほやき衣うつつちのおともま遠に夜いふけよけり 枝直
 ものおもふすさひとさけい月さよみたゆむさぬたもわはれありけり 千蔭
 さ夜ふけてさけいのかあしあいめ人のふしみの田居に衣うつ聲 春海
 有明の月よりこゑそひゝくあるねさめてたれか衣うつらむ 景樹
 山里の松のあらしの遠近にたゆめのまきさるさ夜さぬたかち 廣足
 秋風のうちふくたひにおどつるゝさぬたの萩の友にやあるらむ 知紀
 淺ちふや秋風ふけて月かけもかたふく軒に衣うつあり 秀雄
 玉しまの川上遠くそむ妹にやともしられて衣うつあり 内遠
 衣うつかた野やいつら狩くらしきりたちまよふ天の川つら 春門

菊 きくの花 きく

花のめてたきこと、さかりの久しきこと、千代の香あることあどよむなり、

秋 きく 菊の花すり ちらきくの きくのひと本
 八重 さく 老せぬ菊 つむさく 菊のさかつき

菊の露 折る袖にはふ 菊の枝 菊のまつく
 むら 菊 九重の庭 あまつ星 下葉に月も
 もしきに 宮人のかさし 心あてに 月にうつろひ
 白たへに 萬代の秋 初霜 いくたひをりて
 千年まで まがきの菊の 千世かけて ちめゆひたて
 谷川の ませの中に むらさきに 山路のさくの
 折る袖 秋をかさねて いく秋の 色そひさしき
 うゑて見る 露の玉しく ませわた 菊うる市

●名所

染井武蔵 大澤の池山城 紫野同 戸難瀬同 吹飯濱和泉
 吹上濱 紀伊

古 秋風の吹上にたてる白菊の花かわらぬか波のよするか 菅原朝臣
 同 ぬれてはす山路のさくの露のまにいつか千とせをわれのへにけむ 素性
 同 久かたの雲の上よて見るさくの天の星かどあやまたれける 敏行

同 心あてにをらはやをらむ初霜のおきまとはせるしら菊の花 躬恒
 後 万代の霜にもかれぬしら菊をうしろやすくもかさしつるかち 伊衡
 六 菊の花うゑたるやどのあやしき老てふことをまらぬちりけり 貫之
 同 おく霜のそめまとはせる菊の花いつれかもの色にはありける 同
 新 山川のさくの下水いかぢれのかかれて人の老をせくらむ 興風
 勅 ぬれてをる袖の月かけふけにけりまかきの菊の花のうへの露 鎌倉右大臣
 代 たくひあき色にもあるかなさくの花いかある露のかけのあるらむ 謙徳公
 今日にあふ露のこの身もいつまでのちきりかかけししら菊の花 蘆庵
 さきしより日數のあまた過しかどうつろふへくも見えぬ菊かな 春郷
 見れどあかぬにはひちりけり長月の光そへたるしら菊の花 春海
 仙人のうゑしまかきの菊の露わくるたもとも千とせかをらむ 千蔭
 今も猶かはらさりけりいにしへの人のめてけむしら菊の花 節子
 まら菊の花のさかりになりけりおくらむ露の千世の數見む 景樹
 花といへんあへてあたある世中にちることしらぬ菊もありけり 有功
 秋夜の雲井さやけき月かけにけたれぬほしやしら菊の花 茂岳

仙人のすみかやちかくありぬらむ昔のしつとも菊の香そする 茂 岳
白さくの千代をこめたるまかきにもとまらぬもの日陰なりけり 知 紀

紅葉

もみちの、楓、柞、樺、檜、蔭、蔦、その外何の木にても、秋の末に染め出る色をいふなり。

露	しもの	もみちしぬらし	ひま見えて	下葉のこらす
露	時雨	山姫の手そめ	織り出す	おくれさきたつ
色	ふかき	色のむらこ	色そはる	いくしほしくれ
う	すくらく	露に色そふ	正木つら	なへて木葉の
染	つくす	ふる雨ごとに	もみち葉	袖のてるまで
下	枝まて	時雨にまさる	下もみち	匂ひそめけん
山	姫の	花にもまさる	蔦もみち	露のなごりや
夕	日さす	きのふのうすき	染はて	日も夕しほ
唐	錦	うすきりの立	初しほ	てる日の光り

は	そはら	散るかけさへ	千しほ	山のみなから
初	しくれ	夕きりこめて	下てる	打ふくからに
め	もあやに	月の光を	見るまゝに	猶そめんどや
く	れなるの	錦也けり	ちらぬまに	四方の山のは
紅	葉かり	時雨をいそく	手折りつゝ	かさすもみち

名所

瀧野川	武藏	飛鳥山	同	大井川	山城	稻荷山	同	小倉山	同
高雄山	同	佐保山	大和	布留の山	同	初瀬山	同	守山	近江

万	鴈かねの來あきしあへにから衣たつ田の山のみちそめたり	詠人不知
同	時雨のあめまなくしふれの檜の葉もあらそひかねて色つきにけり	同
同	夕されの鴈かこえゆく立田山時雨にきはひいろつきにけり	同
同	古さどのはつもみち葉を手をりもて今日そわれ來しみぬ人のため	同
古	雨ふれと露ももらしを笠どりの山はいかてかもみちそめけむ	元方
同	秋風のふきにし日より音羽山みねの梢もいろつきにけり	貫之

同	白露のいろはひとつをいかにして秋の木の葉をちゝにそむらむ	敏	行
後	から衣たつたの山の紅葉はものおもふ人のたもととなりけり	讀人	不知
同	おそくどくいろつく山のもみち葉のかくれさきたつ露やおくらむ	元	方
拾	枝なから見てをかへらむ紅葉はをらんほどにもちりもこそすれ	兼	光
同	秋さりのたゞまくをしき山路かなもみちのにしきかりつもりつゝ	讀人	不知
後拾	からにしき色見えまかふもみち葉のちる木のもどいたちうかりけり	兼	盛
六	時雨ふる神無月こそちかからし山おしちへて色つきまけり	貫	之
千	くれてゆく秋をい水やさそふらむもみちなかれぬ山川をさき	内	大臣
新	うすさりの立まふみねのもみち葉のさやかちらてもそれと見えけり	高	倉院
	萩か花野へのさかりのどく過て山のにしきにうつる秋哉	長	流
	このころの朝露さむみなくかりのはかひの山やもみちしぬらむ	同	
	花の時山里人にちきりかさしもみちやすらにいさゆきて見む	契	冲
	夕つく日さやかに見ゆる山もどにあるしゆかしきはしもみちかな	同	
	山さとの軒はに秋のいろ見えて人めにかゝる鷲のもみち葉	宣	長
	白雲のたえ間色こそ立田山みねの梢やもみちしぬらむ	同	

山寺の鐘のきこえてもみち葉に入日のかけのなほのこりけり	枝	直
たつた彦風かふかせそかきろひの岩かさもみち今さかりなり	千	蔭
わか山の梢をはやくそめすてゝふもどにかよふはつしくれかな	同	
秋のいろはあさかのもりのむらもみち時雨の後そまたもきて見む	春	海
もみちせし昔の秋のあととめてもみちをわくる千代のふる道	同	
ぬのひきのたきのしら糸それをたにむらこにそめてちるもみちかな	同	
大井川入江にはほふもみち葉のこかるゝかたに舟のどゝめむ	同	
うは玉の黒木のませに月おちてよそめかなしきむらもみちかき	重	老
岩根ふみのはれぬ松の木の間より谷のもみちもあらはれにけり	知	紀
光あき谷のかけこそ中くにもみちのてらすどころきりけれ	同	
はつしくれふりしはかりのあと見えて梢のみこそ色つきにけれ	景	樹
くれあむのこき一葉こそちりにけれわかゆる駒の黒髪のうへに	同	
秋ふかき山のしつくやそめつらん岩根の苔もうそもみちせり	尊	孫
日かけさすあしたのさりのたえまよりぬれてもにはほふ初もみちかな	永	章
水清く山かすかななるあたりよりそりこしもみち色のこどある	有	功

暮秋 殘秋 送秋 借秋

秋の暮れ行くを惜しみ、或はこのころあきのけしきなどをよむあり。

ゆくあき	をしむたもとに	秋の日も	むさしくおくる
秋はつる	めぐりこん秋	秋のどまり	秋の末にそ
秋のくれ	かへらぬものを	むしのねも	おきし日かすに
秋の色	残りすくさく	色かはる	おもかけにのみ
かきりどて	もみち葉のいろ	玄ら露の	ことごとく
玄るへとも	かへるみちに	今はどて	見はつる月の
をしめとも	秋そすくさき	秋くるゝ	末野の千くさ
をしむに	秋のいにけり	木からしの	暮ぬとはかり
霜ふかき	ちりかひくもる	けふのみと	秋のかたみや
霜かかれて	うらかれわたる	我袖に	さそはれてゆく
をしむてふ	けふにとちめて	秋を送る	入あひの鍾

古 年ことよ紅葉あかす立田川みさとや秋のどまりあるらむ 貫 之
 同 夕月夜をくらの山にさく鹿の聲のうちにはや秋のくるらむ 同
 同 もろとも鳴てとめよさりくす秋のわかれのをしくやのあらぬ かねもち
 同 道えらはたつねもゆかんもみち葉をぬさと手向て秋のいにけり 躬 恒
 同 み山より落くる水のいろ見てそ秋の限りとおもひしりぬる 興 風
 後 もみち葉はちる木のもとにどまりけり過ゆく秋やいつちあるらむ 讀人不知
 後拾 夜もすからあかめてたにもあくさまむあけて見るへき秋のそらかは 兼 長
 同 もみちちるころあけりけり山里のことごとく袖のぬるゝは 元 輔
 同 どしつもる人こそいとゝをしまるれ今日はかりある秋の夕暮 資 通
 同 夕日さすすそ野のさきかたよりにまねくや秋を送るあるらむ 頼 綱
 六 もみち葉のわかれをしみて秋風は今日や三室の山をこゆらむ 貫 之
 同 もみち葉に道はうつみてあともなしいつれよりかは秋の行らむ 素 性
 千 ちきよわるまかきの虫もどめかたき秋のわかれやかきしかるらむ 紫 式部
 同 さりともとおもふ心も虫の音もよわりはてぬる秋のくれかき 俊 成
 新 身にかへていさゝは秋ををしみ見むさらてももろき宿のいのちを 守覺法親王

勅 續 代

山里の秋の末にそおもひしるかあしかりけり木からしの風
をしめども野への草葉もかれはて、露たに秋のどまらさりけり
長月のありあけかたの空の月心ほそくそかたふきにける
さをしかのたち野の原に秋くれて今いくよどか妻をこふらむ
今日のみとおもはぬ秋の夕たにさひしきものを小雨そほふる
日にそひて近づく秋の別路もよなくはそき月にこそしれ
つれもなくくれてもゆくかうき秋といひしありのすさひなりしを
山里の秋の名残そあはれある落葉ましりにを花ちるころ
山風のさそひつくして秋の色に木の本にたにのこらさりけり
むさし野や千草の花の露の色におもへぬ秋のはてのありけり
山の端のしくれふるらし長月の有明の空に雲のかゝれる
月清き小松か原も下草のうつろふ色にかけさひにけり
うつりゆくまかきの菊の露霜に日かけうれしくなれる秋かき
綱手はすどまやの軒の夕つく日うらさひしくもくる、秋哉
くれてゆく秋にならひてわれもとや枝にもみちのどまらさるらむ

西行 淳成 俊成 眞淵 古道 蘆庵 千蔭 春海 千蔭 尊孫 枝胤 久胤 敏胤 千弘 基弘

何ならぬかぎりものいかなしきにあはれきりける秋のくれかき
ことわりを過ても寒し長月の有明の月に霜やおくらむ
長月の有明の月ののこりきなりぬる空に時雨ふるなり
夕つく日かけうすれゆく梢より秋も今はとちるもみちかな
あかてしもわかる、秋のゆくかたのこの曉のかねやしるらむ
もみち葉をよそにさそひて吹風に秋の庭にもとまらさりけり
葛かつらかへらぬ秋の別路にうらみかけたる野への夕露

景樹 同 同 光秋 謙秋 信友 春庭

○十一月

初冬

冬の来て、幾程もさき事を、よむなり。

ふゆのきて ちるもみち葉よ 風のおとに 外山はゆきに
冬されは 草木もいまは 冬つしくれ 風の音かはる
冬たちて 冬や霜かれの 山かせの 北山おろし
初冬の 冬くるゝころと 秋すきて けふよりあるゝ

冬	來ぬと	梢まはらに	色あがら	さわくあらしの
秋	くれて	とけしさそふる	かれそむる	わかためとてや
秋	とて	霜こそむすへ	空さゆる	おくとつ霜
木	からしの	庭のくさきも	寒けさの	冬のわけはの
風	さゆる	さらひつくして	さえゆく	冬やきぬらむ
冬	の來ぬ	うすこほりせり	人めさへ	梢さひしき
霜	とちて	冬こもりせり	落葉して	紅葉ふきおろす



後 神無月ふりみふらそみさためあき時雨と冬のとしめありける 讀人不知
拾 柚山にたつけふりこそ神無月時雨をくたす雲となりけれ 能宣
千 秋のうちにはあされまらせし風の音のとけしさそふる冬にきにけり 教長
同 外山ふく嵐のかせの音さけはまたきに冬のおくそしらるゝ 和泉式部
同 さまくの草葉も今の霜かれぬ野へより冬やたちてきつらむ 右大臣
新 いつのまに空のけしきの變るらむはけしき今朝の木からしの風 國基
同 おきあかす秋のわかれの袖の露霜こそむすへ冬やきぬらむ 俊成

代

さひしさのつま木こるへき宿あればわかためとてや冬のきぬらむ 前攝政
木の葉ちる空のまくれて都たにものゝさひしき冬はきにけり 契沖
もみちちり鹿のねたゆる山里は秋をきのふとおもとさりけり 春海
きのふしも月にうかりしうき雲の行へや今朝の時雨あるらむ 千蔭
をしかりし秋にわかれましたもどより今日の時雨はふりそめにけむ 枝直
霜もどや空にみつへくあかつきのかねの音さえて冬のきにけり 春滿
ねさめする涙のまくら霜とちて曉さむし冬やきぬらむ 宣長
まくれつゝあさちいろつくにはほとりのかつしかのへに冬のきにけり 筑波子
人めさへ草さへかれし山さとのまれの細道ふゆにきにけり 長流
小山田のきのふかりてしいあからに霜ふりおきて冬のきにけり 土滿
朝毎にあらす硯のすみやかに手のうらさむき冬のきにけり 藍庵
落葉せぬときはの山の朝あらしさゆるや冬のはしめあるらむ 黄中
冬きぬとことわりかはに音つれて楨の戸すくるはつしくれかあ 利和
夏かけとたのみし椎の木の本におつる實ひろふ冬のきにけり 弘訓
もみち葉のちりものこらてふるさとの梢の月にこからしそふく 信友

もみち葉も菊も昨日の色なから朝風さむし冬やきぬらむ 依 平
 くぬ木原梢まはらにみる月のもるかけさむし冬やきぬらむ 同
 村しくれま木の板屋に音たてゝあはたしくもきたる冬哉 永 章

時雨

まくれ まくれのあめ

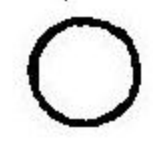
冬にありて、ふる雨をいふあり、ちる木の葉、又ハ風の音にまかふよしなど、さま
 くによむなり。

ふりすさふ	まくれをくだす	夕しくれ	この葉ふりませ
あらしふく	まくれにありぬ	はつしくれ	そらにのこりて
夕つく日	まくれぬかたも	さよしくれ	よものやまかせ
それくもり	風やまくれの	袖にふる	またまくるあり
山めくる	まくれかちなる	おどつれて	時雨をそさく
風ませに	あみたまくるゝ	入日かけ	冬のやまさど
むらしくれ	ふりもさためす	いくめぐり	雲たちまよふ
風はやみ	嵐にきはふ	晴やすき	風のゆく手

板まもる	俄にもふる	袖ぬるゝ	たゝならぬ雲
よをこめて	もるゝ夕日	ねさめして	何をそむらん
音にたに	うたてまをるゝ		

万 紅葉をちらす時雨のふるなへに夜さへ寒き獨しぬれハ 讀人不知
 後 初時雨ふるほどもなくさは山の木末あまねくうつろひにけり 同
 同 ひどりぬる人のきかくに神無月俄まもふるはつしくれかあ 同
 拾 名をきけハ昔なからの山おれとまくるゝころハ色かはりけり 順
 後拾 あはれにもたえず音する時雨かあどふへき人もどはぬすみかを 兼 房
 六 まくれの雨まなくしふれハ神南備のもりの木の葉もいろつきにけり 讀人不知
 金 音にたに袂をぬらす時雨かあ楨の板屋のよはのねさめに 定 信
 千 あかつきのねさめに過る時雨こそもらても人の袖ぬらしけれ 康 宗
 同 ひどりぬの涙や空にかよふらむまくれに曇る有明の月 右 大 臣
 同 山めくる雲の下にやありぬらむすそ野の原に時雨ふるあり 頼 政
 同 みね越にあら葉つたひおどつれてやかて軒はままくれきにけり 仲 頼

雨とふる つもるくち葉 冬の来て それにもぬるゝ
 ちりはてゝ 梢さひしき 時雨かど いづれかもろき
 木からしの 涙と共 に ふみわけて 風すさまじき
 山かけや 雨かどまかふ もろくちる 朝清めする
 吹おろす 見てもまのはん 吹みたる ねさめてきけり
 はてのまた もらぬ時雨 おどきゝて あらしふくさり
 道たえて 錦おりかく 板ひさし 庭のこけちよ
 咲すさふ あらしよもろく ちどりなく はかき色の
 わかさりし いかさる風の



万 妹かりと馬に鞍おきていこま山うち越えくれのもみちちりつゝ 讀人不知
 古 こひしくい見てもまのはむ紅葉をふさなちらしそ山おろしの風 同
 後 足引の山のもみち葉ちりにけりあらしのさきに見てましものを 同
 後拾 神無月ねさめにさけり山里のあらしの聲の木の葉なりけり 能
 六 ちるもみちよるも見よとや月かけの梢のこらすてりわたる覽 貫之

金 ふきみたるはゝそか原を見わたせの色なき風も紅葉しにけり 成保
 千 まはらさる榎のいたやに音にしてもらぬ時雨やこの葉奇るらむ 俊成
 新 入日さすさはの山への柞はらくもらぬ雨と木のはさる也 好忠
 同 ほとと有明の月の月かけにもみちふさおろす山おろしの風 信明
 ちらりちれ庭の木の葉にまかせてんはしめてたゆる道にしあらぬ
 山風のふく夜の月に音にしてくもるともさくちる木の葉かき 契沖
 風ふかぬよるの軒はにおどするの霜にもたへぬ木の葉かりけり 眞淵
 とふ人のまれなるほども忘れけり木の葉ふりしくまへのたき橋 枝直
 わかつきの鐘のひゝきにねさめして落る木の葉の聲をこそきけ 同
 かけおほふ軒はのはゝそちりかひてをりくもる有明の月 同
 おちたさちみあわさかまく谷川にもみちみたるゝ夕あらしかな 春海
 わかつきにおち葉かささるこそさきて冬のこゝろとちりにけるかな 廣海
 高ねにいはつ雪見ゆるあしたまでまたかた岡にちるもみちかき 太訓
 もろくちる葉廣かしはの一もとにせはさかきねのうつもれにけり 景樹
 ひらすゝめねくらたつぬる小林の夕かけてらしちるもみちかな 鶴夫

はらへともきはちりうかふ山の井のもみちあからにくみてけるかな 有 功
 風はやみ光さえゆく夕月の下にまかれてちる木の葉かな 尊 孫
 かし鳥の聲ふきささそふ木からしに苔路さひしくちるもみちかな 濱 臣
 夕日かけあゝめに風の色見えて川つら遠くなる木のはかき 春 門
 山さとの庭の落葉をふく風のあとこそ見ゆれどふ人のさし 知 紀

残菊

のこりのきく

冬來ても、猶残りて咲る菊をめぐつるころより、霜に色の變らざるきく、よましく
 によむべし。

白 菊 の 時雨にそめて 谷ふかみ 霜にもかれず
 霜 赤 から 冬野のさく 霜 かれ の かたみどのこる
 神 無 月 菊のひともと 色かへぬ 霜も一重の
 冬 赤 から 秋より後の にははすば 霜にもたへて
 日 にそひて かれふにさける 咲のこる 冬枯しらぬ

詞 草かれの冬まで見よと露霜のかきてのこせるしら菊の花 好 忠
 千 今朝見れのさあから霜をいたゝきて翁さひゆく白菊の花 基 俊
 新 かけさへよ今のとさくのうつろふの波のそこにも霜やおくらむ 是 則
 代 おく霜に色の見えねとさくの花こむらさきにもありにけるかき 町 尻 子
 霜さゆる閨のいたまの有明の月かけかをるませのしらさく 千 蔭
 咲花におくれてそめし木葉さへちりしく庭にのこる菊かき 萱 庵
 赤こりそとかをるまくらもわはれ也ふせやのさくの秋におくれて 春 海
 霜をへて千とせまてとやにはふらむ神さひにけりしらさくの花 景 樹
 まらさくの花のかけある池水にはひあからにこほりとつらむ 知 紀
 おく霜をかさねてにはふまら菊に冬かれしらぬませのうちかき 春 満
 いつくとも秋のゆくへいしら菊の残るかたみも色かはりつゝ 宣 長

霜

しも

霜の秋の末より、やうくおきそむるものにて、雪より先のあかめさるるよまはせり
 むまり。

霜ふかし 霜おさまよふ かく 霜 葉分けの志も
 霜しるく 雪と見るまで 初 雪 どくもむすへる
 霜ふる 落葉か上 霜けふる 今朝の初霜
 丸木橋 つもれぬ風の 消かへる 夜床の霜
 浅ちふ 所せきまで 小さゝ原 野へのゆふつゆ
 朝日かけ むすふ初霜 霜かゝる むらゝ見ゆる
 ふみわけて 前の板はし



万 天とふやかりの翅のおほひ羽のうつくもりてか霜のふりけむ 讀人不知
 後 まこもかる堀江にうきてぬる鴨のこよひの霜にいかたわらむ 同
 後拾 落つもる庭の木の葉を夜のほとにはらひてけりとみする朝霜 同
 詞 どしをへて星をいたゝく黒かみの人より霜にかりにけるかち 能
 千 楸生ふる小野のあさちにかく霜の白きを見れぬ夜やふけぬらむ 基
 新 草の上にてゝら玉ぬししら露を下葉の霜とむすふ冬かち 好
 代 わしからの山路の月にみぬこえて明れぬ袖に霜を殘れる 成 茂

月にいりて庭のかり生にまのし猶のこれるかけの霜にそわりける 千 蔭
 あり明の月の光をさかからに芝生にのこす霜のいろかち 同
 ありわけのさえにしかけを松の葉にまはしのこせる霜のいろかち 同
 日かけうとさかたへの霜となりけり夕風さゆるをかの露原 春 海
 朝またき門田の鳥やあさりけむ霜にわどあるまへのたさはし 同
 夜をさむみおき出て見れぬ有明のかけにきはひて霜そおきける 土 満
 夜をさむみぬての朝けにちかむれば初霜をろし水くきの岡 蘆 庵
 山さとの垣根にむすふ朝霜のとけぬものどもかりにけるかち 景 樹
 さえし夜の朝けに見れぬちよ竹の末たわむまで霜ふりにけり 尊 孫
 ありま山やま風さむみさやゝと霜に聲ある猪名のさゝ原 戊 申
 おき出て鏡にむかふ朝ね髪とくもむすへる今朝のこつしも 有 園

枯野

ふれの

冬野

ふの

冬草

ふの

冬枯の野への、けしきの、ものさひしとまをよむなり。

草

か れ

末葉かれふす

冬 かれ て

千くさの野へも

人めさへ 霜おきあまる 虫のねも 冬かれわたる
 見し秋の 霜かれとつる かれをはな かれくのこる
 小 さ、原 まねくも淋し かれのこる 色なき野へ
 面 かはる 野への夕風 かれをき 冬野のはら
 道 芝 霜にあどある 霜さえて 草のたもと
 松 ひどり 野川けふりて かれふ 風もたまらぬ
 下 かれ なられこぼる、 雪ふふす ありし色あき

後拾 霜かれひどつ色にそなりにける千種に見えし野へにあらすや 少 輔
 新 野へ見れば尾花かもどのおもひ草かれゆく冬になりそしにける 和泉式部
 同 霜かれのそことも見えぬ草の原たれにどはまし秋の名残を 俊成女
 六百 色々の花ゆゑ野へにたち出て心までこそ霜かれにけれ 有 家
 新撰古 秋の色うつろふ野へをきて見れば悲れはかれぬものにそありける 慈 鎮
 つくはねのみどりはかりにむさし野の草のそつかにのこす冬かき 眞 淵
 も、花の草はかれ野の花すゝきはのかに残る秋のおもかけ 宣 長

霜やたひふる野の千くさかれふして花にわけこしおもかけもなし 春 海
 わけゆくやかすみもきりもへたてなき霜のかれ生の末も見えけり 千 蔭
 いろもなきかれ野の原とおもひしを花よりけある今朝の霜かな 直 好
 朝風にかれふのすゝき折ふしてふすゐの床ふ月そのこれる 濱 臣
 霜かからにはひし菊のいろもあはのこらぬ野へとなりにけるかな 東 喜子
 浅茅原ちふのはつ霜朝さえてなかねをしかのあどを見るかき 久 胤
 有明のひかりの霜どうすらきて野への枯生に朝かせそふく 依 平
 霜ふかみ草のみなからかれはてゝのこる小笹にあらしふくなり 清 成

寒樹

ふゆのき

寒松

ふゆのまつ

寒樹は、常磐木ならぬものをよむとあり。いつれもさひしきよしなるべし。寒松は、操のかはらぬなどよみあすと多し。

冬 来ても 梢さひしく ひとつ松 霜にもかれぬ
 木の葉ふり もどの色なる 葉かへせぬ 山もあらはに
 風 さゆる 外山なる 梢にさゆる

霜 八たび 操かへせぬ さえわたる としの寒さに
露 霜 の みねの松はら

六 世の中に久しきものは雪のうちにもとの色かへぬ松にそありける 貫 之

新 山川の岩ゆく水もこぼりしてひとりたくるみねの松風 讀人不知

勅 いかなれの冬にまらぬ色赤から松しも風のはけしかるらむ 隆 信

同 吹きむすふ氷に瀧はどちはて、松にそ風の聲もをしまぬ 式子内親王

同 み山木ののこりはてたる梢より猶しくるはあらしなりけり 慈 圓

玉 葉かへせぬ色しもさひし冬深き霜の朝けの岡への松 爲 子

冬かれにさとのわらやのあらはれてむら鳥すたく梢さひしも 眞 淵

日をさへし大河へのくぬ木原冬の風たにたまらざりけり 同 海

もみち葉は風にまかせぬ木々もなしひとりをのへの松をのこして 春 海

冬ふかき門のひと木の松にのみよものあらしのなこりをそさく 千 蔭

松をのみふくかど見えて冬かれの枝にたまらすゆくあらしかき 弘 訓

波かゝるうら風さむみから崎の松のしつえはたる氷してけり 成 章

かくなから春をまつへき松か枝の心もしらそよくあらしかき 年 平

あしからや箱根にたてるみ山杉冬はあらしのやどりありけり 久 胤

立田山ちりし木の葉のあととへいろなき枝にあらしふくなり 定 信

木からしに下もくちさへちりはて、いとつねあるまつの色かな 景 樹

まもと原すさふあらしのひまをなみさひかぬ枝もさむけかりけり 伴 雄

まくれして朝霜おきて雪ふりて松のみさをあらはれにけり 隆 正

木 枯 こがらし ふゆのかせ

冬にありて、音もすさましく、吹ある、風をいふなり、

こゑたて、 ひなしき枝 風 さむし 錦ふきたて、

音 高 あひれのかれぬ 一 さかり 落葉のこらぬ

吹たゆむ 草のみさから おくしもの こからしのおど

こからし 千くさに見えし ふきとふく 身をこからしの

吹しとる 音もさひしく 吹たつる 嶋やまおろし

きゝわびぬ 夢もやふれぬ すさましく かへしのかせの

十一月 吹まよふ ねこし山こし

後 今朝のあらしさむくもあるかな足曳の山かきくもり雪ふるらし 讀人不知
 詞 外山なる柴の立枝にふく風の音きくをりそ冬のものうき 好 忠
 千 都たにさひしさまさる木からしよみねの松風おもひこそやれ 定 頼 母
 勅 木の葉ちるあらしの風のふくころの涙さへこそおちまさりけれ 相 摸
 ちりはてゝむなしき枝をいつまてかふきすさふらむ木からしの風 千 蔭
 このころのいねをねさりけり木からしに木の實おちくる山かけの庵 同
 我宿の軒のいたふきちるまてにふきもしきるか木からしの風 御 杖
 わけそむる外山の峯の木からしにほのく見えてちる木の葉かな 尊 澄
 おほつかき木のまに見ゆる夕月もちるのかりある木からしの風 景 樹
 もみちちる外山のみねの木からしもふくれの月の聲となりけり 春 夫

氷

氷ども、つらども、たるひどもよむなり。いつれも寒さ心よむり。

さえしくて よのまにこほる うすこほり 流れもやらて
 氷り ゆく あしろのこほり 下むすふ 棹にくたくる
 行 舟 の 淺瀬にむすふ ひもかゝみ 山かせに氷る
 池 水 の 鴉のかよひち 朝こほり かへる音みきき
 つらゝゐる 淀みにむせふ うすらひ あしまのこほり
 あつこほり つらゝの床の 朝 氷 こみきとの氷
 どちらとて、 氷にけらし たる ひ つらゝのまくら
 氷 の 上 とけぬ日影

古 大空の月の光しさむひけれの影みし水そまつこほりける 讀人不知
 後 おもひつゝねなくに明る冬の夜の袖のこほりのどけすもあるかな 同
 同 氷こそ今はすらしもみよし野の山の瀧つせ聲もきこえず 同
 拾 とひかよふをしの羽風のさむひけれの池のこほりそさえまさりける 友 則
 同 冬の夜の池の氷のさやけきり月のひかりのみかくきりけり 元 輔
 同 ふしつけし淀のわたりを今朝見ればとけんどもなく氷しにけり 兼 盛

後拾 さまむしろはうへさえけらしかくれぬの音間のこほり一へしにけり 頼 慶
 同 さ夜ふくるまゝに汀やこほるらむ遠さかりゆくしかの浦波 快 覺
 金 玄赤か鳥るなのふし原風こえてこやの池水こほりしにけり 仲 實
 干 山さとの篁の水のこほれるの音さくよりもさひしかりけり 輔仁親王
 同 いつくにか月は光をとゞむらむやどりし水もこほりぬにけり 親 宗
 同 きふこそ秋はくれしかいつの間に岩間の水の薄こほるらむ 公 實
 新 立ぬるゝ山の玄つくも音さえて楨の下葉よたるひしにけり 守覺法親王
 勅 かちたきつ岩さうこえし谷水も冬は夜なくゆきさやむなり 式子内親王
 なには江のあしかり小舟さらに又さはりそめぬるうすこほりかき 契 沖
 筑波ねの二をのあらしさえくゞてどはのあふみの氷ぬにけり 千 蔭
 みちの川おとこそたゆれつくはねのよはのあらしに氷はつらむ 同
 夜のまにやこほりはつらむ更ゆけの軒のかけひの音たえにけり 春 海
 つくはねの雪になりゆくあしたよりこほりそめたるどの海つら 同
 水鳥のくかにさくねのきこゆるのあさるあしまや今朝こほるらむ 技 直
 埼玉の池のみさりのやこほるらむ鴨の羽音の遠さかりゆく 同

どちはてぬこほりの下よきこゆなり猶岩くゝる谷みつの音 春 庭
 ゆくこまのひつめのあどのたまり水それさへこほる朝あらしかな 春 門
 さゆる夜のをしのつかひの夢たえてむすふの池の氷也けり 春 天
 玉はこの道ゆく人のふみしむるくつの音さへこほる夜半かき 景 樹
 關山のあらしをさむみはしり井の名さへゆるさすこほりぬにけり 廣 道

冬月

ふゆのつき

見るまゝに、身にしみて、寒さまざるよしをよみ、或はさひしく年を見はつるなど
 よむなり。

冬 さむみ 氷るしもよに あらしふく まぐれにのこる
 身に しむ 霜にさやけき 霜 かれの しもよのまくら
 さえこほる かれのゝ霜に 木葉 ちる やどれのこほる
 衣 手 も 雪にくまきき あられふる 木のはにくもる
 木のまより まやの軒はに むら時雨 空にこほれる
 高根より 冬のならひに さえくれて まさこに氷る

よもすから 光さえゆく 散はてゝ 木のまきならで
 さむしるに 空さえわたり 霜の上に 川音さえて
 さえどほる おちたる月の ひら雲 のこるくまきさ
 宿にもる 初霜かけて

後 うは玉の夜のみふれる白雪のつる月かけのつるさりけり 讀人不知
 拾 天の原空さへさえやわたるらむ氷ると見ゆる冬のよの月 惠 慶
 金 ちち山雪ふりつもる高ねよりさえてもいつる夜半の月かき 雅 光
 詞 秋の稻木のしたかけもくらかりき月の冬こそ見るへかりけれ 讀人不知
 千 夜をかさねむすふ氷の下にさへ心ふかくもすめる月かき 實 重
 同 眞柴ふくやどのあられに夢さめてありわけかたの月を見るかな 公 景
 新 冬枯の森のくち葉の霜の上におちたる月のかけのさやけき 清 輔
 同 しかの浦や遠さかりゆく波間よりこほりて出る冬のよの月 家 隆
 勅 おきまよふ玄の葉草の霜の上に夜をへて月のさえわたるかき 前 白
 同 かたしけの涙もこほる袖の上に月をやとして旅ねをそとる 教 經

代 里人もかよはぬ夜半やふけぬらむ川音さえて氷る月かけ 後 久 我
 同 山風にまくれや遠くなりぬらむ雲にたまらぬ有明の月 建 保 御 製

霜かれのいせの濱萩かりはてくまなき月に鴈なきわたる 契 沖
 さ夜中とよはふけぬらし我やどの庭に霜おきてさゆる月かけ 眞 淵
 ふゝきせしいふきおろしのさえくれて月にまつまるよこの浦浪 同
 見れはまた長きをかこつ冬の夜もわけかたをしき月のかけかき 宣 長
 敷妙の袖のこほりとさりにけりねやのひまもる冬のよの月 春 海
 いつしかと霜を落葉にふりかへて梢くまなき冬のよの月 同
 箱根路や關の夜あらしさえくゝて月かけこほるいつの海つら 千 蔭
 かれわたる庭の芝生の霜の上にはふけゆく月を見ん友もかき 同
 夜をへつゝ庭よ落葉のつもればや木の間の月のかけそほるらむ 枝 直
 つくくゝとことしもなかめはてにけりあはれとおもへ冬のよの月 景 樹
 わひにあひてさえわたるかきさの葉のさやく霜夜の有明の月 知 紀
 さえくゝし水音たえてわけぬれば氷りしまゝに月のこれり 廣 海
 木々の葉ははらひはてたる山風の行へにさゆる冬の月かな 春 夫

枯野ゆく道のひとすちはるくと見えどもさむき冬のよの月 有 功
木からしのなこりくまきさ月かけを袖さむからて見んよしもかな 由 清

千鳥 ちどり

海邊、又は水邊に、數多くひれ居る鳥あり。寒夜に鳴わたるよしなどをよむなり。

夜をさむみ さりのあきたに 鳴く千どり 友なし千鳥
もろこゑに 千鳥さみよる 川きりに 八千代と鳴く
冬されの 妻こふ千鳥 よひくは をちかへりなく
風をいたみ ねさめてきけは 夕されの 遠さがるこゑ
行かへり 磯山千どり 渡るなり こゝろとさわく
浦 風の 千代となく 浦 波 に かたもさためず
わ たる 波をちらして よひかはす 川嶋かくれ
夕きりに 沖の白洲よ 浦つたふ 遠さがるこゑ
朝さらす 跡ふみわけて ゆふかけて 月にむらがる
川 千鳥 聲さたまらぬ 磯ちどり 夕かたまけて

濱 千鳥 聲うらふれて 浦 千鳥 こぼらぬこゑ
さよちどり ひれたつ千鳥 玄はなく 霜ふかき夜
友 千鳥 聲もさむけに

●名所

賀茂川 山城 宇治川 同 淀川 同 須磨 播磨 明石 同
住吉 攝津 難波 潟 同 あすか川 大和 佐保川 同 天の橋立 丹後
清見 瀧 駿河 隅田川 武蔵

万 近江の海夕なみ千鳥をかきけは心もしぬにいにしへおもはゆ 人 磨
同 うは玉の夜のふけゆけは久木生ふる清き川原に千鳥しはさく 赤 人
拾 おもひかね妹かりゆけは冬の夜の川風さむみ千鳥なく也 貫 之
同 夕くれはさはの川原の川きりに友まとはせる千鳥さく也 友 則
同 あかつきのねさめの千鳥たかためかさほの川原にをちかへりなく 能 宣
後拾 難波かた朝みつ沙にさく千鳥浦つたひとる聲そさこゆる 相 模
千 岩こゆるおら磯さみにたつ千鳥心さらすや浦つたふらむ 道 因

新 風さゆる富嶋か磯のむら千鳥立居の波のこゝろありけり 季 伊勢大輔 經
 同 ゆくさまはさ夜ふけぬれと千鳥なくさはの川原は過うかりけり 具 伊勢大輔 經
 勅 さ夜千鳥みきとふきこす汐風に浦より外の友さそふなり 具 伊勢大輔 經
 代 高砂の尾上の月やふけぬらむ川音すみてちどり鳴あり 建保御製
 同 うちわたす大川のへの瀬をひろみおよはぬ聲に千鳥鳴なり 行 意
 夕されは海上かたの沖の風雲井にふきて千鳥鳴あり 眞 淵
 かまくらのよるの山おろしむければみきのせ川に千鳥鳴也 同
 住よしの松風寒みねさむれば心ほそ江にちどり鳴あり 契 沖
 あら磯の波にくたくる月かけを翹よかけてあく千鳥かき 千 蔭
 なく聲も波にまされてはるくどゆくかたしらぬ浦ちどり哉 同 長
 みなど江におひ手まつまのかち枕ねさめさむけく千どり鳴あり 公 府
 よる波にみたるとすれと浦おれてまたたちかへるむら千鳥かき 春 海
 冬の夜の月かけふけてひくしはの遠つひかたに千どり鳴也 蘆 庵
 風さむみ前のを川の水かれて心ほそくもちどりなくこゑ 枝 直

まほの山うちこえさけの夕ちどり月もさし出の磯に鳴あり 長 流
 しほみてる洲崎はあれて有明の月よりうへをゆく千鳥かき 尊 朝
 かりくらししかへるかた野の舟まては川上遠く千どり鳴あり 謙
 常にせぬ千鳥のこゑそきこゆなる遠山おろしこよひふくらむ 景 樹
 風わたる曾我の河すけうちさひき夕波さむく千どり鳴なり 春 夫
 明石かたせとふく風もまづまりて有あけの月に千鳥鳴あり 永 章
 わくる夜を月にやかこつ大どもの松より西に千鳥さく也 芳 樹
 神さひの杜のさかき葉霜見えて河原の千鳥聲ふけにけり 知 紀
 二かたに聲もわかれて川嶋のさかれの末に千どり鳴あり 内 遠
 霜まよふ新さきもりか袖のうへに夕さみかけて千鳥鳴也 諸 平

水鳥 みつこり

水鳥といへい、鴨、鶺鴒、鳩、雁、鶯、かもめの類、總てよむへし、但必冬と水どのよせあるべきあり。

あさりする 上毛の霜を 池 水 に 下やすからぬ

ひどりね	早瀬になる	うきまくら	汀にさわく
むれゐる	もみちにまじる	ふみしたき	青葉かすそふ
すた	島めぐり行き	あみこえて	つばさやすめす
さゆるよの	つゝらの床に	氷るらん	氷の上に
山かけの	うかひてあそぶ	かよひちも	島めぐりゆき
よもすから	かつく岩まに	さえく	鴉のかよひち
うきねせし	羽風もこぼる	氷るよの	をしのもろこゑ
潮みちて	世をうき鳥	こもまくら	うきねのをしの
鴨つく島	寒き芦間に	あちひら	ひどりねのをし
あしかもの	かもの水かき	かつくには	ひらまつくには
おくれこし	冬田にのこる	霜をはぶく	夢もこぼる

●名所

隅田川 武蔵	不忍池 同	大井川 山城	廣澤池 同	吉野川 大和
夏筈川 同	住の江 攝津	三島江 同	志賀浦 近江	比良の湊 同

万	よしのなるなつみの川の川よどに鴨をなくある山かけにして	湯原王
後	まこもかる堀江にうきてぬる鴨の今夜の霜にいかになふらむ	讀人不知
後	夜をさむみねさめてきけはをしそなくはらひもあへす霜やかくらむ	同
拾	水鳥の下安からぬおもひかはあたりの水もこぼらさりけり	同
金	あかくに霜のうはきをかさねてやをしの毛衣さえまさるらむ	六條
同	さむしろにおもひこそやれ笹の葉のさゆる霜夜のをしのひどりね	顯季
同	波まくらいかにうきねをさたむらむこぼるます田の池のをし鳥	内侍
千	をし鳥のうきねの床やあれぬらむつらゝるにけりこやの池水	經房
同	かく霜をはらひかねてやををれふすかつみか下に鴛のなくらむ	重保
玉	朝あけのこぼる波間に立居する羽音もさむきいけのむら鳥	廣儀門院
堀	夜もすから霜やかくらむ水鳥のはらふ羽音のたえすきこゆる	顯季
同	池水にむれてかり居る水鳥の羽風に波やたちさわくらむ	肥後
代	風わたる浦のみあとの沙さきよあみのりこえてかもめ鳴也	基氏
同	朝こぼりどけにけらしな水のなにやとる鴉とりゆきなく也	順庵
	くたけらる氷と見えて水鳥の羽音にさわく池の月かけ	蘆庵

あぢむらの羽さる沖に霜ちりて夕日さひしき埴安の池 源 子
 年さむき池のみきはの松か根に鴨の青羽もあらぬにけり 枝 直
 山河のはやくこほりやどちぬらむさどわの水にかもそむれる 千 蔭
 わつこほりひまもあつみの川淀に床しめわひてかもそ鳴なる 宣 長
 そことなく浮ねきらふる水鳥の數あらぬれてこほる冬かき 春 夫
 風さゆる磯間の浦の夕きみにあられみたれてかもめたつ也 黄 中
 こやの池をむれて朝たつ水鳥にしんしんくもる猪名の松原 景 樹
 冬の池にぬふれるをしの一つかひいかにとけたる心なるらむ 同 同
 あらしふくさ山か池もなく鴨の夢もこほりや結ひはてけむ 同 同
 山のうへにあどいとまらぬものおれとしんしん見ゆる鴉のかよひち 同 邦
 山風につばさふかれて寒き夜もともねのをしのむつまじきかき 邦 直
 霜はらふ翅も見えて冬かれのあし間の月にをしそさくなる 尊 孫

○十二月

綱代

あしろ あしろ木

氷魚をどらんために、川瀬に設くるもをいふあり、冬のもさかに、することなれば、
 守る人のさむきよしより、氷り居るさまなど、さまざまによむあり。

河 風 に 涙のよなく あしろ人 こほるまらあみ
 月 かけ に せいのあしろ木 よもすから 川かどさえて
 かゝり火の 小夜風さむく あしろ守る うちもねぬ夜
 よるひをの さゆる川戸 かけうそき 氷魚のつかひ
 夜をかさね まつむみくづ てる月に ふけゆくなみ
 床さむみ かゝり火しるさ あしろうつ さむさもしらす

●名所

宇治川 山城

田上川 近江

近江の海 同

吉野川 大和

拾 月かけの田上の川にあかけれあしろにひをのよるも見えけり 元 輔
 六 落つもる紅葉見れば百とせの秋のとまりはあしろ也けり 貫 之
 金 月清み瀬々のあしろによるひをは玉もにさゆる氷也けり 經 信
 詞 み山にはあらしやいたくさえぬらんあしろもたゝにもみち也けり 兼 盛

波の上のあしるのか、りまらむ夜にさほこかる、いもみちなりけり
 埋火のもとにも風をいどふ夜にあしるもる身もあればありけり
 ふくる夜の山風さむみあしる木によせていこほるうちの川波
 あしるもるうちの川波音ふけてあり明さむしか、り火のかけ
 うちけふる水にまきれてあかつきはありとも見えぬあしるもりかな
 田上の山の木からしさえく来てあしるのか、り今かたくらむ
 あしる木にいさよふ波の音く来てか、り火さむしうちの川風
 内景遠
 春海
 たみ子
 利和
 勝繼
 有影
 景樹

霰

あられ

音さわかしく、俄にふりくるけしきをも、又夜の枕をおどろかす事をもよむあり。
 一 玄きり 玉とくたけて あられふる あらしにこほる
 曉 の 竹の小枝に さゝのはに ぬきとめぬ玉
 玉 あられ 音はかりして まきのや 月にみかける
 板 まより 雪ふきまかせて 月くらき ねやもるあられ
 板 ひさし ちるやあられ 小夜ふけて あられにさやく

風さむし 庭にたまらぬ か れ 野 葉ひろくまかし
 たはしる 風にたくひて 窓たゝく 雲のひとむら
 葉をつたふ 落葉の上に 風ませに 夢おどろかそ
 玉をしく 横さるあられ 玉 笹 に あられたはしる

万 あられふり板間風ふきさむき夜やはた野に今宵われひとりねん 讀人不知
 古 み山にのあられふるらし外山ある正木のかつら色つきにけり 同
 後 かきくらしあられふりしけ白玉をまける庭ども人の見るへく 同
 後 せふ人もあき芦ふきの我宿のふるあられさへ音せさりけり 俊 綱
 金 はし鷹のしらふに色やまかふらむどかへる山にわられふるあり 匡 房
 千 さゆる夜の櫛の板屋のひとりねに心くたけとあられふるあり 良 經
 新 ねやの上にかた枝さしおほふ外面ある葉廣柏にわられふるあり 能 因
 同 さゝ波や志賀のから崎風さえて比良の高ねにわられふるあり 法性寺入道
 ありま山うきたつ雲に風そひてあられたはしるいさみの、原 契 沖
 真 淵

山風のはかにさそふまもと原梢みたれてあられふるあり 春 海
 わけゆけいむこの山風さえく／＼袖に玉ちるあられまつ原 枝 直
 おどろかす楨の板屋の玉あられさひしくもあられわかねさめかな 景 樹
 小山田のそほつの身のけいよたちておろす嵐にふるあられかな 信 友
 まどちかき竹のまけみの葉こもりにまろひわひたる玉あられかな 尊 晴
 小さく原夕日のかげいさし香からたまりかねてもちるあられかな 春 夫
 冬深くさゆるあらしにさそはれてこほるまくれやあられなるらむ 春 庭

霽

みぞれ

雨に雪のまじりてふるをいふあり。寒さの堪へかたきよし香とよむあり。

風 寒 さ 雪 と い なら て ふ し ま は の 雫 に そ し る
 ぬれどほる けふもみぞれの みぞれつゝ こほりもとてぬ
 袖 さ ゆ る 夜 の み ぞ れ の 風 と や み た る ひ つ た ひ に
 み ぞ れ す る ふ り も た ま ら ぬ か さ く も り み ぞ れ に か せ る

堀

ひまをあらみ竹のすかきの下さえてよき／＼ふるのみぞれありけり 忠 房

同

あらし山雪けの空になりぬれいさつこの里にみぞれふりつゝ 仲 實

雪にさるたかねいはやくましろにてふもとのさどにあられふるあり 春 海
まくるいみぞれなるらしこのゆふへ松の葉まろくありにけるかき 景 樹

雪

ゆき

冬にありて、さむさのまなるころ、やう／＼ふりいで、一しは身にまみぬるとさどよむへし。或の時さらぬ花といふやうに、つ／＼けたるもあり。

初雪

はつゆき

冬にありて、はしめてふる雪あり。

朝雪

あしたのゆき あさのゆき

朝戸出のけしきより、けふも寒からん香とよむあり。

夕雪

ゆふへのゆき

前の反あり。

夜雪

よるのゆき

さゆる夜に、ふりつむるまあり。

山雪

さとのゆき

専ら、けしきをいふあり。

野雪

のゆき

あへて、白くふりつむりたるまをよむなり。

水邊雪

みづぎはのゆき

みきはらゆき

海邊雪

うみべのゆき

らづれも、そのけしきをいふあり。

都雪

みやこのゆき

大路も真白ありしこと、さては九重の御庭の事をもよむあり。

山家雪

やまがらのゆき

淋しく、人の問ひくることも、絶ゆるよしをいへり。

この他、草木にかゝれる雪のまをよむ、その物によりて、さまざまに考へつゝも
のあり。

見るまゝに、高根のふき、花とのみ、昔の葉しのき

ふりつむる	いやしきふれり	冬くれて	つむるまゝある
庭の面の	まゐるしの掉	うつもれて	とばれぬ庭
雪をれの	けさふりをむる	道もあし	拂はぬ庭に
雪のふち	松のひまにも	このころの	夜のまにつもる
大ゆき	つきてこそふれ	うつもれて	まよはぬこま
はたれ	それとも見えす	たわむまで	初雪まゐりし
雪かく	八重ふりしける	庭のおもの	かつくたまる
雪ままき	雪のわけほの	まゐるたへに	ふりもつもらぬ
つもる雪	下折のこゑ	初みゆき	梢にかろく
日かすふる	雪の花その	野も山も	里のしくれて
けぬか上に	雪の山もど	ふり出てゝ	都にまらぬ
ふりつくし	けさめつらしき	待ちしまに	けさまたうすき
ふりかゝる	明ほのゝそら	朝戸出の	庭におどろく
ふみわくる	つもるまゐら雪	軒の上	雪より出つる
雪まゐるき	青根か峯も	ひとつなる	楨の葉またり

雪 け あすさへふらり 初ゆきの 八重山ふかく
 山いいつこ 軒よりたかき 朝 ちき 明けぬと思へは
 はれやらぬ けさふる雪 朝 月 夜 夕やみもあし
 夕つゝの 夜あろの雪 さよ中 残る夜さひし
 ふもとまで つま木の道 小さゝ原 すゝのまのや
 水 き は こぼりはてたる 雪のふりぬ 里わかぬ雪
 ふりおもる 雪をれの聲

万 あし引の山路もえらそ白かしの枝もどをに雪のふれは 讀人不知
 同 池の上の松のうれ葉にふる雪は五百重ふりしけあすさへも見む 同
 同 あし引の山かも高き巻向のさしの小松にみゆきふるなり 同
 同 夜をさむみ朝戸をひらき出て見れば庭もまはらにみ雪つもれり 同
 同 夕されは衣手さむし高まどの山の木毎に雪そふりたる 同
 古 ふるさとはよしの山し近けれ一日もみ雪ふらぬ日はあし 同
 同 みよし野の山の白雪つもるらしふるさどさむくありまさるなり 是 則

同 朝ほらけ有明の月と見るまでによし野のさどにふれる白雪 同
 後 ぬは玉のよるのみふれる白雪にてる月かけのつもるなりけり 讀人不知
 拾 見わたせの松の葉まろきよしの山いくよつもれる雪にかあるらむ 兼 盛
 同 山さとの雪ふりつみて道もあし今日こむ人をあはれと見む 同
 後拾 おく山の岩かきもみちちりはて、朽葉か上に雪そつもれる 匡 房
 詞 まつ人の今もきたらはいか、せむふまゝくをしき庭の雪かあ 和泉式部
 千 おどもたえまをりも雪にうつもれてかへる山路にまよひぬるかあ 實 房
 同 ま柴かる小野の細道あどたえて深くも雪のかりにけるかあ 爲 季
 同 朝戸あけて見るそさひしき片岡の櫓の廣葉にふれる白雪 經 信
 同 たどへてもいはんかたあし月かけに薄雲かけてふれるしら雪 仁和寺入道
 同 外山にの柴の下葉もちりはて、遠の高ねに雪ふりにけり 顯 輔
 同 浪間より見えしけしきそかはりける雪ふりにけり松かうら嶋 顯 昭
 同 山さどのかきねの雪にうつもれて野へとひとつにかりにけるかあ 右大臣
 同 ふる雪に軒はの竹もうつもれて友こそあけれふゆの山里 讀人不知
 同 くれ竹の折ふす音のあかりせの夜ふかき雪をいかてあらし 明 兼

新 あどもちく雪ふるさとのあれにけりいつれ昔のかきねをらむ
 赤 染
 同 さひしさをいかにせよとて岡へある櫓のはしたり雪のふるらむ
 國 房
 同 雪ふれのみねのま柵うつもれて月よみかける天のかく山
 後 成
 同 さむしろの夜半の衣手さえくして初雪をろし岡への松
 式子内親王
 同 音羽山さやかに見せる白雪をわけぬとつくるどりの聲かき
 高倉院
 同 ふりをむる今朝たに人のまたれつるみ山の里の雪の夕くれ
 寂 蓮
 同 松か根に尾花かりしき夜もすから片しく袖に雪のふりつゝ
 顯 季
 同 ふる雪にたく藁のけふりかきたえてさひしくもあるか鹽かまの浦
 前 關 白
 同 夢かよふ道さへたえてくれ竹のふしみのさとの雪の下折
 有 家
 同 まつ人の麓の道やたえぬらむ軒はの杉に雪かもあるあり
 定 家
 同 駒どめて袖うちばらふかけもなしさ野のわたりの雪の夕くれ
 同 世と共にいつかのきえむふしの山けふりよかれてつる白雪
 範 宗
 同 玉のはきみどりの色も見えぬまで巨勢の冬野の雪ふりにけり
 範 兼
 同 ふみしける鴉のあとさへをしきかき氷の上にもれるまら雪
 康資王
 代 よし野川岩こす風のさえしよりかねのみたけの雪をつもれる
 仁和寺入道

同 氷たにまた山水にむすのねとひらの高ねの雪ふりにけり
 惠 慶
 同 雪ふかきかまへの濱に風ふけの松のうれこす沖つしら波
 實 守
 同 高ねにのけぬか上にやつもるらむふしのすそ野の今朝の初雪
 内 大 臣
 同 ふきはらふあらしのよわる下折の雪にこゑあるまどのくれ竹
 伊 平
 契 沖
 同 雪のまたおもかけはかりふりそめてあひきをばてぬまの、かや原
 同 あらし山やた野のあさちかれしよりふもとにさむくあわ雪をふる
 同 春 淵
 同 はしたてのくらはし山に雲さらひ高市國原雪ふりにけり
 同 雪はる、朝けに見ればふしのねのふもととなりけりむさし野の原
 同 初み雪はれたる朝にみわたせば里のけふりもめつらしきかき
 同 うちさらしみ雪ふるなりよしの山いりにし人やいかにまむらむ
 同 わかやどの庭にはあどもちかりけり落葉かうへにつもるまら雪
 同 玄めおきしまかきになひく吳竹の世にめつらしく見ゆる雪かな
 同 濱ゆふもうつもればて、しら雪のもへにつもるみくまの、浦
 宣 長
 同 まれにたにどはれぬやどは日ふれとつもれるまの庭の白雪
 同 まつ人のあどころたえね春のこむ道をはのこせ庭のしら雪
 同

あれど、専ら冬のわざあれ、たゞどかりどのみいひてもよきなり。

は	や	た	か	野	さ	れ	の	た	か	ど	か	へ	る	雨	か	ほ	ひ	羽								
た	か	ひ	と	は	と	や	の	た	か	と	か	り	鳥	か	ら	み	の	つ	め							
朝	た	か	鷹	を	あ	は	す	餌	袋	ま	ひ	か	つ	る	羽	音	に	あ	は	す						
風	あ	か	れ	お	も	さ	ら	ひ	す	ま	ひ	か	つ	る	羽	音	に	あ	は	す						
と	や	か	へ	り	鳥	ふ	み	た	て	か	へ	り	さ	す	を	ふ	さ	の	す	い						
大	た	か	あ	ら	し	に	き	ほ	ふ	か	り	く	ら	す	日	も	お	ち	く	さ						
狩	こ	ろ	も	あ	さ	る	き	い	す	夕	か	り	手	ち	ら	し	の	た	か	ひ						
空	と	ど	め	さ	し	の	す	朝	か	り	霜	す	り	の	た	か	ひ	つ	き	の	み	か	り			
駒	あ	へ	て	た	つ	る	つ	か	ひ	ま	す	ら	を	霜	す	り	の	た	か	ひ	つ	き	の	み	か	り

●名所

宇陀野 山城 栗栖野 同 奈良志の岡 大和 片岡山 同 飛火野 同
 安達山 陸奥

千 夕まくれ山かたつきてたつ鳥の羽音に鷹をあはせつるかき 俊 頼

新	か	り	く	ら	し	か	た	野	の	ま	柴	を	り	し	き	て	淀	の	川	瀬	の	月	を	見	る	か	き	公	衛				
同	み	か	り	す	と	鳥	立	の	原	を	あ	さ	り	つ	か	た	野	の	野	へ	に	今	日	も	く	ら	し	つ	法	性	寺	入	道
月	草	ふ	か	み	あ	さ	る	き	い	す	や	た	ち	ぬ	ら	む	す	の	音	こ	そ	空	に	き	こ	ゆ	れ	俊	成	女			
代	は	し	鷹	の	す	の	篠	原	か	り	く	れ	て	入	日	の	岡	に	き	い	す	あ	く	あ	り	土	御	門	院				
	ふ	る	雪	の	ま	ら	ふ	の	鷹	を	手	に	す	ゑ	て	む	さ	し	の	原	に	い	て	に	け	る	か	き	眞	淵			
	風	ま	し	り	あ	ら	れ	た	は	し	る	朝	か	り	に	手	あ	れ	の	鷹	の	き	は	ひ	て	そ	ゆ	く	譽	正			
	あ	ら	鷹	の	す	さ	ふ	心	を	ひ	き	と	め	て	駒	の	か	け	よ	り	あ	は	せ	つ	る	か	き	清	香				
	衣	手	に	き	の	ふ	い	す	り	し	小	萩	原	朝	立	そ	ら	し	鳥	か	り	す	る	か	き	千	蔭						
	ま	す	ら	を	の	か	り	場	の	小	野	に	と	る	弓	の	た	わ	む	は	か	り	に	吹	く	嵐	か	な	清	光			
	み	か	り	野	や	ね	く	ら	の	鳥	も	は	し	鷹	の	と	か	へ	る	か	け	に	た	ち	さ	わ	く	あ	り	譽	道		
	鳥	さ	け	ふ	の	聲	も	み	た	れ	て	き	こ	ゆ	め	り	夕	山	ふ	き	今	や	た	つ	ら	む	譽	重					

炭竈

すみかま

山の上にてたきたつる、炭竈の煙の立つさまをよむあり。

炭かまの 雪にうもれて 深山木を すみやくころい

山 山ふかく ころつむつまき 打ちあひき よそめ霞める
 淋 しさの けふりの末や たえすたつ 炭やきころも
 峯 たかし 吹くとも見えす ころつみて 賤かすさひ
 す み 木 炭の 小車 外 山 世にすみかま
 たきそへて けふりさひしき 立ちのほる 烟ふさしく

●名所

八瀬山城 大原山同 小鹽山同 槇の尾同

金 すみかまに立つけふりさへ小野山の雪けの雲とみゆるかりけり 師 時
 新 日敷ふる雪けにまさる炭かまのけふりもさひし大はらのさと 式子内親王
 堀 さひしさの冬こそまされ大原ややくそみかまの烟のみして 顯 仲
 かりはひの細きまもの末の雲あひくもあはれ小野のすみかま 祐 之
 山めぐる雲にかくれて夕けふり空よそあひく谷のすみかま 春 門
 ひえの根に初雪ふれり今よりや小野のすみかまたきまさるらん 景 樹
 雲の皆かへりつくして一すちのけふりまかぬみねのすみかま 定 信

爐火

うらみひ

爐火のもとに集りて、冬の寒さを凌ぐよしのとをよむあり。今の火鉢などもあかし。

ふくくる夜 かたらひかはす 冬こもり ねられぬ夜は
 よりそふ ふせこの下の そらたき 梅か香そする
 火 桶 さえとほる夜 ねやのとも 寒さわする
 ふきおこす 灰の手すさひ おき 火 更くるもまらぬ
 むつかたり 板間の風 ほたの火 さあから春の
 す ひ つ ほのかにむかふ 老の友 かきおこしつゝ

新 ちか／＼にきえはきえきて埋火のいきてかひなき世にもあるかな 永 縁
 玉 うつみ火をよそに見るこそあはれなれきゆればおなし灰となる身を 相 摸
 風 うつみ火よすこし春あるこゝちして夜深き雪をなくさむるかな 俊 成
 堀 ねさめしてかきおどろかす埋火を冬の夜ふかき友にはありける 紀 伊
 うつみ火のものと心の心かはらねとあたりはなれぬ身となりけり 黄 中

ふみ見つゝひとりおもへる埋火にむかしの人もよりてありけり
底ぬるき火桶はかりを友としてくらす老ともありにけるかき
埋火の玄ろくなるまでかたる夜は下のおもひものこらさりけり

千景
橋樹紀

早梅

ふちのうめ はやまきのうめ

梅は春さくべきものなるに、寒中にはやく咲くを、早梅といふなり。

雪のうちには 春のとなりは 冬くさく 春に先たつ
さきそむる 冬こもりせぬ 雪と見え 雪の下ある
梅のはつ花 鶯もえらす 春またて はるみそむる
おもひきや 菊より後に またきさく 色香ことなる
冬木の梅 にはひもさむし

万 今日よりし雪にさほひて我宿の冬木の梅は花さきにけり 家持
拾 梅の花春よりさきにささしかどみる人まれ雪のふりつゝ 読人不知
同 梅の花にはひの深く見えつるは春の隣のちかきなりけり 元方

積

鶯のあかぬはかりそらめの花にはひの春にかはらさりけり 顯方
大かたの春たに花のまたるゝをどしのうちにもにはふ梅か香 眞淵
色うせしわれや寺になり年くれて梅は花にもかへりけるかな 景樹
梅の花さけるかさねをたつぬれば必ず春のとなりなりけり 直好
雪ちりてまた春風のしらぬまはにはひもさむし梅のはつ花 長穂

歳暮

としのくれ

惜年

としをいしむ

除夜

としのはての

十二月の、残り少きくまりたるに、年の早きことを思ひ、春の設けをさすまで。
さまざまによみやうあるべし。

どしはつる 日かす少きに ぞくるとし 年あみのとやま
どしの暮 松火ふりたて 春のどかり 年のくれかた
どしの末 さゝかにかくる をしめども 行く年の矢
どしの市 行くどしのみち 暮れはつる いたつらに
夜半のかね こよひはかり のこる一夜

天	天つ御祖の神	國	つ	神	八百萬の神
皇	天つやしろ	神	な	から	國つやしろ
神	神のみいつ	ひ	ろ	前	神のさきはひ
手	天てらす神	神	葉	に	神や守らむ
ま	いのる心に	玉	垣		神やうくらむ
矛	神のまに	瑞	垣		神やしろらむ
宮	一すちに	ま	す	鏡	かけてそののる
千	あけの玉垣	い	垣		いく千代かけて
神	森のともし火	神	つ	かさ	神にまかせて
は	神代なから	世	を	てらす	朝くらの聲
ぬ	神代のま	ゆ	ふ	かけて	御代の行末
ゆ	國やすかれと	神	と	り	八ひら手の聲

拾 瑞垣の久しかるへき君か代を天照る神や空に知るらむ 爲 忠
 新 神風やいすゝの川の宮柱いく千代すめと立てはしめけむ 俊 成

風 天つ神國つやしろをいはひてそわか葦原の國のをさまる 後宇多院
 同 神風にみたれしちりも治りぬ天てらす日のあきらけき世は 花園帝
 同 天つ神國つ社どわかれてもまことをつくす道はかはらし 實 兼
 新千 あまの戸のあけし月日もかはらぬは神代からの光きりけり 後醍醐帝
 新葉 九重に今もますみの鏡こそ猶世をてらすひかりなりけれ 後村上帝
 天 神こそは野をも山をもつくりかけ人にまことの道をふめとて 基 家
 新拾 のどかある春の祭の花しつめ風をさまれど猶いのるらし 基 平
 新續 道しあれば猶たのむかき偽をたゝすの森の神にまかせて 茂 重
 五十鈴川高やかふけるみあらかに神代の手ふりいちしるさかも 千 蔭
 みつるきをいはひそめてし昔より世をまもりまよふのみ社 同
 千早振神代おはえてあかつきの長鳴鳥にあくる御戸かき 同
 葉かへせぬかへの社にぬさつまりとさきはに君か代をいのるかき 同
 花をしも見つゝこゆれば男山よにねきこともあらぬ今日かき 筑波子
 たれも皆さしてあふかむ陰えけき三笠の山の神のめくみを 涌 蓮
 たかためとたれか思はむ世を守る天つやしろも國つやしろも 春 滿

ものいはと神路の山の神杉にすきしむかしの事とどはまし 宣
 さかえませ千代ませ君といのるある心のいろかわけの玉垣 枝
 かく山やみねのまさかき幾代へてまみさひけらし神の御前に 春
 思ふことみつの社のみしめ繩たれもひかれつ神のこゝろに 同
 柳葉にいはいでかけし白ゆふのあひくや神の心なるらむ 有
 功 海 直 長

○人倫

君臣

きみれみ

まろしめす 民やすかれと つかふへき 君にさしけし命
 天 日 嗣 國まつかにと 高御くら わか身わすれて
 朝 政 君か大御代 うつの御子 神のみ末
 すめらわか 遠すめろきの 國のおや あやにかしこき
 大御かど 中今の御代 みこの命 さしのはる日影
 つかさく 大君に仕へ奉る かみのこ ものつかさ人
 宮 人 千名の五百名 かへりこぬ 御民われ

君 臣 の 惠あまねき われもまた 大宮どころ
 勅なれぬ 松のみさをを 九重の 雲井のたつも
 君のため 君か代いのる 一すちに 四方の民草
 臣 の 道 つかふる道 草むす屍
 御門へさらぬ 君のため またかふ臣 君のまに

万 大君のみことかしてみ青雲のたなひく山をこえて來ぬかも 笠 磨
 同 武士のおみの男は大君のまけのまにくさくとふものぞ 讀人不知
 同 御民われいけるあるしあり天地のさかゆる時にあへらく思へは 岡 磨
 同 今日よりいかへりみあくて大君のまこのみたてといてたつわれの 與 曾 布
 同 大君の千年にまさむ白雲もみふねの山にたゆる日あらめや 春 日 王
 古 筑波ねのこのもかのもにかけのあれど君かみかけにますかけのあし 讀人不知
 同 みの、國關の藤川たえすして君につかへむ萬代までに 同
 新 君をいのる心の色を人とはとたゝすの森のわけの玉垣 慈 圓
 新勅撰 山はさけ海はおせなむ世ありとも君にふた心我あらめやも 實 朝

天 年をへて生ひそふ竹の園のうちを盡せざるへき君か千代か
 玉 いたつらに安きわか身とはつかしきくらしむ民のこゝろ思へは
 續後 夜をさむみねやの姿のさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ
 續後拾 世治まり民安かれといのるこそ我身につきぬ思ひなりけれ
 風 沈む身も赤におもひけむさほ川のふかきめくみのかゝりける世に
 新千 民のため時ある雨をいのるとも老ちてや田子の早苗とらむ
 同 いそくある秋のきぬたの音にこそ夜寒の民の心をもしれ
 同 時しわれは谷より出つる鶯に世をたすくへき人を問はとや
 同 鈴鹿川八十瀬の波のたちぬにも我身のための世をいのらす
 新葉 鳥の音におとるかされて曉のねさめまつかに世をおもふか
 同 つかふへき人々のとると山ふかみ松のどさしも猶そたつねむ
 同 おもひかね入りにし山をわけすてまよふうき世もたゝ君のため
 同 つかふとてまつふみわけし九重の雲井の庭の雪のわけはの
 同 君のため世のため赤にかをしからむ捨てゝかひある命をりせり
 新拾 五代まで君につかへて年寒き松のこゝろならひきにけり
 有 家
 伏見帝
 後鳥羽帝
 後醍醐帝
 内 經
 後醍醐帝
 同
 同
 崇光帝
 後村上帝
 同
 同
 師 賢
 宗良親王
 公 賢

續拾 鳥の音を曉毎にきれにける君につかふる道いとくどて
 續撰 くもり赤き天つ日つきをみつかきのうけて久しき身にいのるか
 新續 身につもる年に萬代とりそへて今日わか君にたてまつるか
 同 天の下のとある世となりにけり君かめくみや空にみちぬる
 同 今のはやははえと年もくれにけり身をわそれつゝつかへこしまに
 歌合 のかれても身のかく山の榊葉のさかゆく代をいのらさらめや
 いまさらになにか思はむはやくより君にまたせるかはねあるはや
 天のこと君をおふくも地のことまたかふ臣のあれのありけり
 爲 氏
 後奈良帝
 康資王母
 雅 孝
 有 光
 春 滿
 魚 彦
 重 胤

父子

おやを思ふ 父のみの父の命 子ゆゑに 我か父母
 一すちに 母そはの母の命 きてしこ おやのためとて
 若 草 人のおやの わく子 人と生れて
 心 あり おやのめくみの たらちねの かしらかききて
 わかおやの 玉にもまさる ちゝふの山の はゝその森